

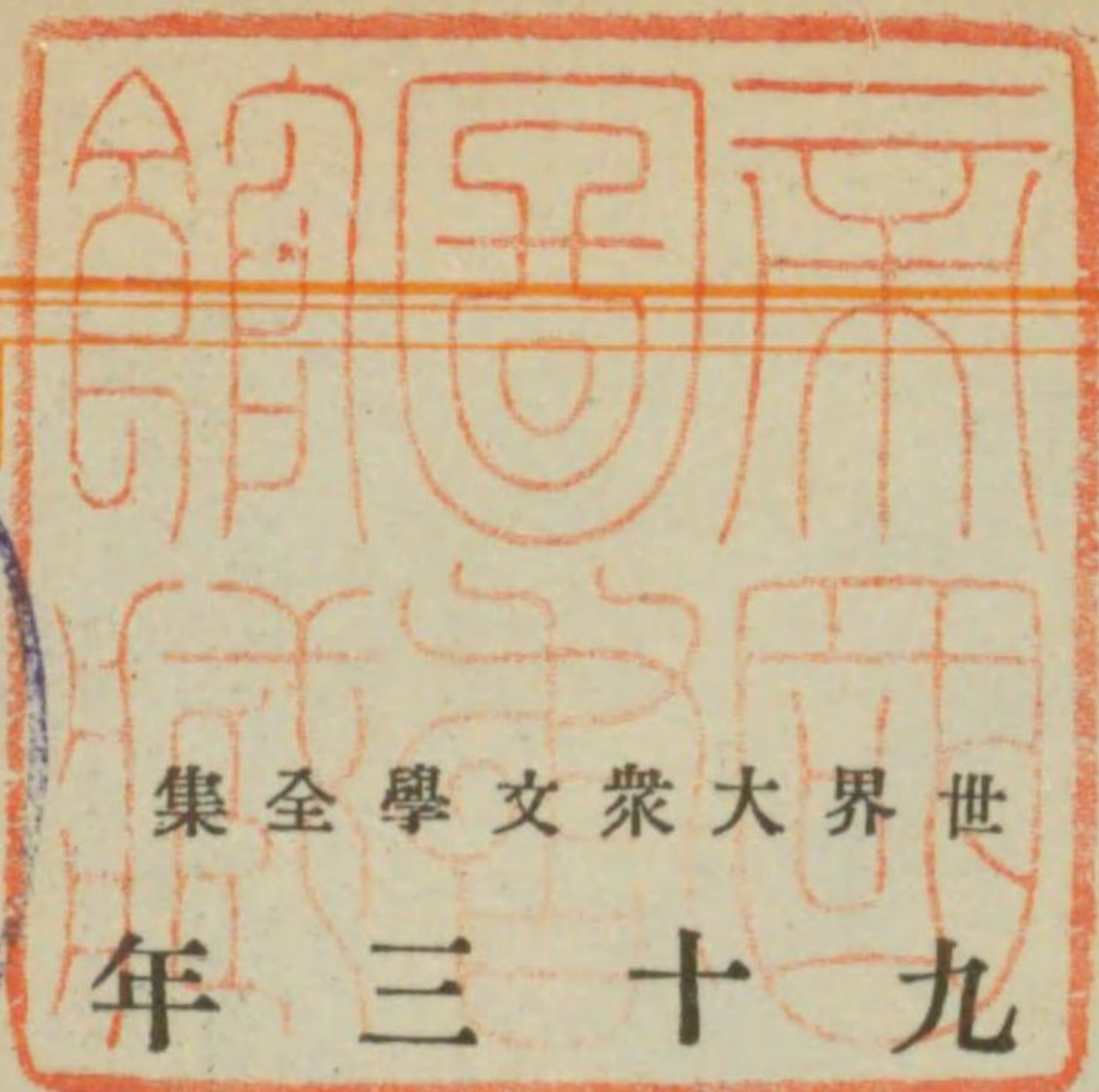
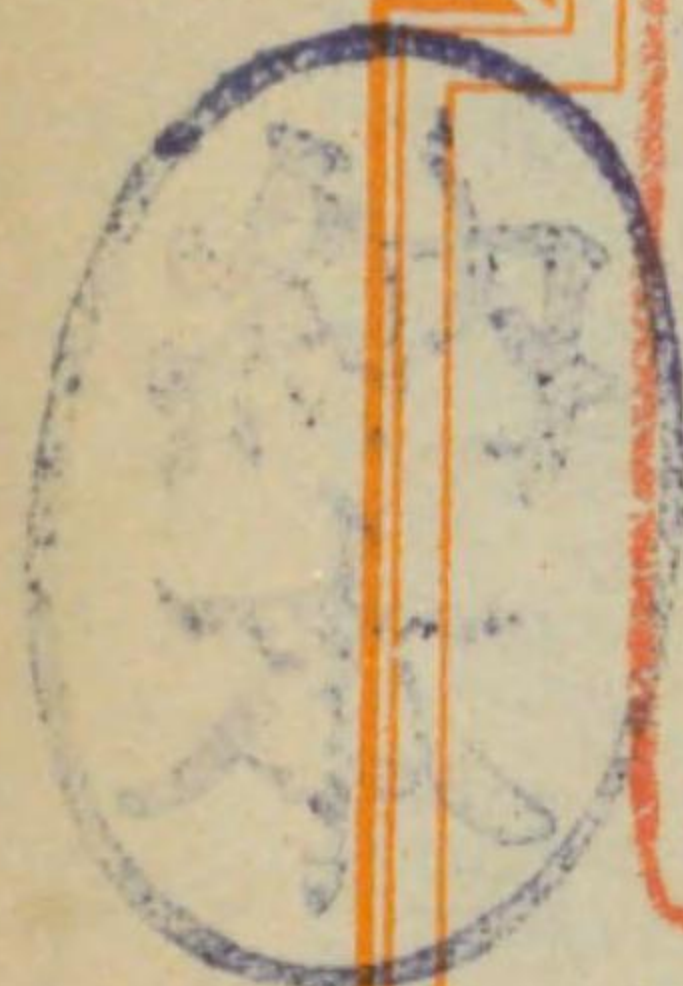
569

569-61



1200501517045

421



世界大衆文學全集
九 十 三 年

—
早坂二郎



改造社



ツナトシラ！て撃！へ組。ろけ附片あさ。はつるてし探の等様貴、キチしぬ。
(照参頁八二一)るゐてれらけだはかツケヤジル皮羊山。たし出きつを影はク



— ヴ ゴ — ユ



郎 二 坂 早

譯 序

「九十三年」は文豪ヴィクトル・ユーゴーの「カトルヴァン・トレーズ」(Victor Hugo: Quatrevingt-treize) を譯したものである。

ユーゴーが十九世紀ロマンチズムの嚆將として文名世界に赫々たることは更めていふまでもないが、日本の讀者の間にはその代表的名作「レ・ミゼラブル」以外には餘り親まれてゐなかつたのは事實である。この「九十三年」の如き、小説としてはユーゴー最後の大作であり、その構想の雄大さに於て遙かに「レ・ミゼラブル」を凌ぐ異彩ある革命傳奇小説であるが、それを今讀者の前に提供し得るのは獨り譯者の喜びのみではあるまい。「九十三年」といへば千七百九十二年、佛蘭西革命の最も暗黒な爛熟期である。作者はこの血腥い一年の中に罪惡に満ちた封建制度没落の輓歌を奏し、新社會創建のために血塗るな闘争を賭する革命精神を語り、血肉師弟の間の切つても切れぬ恩愛の情がこの旋風の如き過渡期の惱を偲み抜いて、遂に革命の彼岸、人類の終局的に眼差すべき「人道」の大光明に光被されるといふ、ヒュ머니テイの勝利を高調してゐる。佛蘭西革命の最も劇的な縮圖であり、最も人間味に富んだ革命外史ともいふべきものが本書である。殊に革命の首腦者ロベスピエール、ダントン、マラー等の實在の人物を拉し來つて大討論を展開し、革命議會の雰圍氣を映出して時代精神を躍如たらしめたあたりは、ユーゴー

目次

第一部 海上篇

第一篇 ラ・ソードレーの森……………二〇

第二篇 軍艦クレモア號……………三二

一、英佛の戦……………三二

二、艦上の夜と傾乗者……………三三

三、貴族と平民の闘争……………三七

四、禍……………三九

五、螺旋と廻轉……………四八

六、天秤の兩端……………五〇

七、船出する者は籤抽く者……………五八

八、〇 || 〇 〇 〇……………六三

九、誰かゝ逃げる……………七〇

十、彼は逃げ了せるか?……………七三

第三篇 水兵アルマロ……………七六

一、話は神の御聲……………七六

の筆にして初めて能くし得るところであらう。

ユーゴーは一八〇二年二月帝政時代の將軍の子として生れ、詩、小説、戯曲の各方面に偉大な天才を發揮して、早くも二十代でロマンチック派の首領たる地位を築き上げ、三十九歳でアカデミー・フランセーズに列せられた。四十三歳の時ルイ・フィリップ王から上院議員に任命されたのが政界への第一歩であつたが、一八四九年二月革命起るや共和政府を支持して代議士として活躍し、翌々年ナポレオン三世が帝政を布告するや猛烈な攻撃を試みて追放せられ、爾來二十年の亡命生活をブラッセル、海峽諸島等に送つた。後に特赦の恩命に浴したが拒絶して歸らず、一八七〇年普佛戦争の結果帝政覆へるに及んで始めて巴里に歸り、再び政界と文藝界に活動した。「レ・ミゼラブル」はその亡命中の作であり、「九三年」は歸國後晩年の作である。一八八五年五月滿八十三歳餘の高齡を以て逝き、遺骸は國葬の禮を以てパンテオンに葬られた。ユーゴーの波瀾多い一生を顧みながら本書を播かれたなら、一層の感興が湧くであらう。

卷末に佛蘭西革命中の重要事件、特に本書に關係深い事項を年表とし、ヴァンデー大揆の史實も略述して置いたから参照されたい。

一九二八年十二月

譯者

二、百姓の記憶は艦長の科學に劣らぬ……………八四
第四篇 乞食のテルマルシユ……………九八

- 一、砂丘の頂……………九八
- 二、耳はあれども聞えず……………一〇二
- 三、大文字の効能……………一〇五
- 四、物乞ひ……………一〇九
- 五、ゴーヴァンの署名……………一一九
- 六、内亂の有爲轉變……………一二四
- 七、救免すべからず(巴里市會の命令)
助命すべからず(アルターニユ貴族の命令)……………一三一

第二部 巴里篇

- 第一篇 僧侶のシムールダン……………一三九
- 一、シムールダン……………一三九
- 二、三途の川に漬からぬ部分……………一四九
- 第二篇 デュ・パン町の酒場……………一五三
- 一、マイノスミイカスミラダマンサス……………一五三
- 二、大聲は陸でも聞える……………一五六

三、心の奥底からの激動……………一八一
第三篇 革命議會……………一九七

- 一、革命議會……………一九七
- 二、樂屋でのマラー……………二二五

第三部 ヴァンデー篇

- 第一篇 ヴァンデー……………二三一
- 一、森……………二三一
- 二、人……………二三三
- 三、人と森との共謀……………二三四
- 四、彼等の地下の生活……………二三六
- 五、彼等の戦時の生活……………二三六
- 六、土地の魂が人間に滲み込む……………二四〇
- 七、ヴァンデーがアルターニユを滅ぼす……………二四二
- 第二篇 三人の子……………二四四
- 一、内亂以上のもの……………二四四
- 二、ドール……………二四六
- 三、小軍と大戦争……………二五三

四、これで二度だ	二七四
五、冷い水滴	二七六
六、癒えた傷、惱む胸	二八一
七、眞理の兩極	二九〇
八、悲嘆	二九〇
九、地方のバスターユ	三〇四
九の一、ラ・トゥーレグ	三〇四
九の二、裂け目	三〇五
九の三、密牢	三〇六
九の四、橋城	三〇八
九の五、鐵の扉	三二二
九の六、書庫	三二三
九の七、穀倉	三二四
十、人質	三二五
十一、昔ながらに恐ろし	三三三
十二、救出を企つ	三三七
十三、侯爵がしてゐたこと	三三〇
十四、イマニユスがしてゐたこと	三三三

第三篇 サン・バルトロミーの虐殺

第四篇 母親

一、死が通る	三五八
二、死が語る	三六二
三、百姓達のつぶやき	三六八
四、間違ひ	三七五
五、密林の叫び	三七九
六、形勢	三八二
七、闘準備	三八七
八、言葉と咆哮	三九三
九、巨人と巨人の戦	三九九
十、ラドカーブ軍曹	四〇四
十一、絶望の人々	四一五
十二、救ひの手	四一九
十三、死刑執行人	四二三
十四、イマニユスも逃る	四三六
十五、鍵と時計は同じポケットに入れぬこと	四三〇

第五篇 惡魔の中の神

- 一、探し當て、また失ふ……………四三五
- 二、石の門から鐵の扉へ……………四四六
- 三、眠つてゐた子供達が眼を覺ます……………四四九

第六篇 勝利の後に戦がある

- 一、捕へられたラントナツク……………四五六
- 二、思ひに耽るゴーヴァン……………四五九
- 三、司令官の頭巾……………四七六

第七篇 封建制度と革命

- 一、祖 先……………四七九
- 二、軍 法 會 議……………四八九
- 三、判 決……………四九五
- 四、シムールダン判士の後にシムールダン先生……………五〇三
- 五、岩 窟 牢……………五〇五
- 六、やがて陽は昇る……………五一九

附 録 佛蘭西革命年表……………五三〇



九十三年

九十三年

第一部 海上篇

第一篇 ラ・ソードレーの森

一千七百九十三年五月の末のこと、サンテル將軍の命でブルターニュへ入りこんでゐた巴里のある聯隊は、アスチエ地方の恐ろしいラ・ソードレーの森の中を搜索してゐた。この激戦で一個大隊は殆ど全滅してしまつたので、後には總勢三百人ぐらゐしか残つてゐなかつた。アルゴンヌやジャンマツプ、ヴァルミーの戦の後は、六百人もの義勇兵があつた巴里第一大隊の中で残つたものが僅か二十七人、第二大隊では三十三人、第三大隊では五十七人しかないといふ慘憺たる有様になつたのもこの頃であつた。實に凄壯悲絶な戦争の時代であつた。

巴里からヴァンデー地方へ派遣された部隊は總勢九百十二人で、どの大隊も大砲を三門づゝもつてゐた。が、どれもこれも俄作りの部隊ばかりであつた。其頃司法大臣はゴイエ、陸軍大臣はブーショットであつたが、四月二十五日になつて、革命政府の一部に、義勇軍をヴァンデー地方に派遣しようといふ議が起つた。巴里の市會議員リュバンが案を立てた。そしてサンテル將軍は、早くも五月一日

には、歩兵一萬二千人、野砲三十門、砲兵一個聯隊を出动させる準備を整へた。この派遣軍はこんな俄作りの軍隊ではあつたが、その組織が非常によく出来てゐたので、今日でもなほ模範とされてゐるぐらゐである。

四月の二十八日、巴里市會はサンテル將軍麾下の義勇兵に對して、「赦免すべからず、助命すべからず」といふ命令を發した。五月の末には、巴里を出發した一萬二千人の中、八千人は戦死してゐた。ラ・ソードレーの森に入つた大隊は、警戒を嚴にして、少しも焦る様子がなかつた。どの兵士も、前後左右に眼を配つて進んだ。クレベールは「兵士は背中にも眼がある」といつたが、全くその通りであつた。一隊は随分長い間行軍を續けて來たのであつた。もう何時頃であらう？ 朝だらうか、夕方なんだらうか？ 荒涼たる茂みは絶えず薄闇を漂はせ、森の中には明るい所とてはないので、はつきり見當をつけるのは容易なことではなかつた。ラ・ソードレーの森は悲劇的な場所であつた。一七九二年の十一月を振出しに、内亂の罪惡の芽が吹き出したのは、この森の中であつた。狂暴な跛者のムースクトンが飛び出して來たのも、この不吉な茂みからであつた。そこで行はれた虐殺の數々は、身の毛をよだせずにはおかなかつた。實にこれほど恐ろしい處はまたとない。兵士たちは用心に用心をしながら、奥の方へと進んで行つた。森の中には一面に花が咲き亂れ、樹々の枝や露にぬれた木の葉は、右にも左にも、うち揺らく壁のやうに重なりあつてゐた。陽の光は、この緑の暗がりの所々にさし込んでゐる。地面には、濕地の炎のやうなグラデオラスや、水仙、金雀兒、春

のサフランなどが咲き亂れて、毛蟲見たいなものから星のやうな形に至るまで、あらゆる恰好の苔が、密生した厚ぼつたい植物の絨氈に、敷きつめた青い疊に刺繡を施してゐた。兵士たちは、黙々として木の枝をそつと掻き分けながら、一步々進んで行つた。小鳥はその銃剣の上で轉つてゐた。ラ・ソードレーは、戦争のなかつた時分には、小鳥の夜獵には持つて來いの場所であつた。が、今はそこで人間を狩り立てゝゐるのだ。

森には檜や、樫や、柏が生ひ茂つてゐた。地面は平かで、苔や草が深いから、人の足音は少しも聞えなかつた。森の中には道といふものがない。いや、あつたにしても、それは、ひいらぎそよごや野生の杏、羊齒、金雀兒の堀や、脊の高い茨に突當つて、直ぐに見えなくなつてしまふやうな小徑ばかりであつた。十歩と離れれば、もう人の姿は判らない。時々鷺や骨頂などが枝の上を飛んで行くので、沼の近くにゐることだけは判つた。

兵士たちは更に前進した。眼差す相手に出會してはと心中不安に驅られながらも、盲滅法に進んで行つた。

ところ／＼で露營の跡が見つかつた。焚火をした場所や、草をふみにじつた跡、ぶつちがへに結へつけた棒切や、血の滲んだ木の枝などがあつた。この邊でスープをこしらへ、あの邊では彌撒を捧げ、ずつと向うの方では負傷者の手當でもしたのであらう。けれども人といふ人影は、みんな消え去つてしまつた。その人たちはどこへ行つたらう？ 多分、ずつと遠くの方へ去つてしまつたのであらう。

う。が、もしかしたら、すぐ近くに身を潜め、喇叭や銃を握つて待伏してゐるかもしれない。森には全く人の氣配がしないやうであつた。大隊は一層警戒を嚴重にした。森閑としてゐるだけ、反つて油斷が出来ないのだ。兵士たちは誰にも出會さない。だから、誰かに出會しはしまいかといふ恐怖が一層強くなるばかりであつた。彼等は、森を相手に悪口をいふより外はなかつた。どうも伏兵が潜んでゐるらしい。

そこで、軍曹の指揮する三十人の擲弾兵が前哨となつて、本隊から離れて前進した。大隊の酒保女も進んでその一隊について行つた。前哨は危険だけれども、どんな出來事でも眞先に見る機會をもつてゐる。好奇心は女の勇氣の一形式なのだ。

この小前哨隊の兵士たちは、突然獲物の穴に近づいた獵師のやうにドキツとした。茂みの眞中から人の呼吸づかひのやうな音が聞え、枝が揺れて人の氣配がするやうに思はれた。兵士たちは互に合圖を交した。

人の氣配がした場所は一分と經たない中に取圍まれてしまつた。着剣した銃先は、輪のやうに突き出された。怪しい茂みの中央は、忽ちの中に四方から狙はれた。兵士たちは引鐵に指をかけ、その怪しい場所を睨み据ゑながら、軍曹の命令を今や遅しと待ちかまへてゐた。

酒保女は、それには一向頓着なく木の下枝の間から透かし見してゐたが、軍曹が將に「撃てつ！」の號令をかけようとしたとき、「待てつ！」と一聲叫んだ。

そして、兵士たちの方をふりむいて、「仲間の衆、撃つちやいけない！」と叫んだ。と同時に、彼女が茂みの中へ駆け込んだ。兵士たちもそれに續いた。

果して、そこには誰かゝゐた。
茂みの一番コンモリした所、炭焼籠の火で出来た、森の中の凹みといったやうな小さな圓い空地の隅つこに、西班牙風の寢室のやうに半分開いた小部屋のやうなものがあつた。その中には、一人の女が乳呑兒を抱へて乳をふくませ、膝の上にはよく寝入つた二人の子供の金髪の頭を載せて、苔の上に直に坐つてゐた。伏兵といふのはそれであつた。

「お前さん、そんな所にゐて、何をしてゐるんだい？」と、酒保女は怒鳴つた。
女は頭をあげた。酒保女は荒々しく我鳴り立てた。

「そんな所にゐて、氣でも狂つたのかい？」それから、また言葉を續けて、「もう少しで、鷹殺しの目に會ふところだつちやないか」

そして、今度は兵士たちの方に向つて、「女だよ」といつた。

「なる程、一目瞭然だ」と、一人の擲弾兵がいつた。

酒保女は更に言葉を續けた。

「この森にわざ／＼殺されに來たんだね。なんて馬鹿げた考へを起したのさ！」

女は恐れ戦いて、石のやうにかたくなり、周圍を取圍んだ銃や、サーベル、銃剣、擲猛な顔つき

などを夢心地で見廻してゐた。

二人の子供は、眼をさまして大聲をあげた。「お腹が空いたよう！」と、一人がいふと、「怖いよー！」と、もう一人の子がいつた。赤坊だけは相變らず乳をしやぶつてゐた。

酒保女はその赤坊に言葉をかけた。「それがお前さんの權利だなあ」
母親は恐怖の餘り聲が出なかつた。

軍曹は彼女にいつた「怖いことはないよ。わし等は赤頭布大隊だよ」

女は頭から足の先まで身ふるひした。そして、髭と眉毛と、燃える石炭のやうな雙の眼しか見えない軍曹の顔を凝視めた。

「もとの赤十字の聯隊だよ」と、酒保女が隨いていつた。

軍曹は續けて訊ねた。「おかみさんは、なんていふんだね？」

女は怖々ながら、軍曹の顔色を讀まうとしてゐた。

瘡せぎすな若い女で、顔は青ざめ、身體に襤褸を纏つてゐた。頭には大きな頭被を冠り、ブルターニュの百姓の着る羅紗のマントを着て、頸のところを紐で括りつけてゐた。

「こりや乞食だな」と、軍曹がいつた。

酒保女は、軍隊式な、しかし女らしい優しさのこもつた聲で、また最初から始めた。

「お前さんの名はなんてんだね？」

女はひどく吃りながら、殆ど聞きとれないぐらゐな聲で、「ミシエル・フレシャール」と答へた。酒保女は大きな手で眠つてゐる赤坊の小さな頭を撫でながら、「このちびは幾歳だい？」と訊いた。

母親にはそれが解らなかつた。酒保女は念を押して、「これの歳を訊いてゐるんだよ」

「あゝ、これは十八ヶ月になります」と、母親が答へた。

「相當大きいんだね。もう乳なんか吸はしておく歳ぢやない。乳離れさせなきゃいけないよ。わたしたちでスープをこさへてあげるから」と、酒保女がいつた。

母親の胸の中には次第に安心が湧いて來た。眼をさました二人の子ども、怖いといふよりは物珍らしさうに人の顔を眺めてゐた。

子供たちは軍帽の毛飾に見惚れてゐた。

「あゝ、みんな随分お腹が空いてるのね」母親はさういつたが、言葉を續けて、「でも、牛乳はもうなくなつたよ」といつた。

「子供たちには何か食べる物をやらう、お前にもね。しかし、それだけぢや濟まないんだ。一體、お前の政見はどういふんだね？」と、軍曹が怒鳴つた。

女は軍曹の方を見たが、何も答へなかつた。

「俺のいつてることが解らないのか？」

女は口ごもつて、「わたしは極く幼さいとき僧院へ入れられました。後で結婚しましたが、だから、わたしは尼さんぢやありません。教姉さんたちは、佛蘭西語を教へて呉れました。村が燃えちやつたので、靴を穿く暇さへなく、大急ぎで逃げて來たのです」といつた。

「お前の政見はなんだつて訊いてゐるんだよ」

「それがどういふ事なのか判らないんです」

軍曹は言葉を續けて、「よく女の間諜なんでもものもあるからな。間諜なら直ぐに銃殺だ。さあ返事をしないか。お前はジブシーぢやあるまい？ 一體どつちの味方なんだ？」

女はそれでもまだ解らぬ様子で、軍曹の顔を凝視してゐるので、また繰返していつた。

「お前はどつちの味方なんだ？」

「わたし、知りません」と、彼女は答へた。

「なんだ、お前は自分の國を知らないのか？」

「あゝ、わたしの國ですか。それなら知つてます」

「それぢや、國はどこだい？」

「アゼ教區のシスコアニヤール農場です」

今度は軍曹の方がびつくりする番に廻つた。ちよつとの間首をひねつてゐたが、また訊き直した。「なんだつて？」

「シスコアニヤール」

「それは國ぢやないよ」

「それがわたしの國なんです」といつて、ちよつと考へてから、「あなたは佛蘭西人でせう。わたしはブルターニュの者なんです」といつた。

「それで？」

「だから、同じお仲間ぢやありません」

「しかし、國家は同じなんだ」と、軍曹が叫んだ。

女は唯だ、「わたしはシスコアニヤールの者です」を繰返すばかりであつた。

「ぢや、シスコアニヤールとして置かうか。で、お前の家族はみんなその者なんだね？」と、軍曹がいつた。

「はい」

「稼業は何だね？」

「みんな死んでしまひました。身寄は一人もありません」

軍曹は我ながら上出来だと思ひながら、訊問を續けた。

「えつ？ 飛んでもないことをいふ、誰だつて親類ぐらゐはあるぢやないか。いや、誰だつてもとはあつたに違ひない。お前は一體何者だ？ ちやんとした事をいはないか！」

女は、人間の聲といふよりも野獸の唸り聲に近い、その「いや、誰だつてもとはあつたに違ひない」といふ言葉を、膽を潰して聞いてゐた。

酒保女はなんとかたりなす必要があると感じたので、乳呑兒の頭を撫でたり、他の二人の子供の頬べたをさすつてやつたりしながら、

「赤坊はなんていふの？ 女の兒だらう？ これは」と訊いた

母親は「ジョルジュット」だと答へた

「それから、一番上のは？ これは男だから、いたづらつ兒だな」

「ルネ・ジャン」

「ぢや、下の方は？ これも男の兒だな。おまけに、丸々と肥つてゐるね」

「グロ・ザラン」と、母親がいつた。

「みんな可愛らしい子だね。どの子も、もう一人前のやうな顔をしてゐるぢやないか」
しかし軍曹は追窮の手を緩めはしなかつた。

「さあ返事をしろよ、おかみさん！ お前家があるのかい？」

「一軒ありました」

「どこにだね、それは？」

「アゼにです」

「お前はなぜ家にゐないのだ？」

「でも、家は焼かれてしまつたんです」

「誰に？」

「知りません。戦争で焼けたんです」

「お前はどこから来たんだ？」

「そこからです」

「で、これからどこへ行く心算だ？」

「知りません」

「有體にいはないか！ お前は一體何者だ？」

「知りません」

「お前は自分が何だかわからないのか？」

「わたしたちのことはみんなが知つてゐます」

「お前は何黨についてゐるんだ？」

「知りません」

「王黨か、共和黨か？ お前は一體どつちについてゐるんだ？」

「わたしは子供たちについてゐるんです」

話は暫く途切れた。酒保女は口を挟んで、

「こちと等は子供なんかじゃないよ。そんな暇がなかつたからね」といつた。

軍曹はまた始めた。

「ところでな、お前の両親はどうしたね？ いゝかい、おかみさん、両親のことを匿さずいふんだぜ。俺の名はラドウィーブつてんだ。俺は軍曹で、生れはシエルシュ・ミデイの町で、親父も阿母も土地の人間だ。俺だつて、両親のことはかういへるんだ。今度はお前の方の話をするんだぜ。一體名前は何なんていふんだい？」

「名前は、フレッシュヤールつていふんです、——それだけなんです」

「そりや、ラドウィーブがラドウィーブのやうに、フレッシュヤールはフレッシュヤールださ。しかし、人間には稼業つていふものがあるんだ。お前の両親は何稼業だつたんだね？ どんな仕事をしてゐたんだ、お前のそのフレッシュヤールつてのは？」

「二人とも百姓でした。お父つあんの方は病身で、働けませんでした。それは、お父つあんの殿様が、——わたしたちの殿様の下すつた筈のお蔭なんです。それはほんたうにお情でした。お父つあんは兎を一匹盗つたんですもの。ほんたうなら死罪に行はれるところを、殿様が特別のお慈悲で、『この者には筈で百打ち呉れ、ば澤山だ』と仰言つたので、お父つあんは不具になつただけで、生命拾ひをしたのです」

「それから？」
「お祖父さんは、新教徒でした。監督様のために牢へ打ち込まれてしまひました。わたしがまだほんの子供の時のことです」

「それから？」

「わたしの配偶のお父つあんは鹽の密輸入者でした。お上に捕まつて、死刑になつてしまひました」
「それから？ お前の夫は何をしてゐるのだ？」

「この頃は、戦争に出てるます」

「どつちのために？」

「王様の方に」

「それから？」

「え、殿様のために」

「次は？」

「さうです、監督様のために」

「なんぼでも、畜生共の名前を並べやがれ！」と、一人の擲弾兵が怒鳴つた。

女はびつくりして跳び上つた。

「ねえ、おかみさん、あたしたちは巴里つ見ですからね」と、酒保女が優しくいつた。

女は手を合せて、「お、神様！ エス様」と叫んだ。

「迷信なんか、止めろ！」と、軍曹が唸るやうにいつた。

酒保女は女の側に腰かけて、一番上の子供を膝の上に引き寄せた。子供は素直に抱かれた。子供といふものはなんといふ譯もなく、人を嫌ひもすれば懐きもするものだ。蟲が知らせるとでもいふのであらう。

「おかみさんも、全く氣の毒な身の上だよ。しかし、子供等はなんて可愛い顔をしてゐるんだらう。子供つて罪のないもんだね。さあ、小母さんがみんなの年を當て、見ようか。大きいのが四つで、弟が三つだね。こつちのおつばい飲んでるちびさんは、なかなか意地汚なだ。全く怖いやうだよ。お前は、そんなにおつかさんを嚙つてばかりゐなくたつてい、ぢやないか？ 時にね、おかみさん、何も恐がることはないよ。お前さんも軍隊に入つたがいと思ふね、あたしのやうにしてさ。あたしはウーザルドつてんだよ。これは綽名なんだがね。家の阿母のやうに、ピコルノーさんて呼ばれるより、ウーザルドの方が好きだよ。あたしは酒保女といつてね、つまり、兵隊が撃つたり突いたりしてゐる時に、一杯飲ましてやる稼業さ。いはば、悪魔の身内だあね。お前さんの足は、文敷が同じぐらゐらしいから、あたしの靴を一足進上しようよ。去年の八月十日にはね、あたしは巴里にゐましたよ。そして、ウエステルマンにも飲ましてやつたがね、そりや凄かつたよ。ルイ十六世が斷頭臺に掛けられとも見たよ。みんなはルイ・カベつて呼び棄てにしてたがね、つまり無理往生させられ

たんだね。まあ、ちよつと聞きなよ。一月の十三日にはね、大將馱洒落を飛ばしちやあ、家族の者と笑つてゐたもんだが、いよくシーソーつて機械に括りつけられた時にや、上着もなければ靴もなしで、シャツとチヨッキと、鼠色のズボンと鼠色の絹靴下を穿いてただけなんだ。あたしは、そこを見たらだよ、そこをね。大將を乗つけて来た車は青塗だつたよ。それはさうと、お前さんはあたし達と一緒にやつて行くんだね。隊の衆はみんないゝ連中だよ。お前さんは第二號酒保女になるさ。商賣のことは、あたしが教へてあげるよ。なあに、ちつともわけはないさ。水筒と鈴を持つてね、騒ぎの偵中へ入つて行つて、パチ／＼ドン／＼とやつてる中を、『おうい、一杯飲みたい者はないかね？』つて觸れ廻るだけの話さ。他にむづかしいことはないやね。あたしは、誰彼の見境なしに飲ましてやるんだよ。えゝ、王黨だつて、革命黨だつて一視同仁さ。あたしは革命黨でね、しかもれつきとした革命黨だけど、それはそれとして、扱ひはみんな同じにしてやるのさ。負傷兵にして見りや、誰だつて同じやうに咽喉がかわいてゐるんだ。死んで行く者にや、意見の違ひも何もありません。だから、死ぬ時にや、みんな手を握り合はなくつちやあね。戦争なんて、ほんたうに馬鹿々々しいもんだよ。ねえ、一緒においでな。もしあたしが死んだら、早速後釜に坐つて貰ふから。ねえ、あたしは見かけこそこんなだけど、これで心はなかくの親切者で、男優りなんだよ。何も心配することなんかはないよ」

酒保女が話を止めると、女はつぶやいた。

「わたし達のお隣りはマリー・ジャンヌといふ人で、家の女中はマリー・クロードといふんです」
その時、ラドゥーブ軍曹は先刻の擲弾兵を叱りつけてゐた。

「黙つてゐろ。お前はおかみさんをびつくりさせちやつたぢやないか。婦人の前では大きい聲を出すもんぢやないぞ」

「しかし、支那人の奴隷みたいに、舅父は領主に不具にされる、お祖父さんは坊主のために牢屋に打ちこまれ、お父つあんは王様に殺されたつてえのに、——人が好いにも程があるぢやあねえか。革命が起つたからつて、戸惑ひしちやつて戦争に飛び出し、領主や、坊主や、王様のために大事な生命を臺無しにしてしまふなんて、全く酷たらしくつて聞いちやあるられねえよ、正直な人間は」擲弾兵は口答へした。

「一同黙れ！」軍曹は大聲で怒鳴つた。

「黙れつていやあ黙りますよ、軍曹殿。しかしこんな別嬪が、あの薄汚ねえ泥坊野郎の肩もつたばかりに、首もチヨン切られ兼ねえと思ふと、やつぱり不憚で見ちやあみられねえやね」

「擲弾兵！ 俺達や、巴里の集會所にあるんぢやねえぞ。お談議は止めにしろ！」と窘めて置いて、軍曹はまた女の方を向いた。

「おかみさん。お前の配偶は今なにをしてゐるかね？ 一體どうなつたんだい？」
「どうもなりつこはありません。殺されちやつたんですもの」

「そりや、どこで？」

「桓根の所で」

「いつのことだね？」

「三日前に」

「誰にやられたんだい？」

「知りません」

「なに、お前は亭主を殺した奴を知らないつていふのか？」

「ええ」

「革命黨か？ 王黨か？」

「鐵砲の彈丸にやられたんです」

「で、それが三日前だったといふんだね？」

「ええ」

「どつちの方角だったね？」

「エルネーの方です。配偶は倒れてしまつたんです、それで萬事おしまひです」

「で、亭主が死んでから、お前はどうしてゐるんだね？」

「子供を連れて行かうと思つてゐるんです」

「どこへ連れて行くんだね？」

「眞つ直ぐ先の方へ」

「どこで寝るのだ？」

「地面に」

「何を食べてるんだい？」

「なんにも」

軍曹は、鼻と鬚とをくつつける軍隊式の盥めつ面をした。

「なんにも？」

「といひますのは、去年の小梅や、乾からびた木苺の残つたのや、桃の核や、蕨だけなんです」

「うん。それぢや、何にも食べないと同じこつたなあ」

一番上の子は話が解つたと見えて、「お腹が空いたよう」といつた。

軍曹は、ポケットから軍用パンを一片出して母親に與へた。女はそのパンを割つて、二人の子供に

わけてやつた。子供等はむさぼるやうに嚙りついた。

「自分の分は取つとかないんだな」と、軍曹が口の中でいつた。

「腹が減つてないんだらうよ」と、一人の兵士がいつた。

「阿母だからだよ」軍曹はいつた。

子供たちはその話を遮つて、「何か飲みたいよ」と、一人がいった。「何か飲みたいよ」と、もう一人の方がついていった。

「こんな魔の森にや、川なんかありやしないよ」と、軍曹がいった。

酒保女は、鈴と一緒にいるしてある眞鍮のコップを取上げ、肩に掛けた水筒の栓をひねつた。そしてコップの中に少しばかり注いで、交るく子供等の口にあてがってやつた。

一人の方はグイと飲んで、顔を顰めた。片方の子は飲んで直ぐ吐き出した。

「しかし、これはおいしいんだよ」と、酒保女がいった。

「そりや、本場ものかい？」と、軍曹が訊いた。

「さうさ、しかも飛切りだよ。しかし、相手が田舎者だからね」といつて、酒保女はコップを拭いた。

軍曹はまた言葉を續けて、「で、かうやつて、おかみさんは逃げようとしてゐるんだね？」

「それより他に、仕方がないんですもの」

「田舎道をたどつて足の向き次第歩かうつてんだね？」

「わたし、あらん限りの力で走りましました。それから歩いて、とうとう倒れちやつたんです」

「かはいさうにな」と、酒保女がいった。

「みんなで戦争してみました。どつちを向いても、鐵砲の音ばかりでした。みんなは、一體どうしようつていふのか、さつぱりわかりませんの。そのうちに、配偶は殺されてしまひました。わたしは、

それしかわからないんです」と、女はつぶやくやうにいつた。

軍曹は銃の臺尻で地面をドシンとやつて、「畜生！　なんてひどい戦争獣だらう！」と怒鳴つた。

女は言葉を續けた。

「昨夜は朽木の中で寝ました」

「四人とも？」

「四人ともです」

「眠れた？」

「寝ました」

「それぢや、立つたまゝ寝たんだね？」

「三人も子供を抱へて、木の洞で寝るなんてねえ」と、酒保女がいった。

「それぢや、子供が泣いた時にや、通行人にはなんにも見えないから、木が『お父つあん、おつ母さ

あん！』といつてるやうに聞えて、随分氣味が悪かつたらうな」と、軍曹がいった。

「でも、夏だつたので助かりました」といつて、女は吐息をついた。

彼女は一切を投げだしたやうに口を緘し、惨めな運命に途方に暮れた面持をして、地面を凝視めてみた。兵士たちは、黙つてこの惨めな人々の群を取り巻いてゐた。

一人の寡婦に三人の孤兒、逃走、遺棄、寄るべなき孤獨、四方に聞える戦争のざわめき、餓ゑや渴

き、腹を満たすものとしては野原の草よりほかになく、露をしのぐものとしては青天井よりほかにないのだ。

軍曹は女の方に近寄つて、乳に吸ひついてゐる子供を凝視めた。赤坊は乳房を離れて、しづかに顔を向けた。その可愛らしい青い眼は、自分を覗き込んでゐる鬚だらけの恐ろしい顔を見て、ニコ／＼と笑ひ始めた。

軍曹は起ち上つた。大粒な涙が頬を傳はつて、鬚の先に眞珠のやうにぶら下つてゐた。彼は聲を張り上げて、「仲間たち！ みんなも聞いたやうな事情なんだから、わしは我が隊が父親になつてやらなきやならんと思ふんだ。どうだ承知かね？ この三人の子供を貰ふことは？」

「共和国萬歳！」と、並みゐる擲弾兵は叫んだ。

「それでは、さう決つたぞ」と、軍曹がいつた。そして、雙の手を母親と子供達の上に延ばして、「赤頭布大隊の子だぞ！」といつた。

酒保女は喜んで跳び上がり、「二つの頭布に三つの頭だよ！」と叫んだ。

それから、急に聲に泣きになつて、憐れな女を激しく抱擁して、「この娘つこは、もう一塵の強かものらしい顔をして！」

「共和国萬歳！」と、兵士達は繰返した。

その時、軍曹は母親に聲を掛けた。「さあ、行かう！ 同志の市民！」

第二篇 軍艦クレモア號

一、英佛の戦

一千七百九十三年の春、四方を取圍まれた佛蘭西が、ジロンド黨の没落といふ悲壯な事件から國內擾亂の極に陥つてゐた時、英佛海峡の海峡諸島ではかういふ事件が起つてゐた。

六月一日の夕刻、夕陽の没する一時間ほど前であつたが、ジェルシー島のボンヌニユイといふ、小さいもの寂しい灣から、一隻の一段砲装の軍艦が發航した。折柄四邊には霧が立ちこめてゐて、危険で追撃も出来ないといふ、遁走にはお詔へ向きの天候であつた。この軍艦は、島の東端に碇泊して、見張りの任務についてゐた英國艦隊に屬するものであるが、乗組員はみな佛蘭西人であつた。英國艦隊の指揮を司つてゐたのはブイヨン家のラ・トゥール・ドーヴェルニユ公であるが、この軍艦が緊急特別任務を帯びて出發したのも彼の命令によつてであつた。一ザ・クレモアといふ名で英國の航路標識管理組合に登録してあつたこの軍艦は、外見こそ運送船か商船のやうに見えるが、實際は立派な軍艦であつた。いかにも重たげな、平和らしい、商船のやうにしか見えないが、うっかり信用しようものなら飛んでもないことになる。つまり詭計と戦闘力の二重の目的で建造された艦で、出来れば欺すし、必要とあれば戦はうといふ構造をもつてゐた。で、その夜遂行すべき任務のために、

中甲板の荷物は三十門の巨砲と積み替へられてあつた。荒天に備へるためか、それともまた艦の様子を物騒に見せたくないためか、その三十門の巨砲はいづれも眼につかぬやうに隠してあつた。すなはち、砲身は三本の鎖で固く艦内に縛りつけ、砲口は蓋をかつた昇降口に押しつけてあつたので、外部からは何も見えなかつた。艦窓には覆が掛けられ、船窓の戸は閉ざされて、丁度艦全體がマスクを掛けたやうになつてゐた。大砲は青銅の車のついた、「輪型」といふ舊式のものであつた。全部佛蘭西人だけの乗組員は、脱走士官と脱走水兵の集りであつた。いづれも戦場往來の豪の者で、船と、劍と、王の三つの狂熱を懐いてゐる。

いざといふ時には、直ぐ上陸出来る半個大隊の陸戦隊が乗組員中に加はつてゐた。

軍艦クレイモア號の艦長はサン・ルイの爵士（譯註 佛蘭西往時の最下級の爵）、舊王國海軍屈指の將校といはれたボアベルトロ伯、副長は、オーシユ將軍がまだ軍曹でゐた當時の、近衛兵中隊長を勤めたラ・ヴェーヴイル 爵士、舵手は、ジェルシー島で一番腕利きの船乗フィリップ・ガコアルであつた。

この艦が、何か容易ならぬ任務を持つてゐたことはいふまでもない。果せる哉、丁度そこへ乗込んできた一人の男は、いかにも冒険にでも乗出すやうな意氣込みを示してゐた。それは脊の高い、反身のがつしりした、険しい顔つきの老人であつた。ちよつと見ると若くもあるが、老人らしくもあり、正確な年齢は容易に見當がつかないが、老いて益々壯に、頭には銀髪を載きながら眼光は炯々として人を射り、精力からいへば四十歳の男盛りで、権力と貫録にかけては八十歳の長者といつたやうな風格の人物である。

彼が甲板上に歩を運んだ時、折柄の風に羽織つてゐた漁師マントがバットめくれたが、その下には、太いダブ／＼したズボンと長靴、表側の鞣した方には絹の刺繡を施し、裏側には剛毛のついたままの山羊皮の短上衣が見えた。それは紛れもないブルターニュの百姓の服装である。この古風なブルターニュの短上衣は二通りに使ふことが出来た。ひつくり返せば、毛のついた方でも刺繡した方でも、勝手に表側に出せるので、野良仕事にも祭日にも、どつちにも向く。で、土曜日までは毛の方を表側にして置いて、日曜日になつたら、裏返しにして餘所行きの方を出すといふ風にするわけだ。老人の纏つてゐた百姓の服装は、念入りに研究した上、出来るだけ實物に似せようとしたやうに、膝や、肘のあたりは擦り切れ、餘程長いこと着古した代物らしく見えるが、その上に羽織つた漁師マントも至つて粗末な地で、實際は漁師のお古であつたかも知れない。老人のかぶつてゐた帽子は、當時流行つた、高い、鏢の広い帽子で、縁を下へ折り曲げると田舎臭くなり、片側を折り上げて紐環と帽章で留めると軍人らしくなるといふ型であつた。が、老人はそれを百姓風に、前方の縁を下げ、リボンも徽章もつけずにかぶつてゐた。

島司のバルカラス卿とラ・トゥール・ド・ヴェルニユ公は、親しくこの老人を案内して乗艦させた。以前アルトア伯の護衛で、諸侯の密偵を勤めてゐたジェランブルは、船室の設備萬端の指圖をな

し、自分も相當立派な身分でありながら、恐ろしく丁寧に敬意を表して、老人の背後に靴まで掲げて従つて行つた。そして、別れを告げて歸る時には、ジェランブル氏はその百姓に對して恭しく敬禮した。バルカラス卿は「將軍御武運を祈ります！」といひ、ラ・トゥール・ド・ヴェルニユ公は續いて「さやうなら、從兄弟よ！」といつた。

それからといふもの、乗組員達の切れくたな話の中には、よく「百姓」といふ名が出て來たが、それはいふまでもなく此便乗者に奉つた名前であつた。彼等はそれ以上深い事情は何も知らなかつたが、唯この軍艦が普通の軍艦でないと同じやうに、この百姓も唯の百姓でない事だけは感づいてゐた。風は殆どなかつた。クレーモア號はボンヌニユイを出て、ブーレー灣の前を過ぎ、風上に向けて間切りながら、尙ほしばらくの間は姿を見せてゐたが、やがて次第に迫り來る夕暗に包まれて、遂にその姿は消えてしまつた。

一時間の後、ジェランブルはサン・テリエの自宅に歸り、英國サザンプトン行の特別便で、ヨーク公の本營にゐるアルトア伯の許にかういふ報告を送つた。

「閣下よ、出發は只今終了せり。成功疑ひなし。八日を出すして、グランヴィルよりサン・マロに至る海岸は一面の火と化すべし」

それに先だつこと四日、シエルブル海岸警備隊に派遣され、グランヴィルに假寓してゐたブリユール・ド・ラ・マルヌは、その特別便と同じ筆蹟の報告を密使の手から受取つてゐた。

「市民代表者よ、六月一日の満潮を期して、軍艦クレーモア號は一人の男を佛蘭西海岸に上陸せしむる目的をもつて、砲門を隠して發航すべし。同人の人相は、丈高く、白髮の老人、百姓の服装、貴族の手、詳細は、更に明日通知すべし、同人は二日朝上陸の筈、巡洋艦に警報し、軍艦を拿捕し、件の男を斷頭臺にかけよ」

二、艦上の夜に便乗者

軍艦は南に針路をとつてサント・カテリヌに向ふと思ひの外、北に進み、更に西に折れて、サーク島とジェルシー島の間にある、デュロント水路と呼ばれる海峡に突進んでいつた。當時は、その海峡の兩岸何處にも燈臺一つなかつた。

日は全く沈んだ。その夜は、夏の夜としては珍しく暗かつた。月はあつたが、空一面に黒雲が覆ひかぶさり、それも被岸のやうな雲ではなくて、夏至の密雲であつたから、月は西の水平線に入る間際でなくては見えさうにもなかつた。折柄雲は所々低く垂れ下つて、海面を霧で掩うてゐた。

かうした陰暗の夜は益々好都合であつた。

舵手ガコアルの考へでは、ジェルシー島を左、ゲルヌゼー島を右に見て、アノアとドーヴァーの間を一直線に進んで、サン・マロ海岸のどこかの灣に入らうといふのであつた。この航路はマンキエー島を通るよりは遠いが、佛蘭西巡洋艦は絶えずサンテリエとグランヴィルの間を特別嚴重に警戒する

やうに命ぜられてゐたから、結局この方が一層安全な航路だつたのだ。

風の向がよくて、途中變つた事さへ起らなければ、帆を全部あげてゐるのだから、夜の明方には佛蘭西海岸に着けるだらうと、ガコアルは思つてゐた。

萬事は都合よく運んだ。軍艦はグロ・ネ岬を廻つた。九時頃になると、船乗言葉の所謂天氣が拗ねかけて、風が出て來た。波浪も少し高くなつた。しかし風向はよく、波浪が高いといつても暴るといふほどではなかつた。それでも艦首は時々波をかぶつてゐた。

バルカラス卿が「將軍」と呼び、ラ・トゥール・ド・ヴェルニユ公が「從兄弟よ」といつた。「百姓」は、船乗の脚を持つてゐると見えて、ドツシリ落ちていて甲板の上を歩いてゐる。艦が可成りひどく揺れてゐることに氣がつかないやうな様子で、時々ポケットから板チョコレットを取出し、それを割つては一片づつ嚙んでゐた。髪は眞白になつても、齒だけは立派に揃つてゐたのだ。

彼は艦長の外には誰にも言葉をかけなかつた。それも、ほんの時々、言葉少なに低い聲で早口に話しかけるだけであつたが、艦長の方は如何にも恭しくそれを承つてゐる。傍から見ると自分よりも、相手の老人の方を司令官扱ひにしてゐるやうに見えた。クレイモア號は巧みに舵を取り、ジェルシー、サーク兩島の間の海峡の眞中にあるリーク岩といふ恐ろしい暗礁を避けて、ジェルシー島の北の斷崖に沿つて、霧の中を進んでゐた。ガコアルは舵輪の前に立ち、リーク岩やグロ・ネ岬、ブレモン岬などを一々見分けて、ある程度までは手探りのやうに、しかも航路にもお馴染であれば、海

氣質もよく呑み込んでゐる人のやうに、この暗礁の連鎖の中を、些かの危なげもなく軍艦を進めて行つた。艦は、この警戒嚴重な場所で見送されては一大事と、前方を照らす燈火さへつけてゐなかつた。立てこめた霧こそ、反つて仕合せの種であつた。グランド・エタークにかゝつた頃には非常な濃霧となつて、高いピナクルの輪廓でさへ殆ど見えないぐらゐであつた。サン・トゥエンの鐘樓で十時を打つのが聞えた。やつぱりまだ追風が續いてゐる證據だ。すべては、なほ順潮に進んでゐた。が、海はコルビエルに近づくにつれて益々荒れて來た。

十時を少し廻つた頃、ポアベルトロ伯とラ・ヴェーヴイル爵士は、百姓姿の男を艦長の公室であつた設けの船室に連れ戻した。室内に入らうとする時、彼は聲をひそめていつた。

「皆さん、祕密が大切なことは御承知ですな。爆發の瞬間まで、沈黙を守ることです。こゝでわしの名を知つてをられるのは、あなた方お二人だけなんだから」

「墓場までも、持つて參ります」と、ポアベルトロがいつた。

「わしはだね、死に面したとて、決して口外しないつもりだ」と、老人がつけ加へた。そして、彼は船室の中に入った。

三、貴族と平民の鬭争

艦長と副長とは戻つて來て、竝んで話しながら、甲板の上を行つたり來たりしてゐた。二人は確か

に便乗者のことを話してゐるに違ひない、風のために聲は闇の中へ吹き散らされてしまつたが、話合つてゐることはかういふことであつた。

ボアベルトロは、小聲でラ・ヴェーヴィルの耳にさゝやいた。

「彼がほんたうの大將かどうか判る時は来るよ」

「あの方は、現に貴族なんですよ」ラ・ヴェーヴィルは答へた。

「まあ、そんなところかね」

「フランスでは貴族といひますが、ブルターニュでは貴族なんです」

「フランスでは、そして王の馬車の中では、僕が伯爵で、君が爵士のやうに、彼は侯爵なんだ」

「王の馬車なんて、古い昔のことです。今ぢや砂利車ぢやありませんか」と、ラ・ヴェーヴィルが叫んだ。

「両方とも黙つてしまつた。やがて、ボアベルトロがまた口を切つた。

「フランスに王がなくなつたから、ブルターニュの貴族を引張り出すのさ」

「鶉のない時には、いや、鶉のない時には鳥で間に合せますか」

「僕は鶉の方がいゝね」と、ボアベルトロがいつた。

「そりや、さうですとも——嘴と爪がね」ラ・ヴェーヴィルは答へた。

「今に判るよ」

ラ・ヴェーヴィルはまたいつた。

「さうです、もう大將が出来てもいゝ時分ですよ。私はタンテニアックと同じ意見で、『ほんたうの大將と火薬』だと思ふんです。ねえ、艦長、私は昨日の大將も、今日のも、明日のも、實際出て来さうな大將も、出て来る見込のないのも、殆んどありとあらゆる大將は知つてゐますが、一人として我々の望むやうな首領はありません。あの呪はれたヴァンデー地方では、大將であつて同時に檢事である人物が必要なんです。敵を惱ますのは勿論、水車小屋でも、森でも、堀でも、石塊の果に至るまで奪ひ合をしなければならず、敵と張合つて、ありとあらゆるものを利用し、すべてのものに氣を配り、多くの敵を殺して、自ら範を示し、不眠不休で、無慈悲にやつつけなければならぬんです。今あの百姓の軍隊には、英雄は澤山あるが指揮官がないんです。デルベールは無能だし、レキュールは病氣してるし、ボンシャンでは情にもろい。彼は親切だが、親切といふことは馬鹿といふことです。ラ・ローシユジャクランは素晴らしい少尉だ。シルズは野戦向の將校だが、戦術の要る戦争には向かない。カトリノーは單純な馭者で、ストフレは狡い獵番だ。ベラールは腕がないし、ブーランヴェリエは滑稽で、シャレットは怖い奴だ。それから、理髮師のガストンだが、それはいひますまい。なぜつて、馬鹿らしい、もし我々が床屋に貴族の指揮をさせるのならば、革命と戦つて何になるんです。それぢや、共和黨とちつとも變りないぢやありませんか」

「革命の畜生が我々にも傳染して来るんだよ」

「佛蘭西のとりつかれた疥癬ですわね」

「第三階級の疥癬だ。それを療治して呉れるのは英吉利だけだよ」と、ポアベルトロが答へた。

「英吉利は必ず療治して呉れますよ。決して疑ひありません、艦長」

「兎に角、差當り穢いね」

「さうですとも。どこへ行つても賤民だらけなんですから。ド・モールヴリュ卿の獵番のストフレが總司令官をしてゐる王國は、カストリー公の門番の伴のパーシュが大臣をしてゐる共和國を羨むことなんかありませんよ。しかし、このヴァンデーの戦争は頗る變つた取組ですよ。一方は酒屋のサントルで、相手が床屋のガストンと來てるんですからね」

「しかし、ラ・ヴェーヴィル君、僕はこのガストンに對しては些か敬意を表してゐるんだがね。ゲメネーの戦ぢや、そんなに拙くなかつたぜ。三百人の革命黨員をね、自分の手で墓穴を掘らして置いて、頗る鮮かに銃殺しちやつたよ」

「そりや結構でした。しかし、私だつてそれぐらゐなことはやれると思ひますね」

「そりや當り前さ。僕だつてやれるよ」

「戦争の功績といふものは、元來貴族の手を俟つべきものです。それは騎士の任務であつて、床屋などの手を出すべき筋合ぢやないんです」と、ラ・ヴェーヴィルはいひ出した。

「しかし、この『第三階級』の中には偉い人間も相當にゐるよ」と、ポアベルトロが答へた。「例へ

ばだね、あの時計屋のジョリーなんかゞそれだよ。彼はフランダース聯隊の軍曹だつたが、今ぢやヴァンデーの隊長になつて、海岸警備隊の一隊を指揮してゐるよ。一人の息子は共和黨員で革命軍に勤めてゐるが、親父は王黨軍で働いてゐた。出會した、戦争がおつ始まつた。親父は伴を取つ捕へて銃殺しちやつたよ」

「あいつは偉いですよ」と、ラ・ヴェーヴィルはいつた。

「王黨のブルータスといふ役だね」と、ポアベルトロが相槌を打つた。

「それにしてもですね、コクロードの、ジャン・ジャンだの、ムーランだの、フォカールだとか、ブージュだとか、シューブだなんて奴等に指揮されるんぢや、全くやり切れませんね」

「しかし君、面白くないつていへば、向うだつて同じことだよ。我々の方にはブルジョアが大勢ゐるが、向うには向うで貴族が大分ゐるよ。平民たちが、カンクロー伯だとか、ミランダ子、ポーアルネー子、ヴァランス伯、キユスチヌ侯だとか、ピロン公などの指揮を受けて喜んでゐると思ふかい？」

「なんて、ゴテ／＼してやがるんだらう！」

「それからまだ、シャルトル公がゐるぜ」

「『平等』(舊のオルレアン公)の子ですか。ぢや、あいつはいつ王位に就けるんでせう？」

「駄目だね」

「もう少しで王位に就くところでしたわね、犯した罪惡が役に立つて」

「しかし、不義は遂に榮えずさ」

二人は銘々感想に耽りながら、數歩の間黙つて歩いた。それからまた話が始まつた。

「あゝ、この共和國！こんな爪の垢ほどのことから、なんて怖ろしいことになつたんだらう！高
が知れた五六百萬の不足から、こんな革命になつたんだと思ふと情なくなりますね」

「小つぽけた發端が肝腎なんだ」と、ポアベルトロがいつた。

「かうなつちや、何もかもお終ひです」と、ラ・ヴェーヴィルが應ずる。

「さうだ、ラ・ルアリーは死んだし、デュ・ドレンスネーは馬鹿者だ。あのロシエルの僧正のクーシー
や、ポアチエの僧正のポーポアル・サントレールや、リュソンの僧正でレシャツスリー夫人の情人
のあのメルシー、……僧正だなんていひながら、どれもこれもなんて情ない指導者共だ！兵隊の要
る時に坊主が出て來やがる！僧正でもない僧正がさ！大將の器でもない大將ばつかりがさ！」

ラ・ヴェーヴィルはポアベルトロを遮るやうにして、

「艦長、お部屋にモニター新聞がございますか？」

「あゝあるよ」

「今、巴里ぢや何を演つてますか？」

「『ヨアデールとポーラン』と『岩窟』だね」

「そりや、見たいですなあ」

「なあに見られるさ。一月もすりや、我々は巴里に入るんだからね」といつて、ポアベルトロはちよ
つと考へるやうにしたが、「遅くもだよ。ウインドハムがフッド卿にさういつたよ」

「それぢや、艦長、形勢はそんなに悪くはないんですか？」

「そりや君、ブルターニュの戦争さへ作戦通りに行けば、何もかもよくなるさ」

ラ・ヴェーヴィルは頷いた。「艦長、陸戦隊を上陸させるんですか？」

「さうだ、海岸方面が味方だつたら、いやさうぢやない、そこが敵だつた時にはだ。戦争となれば、
場合によつては表門を打破らねばならぬこともあり、時によつてはこつそり忍び込まねばならないこ
ともあるからね。内亂には、いつも合鍵を用意しておく必要がある。我々は力のあらん限りやるさ。
一番大事なもの、司令官だよ」

ラ・ヴェーヴィルは暫く考へてかういつた。

「王族でなけりや駄目です。佛蘭西の王族、生れつからの王族、ほんたうの王族でなけりや」

「なぜだね？王室なんて擔ぎ出すのは！」

「臆病者のいふことだといふことは知つてゐますよ、艦長。しかし、田舎者の、鈍い眼を驚かすため
には、どうしてもそれに限るんです」

「しかし君、王族なんて來つこないよ」

「ぢやあ、なしでやつて行く外ありませんね」

ポアベルトロは機械的に手で額を壓しつけ、考へを搾りだすやうな恰好をしてゐたが、「まあ、この將軍を試して見るとしようか」と、大きい聲でいつた。

「あの人は立派な貴族です」

「彼で間に合ふと思ふかね、君は？」

「しつかりしてゐさへすれば」

「つまり、悍猛であればだね」

伯爵と爵士とはヂツと顔を見合せた。

「ポアベルトロ伯、あなたは悍猛と仰言いましたね。さうです、さういふ人物が必要なんです。今度の戦争はお慈悲なしの戦争です。今は血に渴いた時なんです。暴徒はルイ十六世の首を斬つてしまつた。我々は奴等の手足を寸断々々にしてやらう。さうだ、必要な將軍は殘虐な將軍です。アンジュールや上ポアツでは、司令官が寛大過ぎたです。情にからまれてゐちや何にも出来やしません。マレーやレツツ邊では、司令官が慘酷にやるからドシ／＼進行するんです。シャレットが蠻的だから、バランに對抗して行けるんです。山犬にや山犬ですよ」

ポアベルトロはラ・ヴューヴィルに答へる暇がなかつた。ラ・ヴューヴィルの言葉は突然の悲鳴で遮られた。と同時に、恐ろしいのなんのといつて形容も出来ない物音が聞えて來た。その叫び聲と物音は、いづれも艦の内部から起つたのであつた。

艦長と副長は大急ぎで中甲板へ降りようとしたが、入ることが出来なかつた。砲手達が、みな夢中になつて昇つて來るところであつた。正しく、恐るべき事件が起つたのだ！

四、禍

砲装甲板の二十四種砲の鎖が斷れた。

海上の出來事としてはこれほど恐ろしいことはまたない。外洋に乗出して、總帆を張つた軍艦には、これ以上恐ろしい事件は起りつこないのだ。

鎖の切れた大砲は、突然、形容も出来ない、超自然的な動物に化してしまふ。機械は忽ちにして一個の妖怪に變つてしまふのだ。車輪に載つた巨大な砲身は、玉突臺の球のやうに激しく飛び出し、艦が左右動すれば左右に動き、前後に揺れれば縦に走る。向うへ行つたかと思ふと、戻つて來る。考へこむやうにしては、すぐまた走り出す。艦の端から端まで、矢のやうに飛んで行くかと思へば、ぐるりと廻つてまた横に走り、遁げたかと思ふと、突き當り、打壊し、人を殺し、果は塵殺しにせんばかりの勢ひである。まるで我武者羅に壁に突つかゝる撞角のやうなものだ。おまけに、その撞角は金屬で、壁は木だから、宛として無人の野を行く慨がある。或ひは永遠の奴隸が復讐を試みてゐるやうでもある。人間が生命がないと思つてゐる物體の中に潜んだ悪靈が、突然に出口を見つけて、暴

れ出したやうにも見られやう。どうにも我慢がしきれなくなつて、思ひ切り慘虐な、氣味悪い復讐を企てゝあるといふ感じがする。全く無生物の怒りほど恐ろしいものはない。この狂亂した巨塊は、豹のやうに剽悍で、象のやうに重く、鼠のやうにちよろ／＼するかと思ふと、鉞のやうに執拗で、大波のやうに不意に襲つて来る。稲妻のやうに閃めくかと思へば、墓場のやうに押黙る。一萬封度もありながら、子供の鞠のやうにはずんだり、不意に急角度で切れて見たり、狂暴な旋風そのまゝである。さあどうしたらいいだらう？ どうすれば片附くであらう？ 嵐は止むし、龍巻は移つて行く、風は利ぐし、折れた帆柱は取換へも利く、漏孔はふさげるし、火事は消える。しかし、この巨大な青銅の猛獸だけは、どうすれば鎮まるだらう？ どうして、誰か押へつけることが出来るか？ 猛犬なら馴らされるし、牡牛なら度膽を抜いてもやれる、毒蛇なら懐柔することも出来る。虎なら脅かし、獅子なら宥めることが出来る。が、鎖の切れた大砲といふこの怪物に對しては施す術がない。死んだ物だから、殺すといふわけに行かない。ところが、同時に生きてもゐる。恐ろしい生命を持つてゐるのだ。この怪物の脚下は板張りになつてゐて、それが怪物を踊らせてゐる。板張りは艦と一緒に動き、艦は海に動かされ、海は風のまゝに動いてゐる。で、この殺人機は操り人形で、艦や、波や、風がみな一緒にになつて加勢してゐる。だから、その恐るべき狂暴さは益々募るばかりなのだ。いよいよ厄介千萬なはこの怪物である。なんとかやつつける方法はあるまいか？ 放つておいては難破するより外ないのだが、なんとかしてこの怪物機械を縛りつける方法はないものか？ 恐るべき大砲は益

益暴れ廻る。進むかと思へば引込み、右を突き、左を突き、逃げたり、駆け抜れたり、立ちはだかつたり、不意に突つかゝつたり、邪魔物を打壊し、人を轟のやうに潰したりした。甲板が動いてゐるから益々危険なのだ。が、自由勝手に動揺する甲板をどうしてとめることが出来るか？ 艦は、逃げ出さうとしてゐる。雷を腹の中に押込めてゐるやうなものだ。雷が地震の上を轉がり廻つてゐるやうなものだ。一瞬の間に、乗組員は残らず起ち上つた。責任は砲手長に在つた。彼は鎖の螺旋を緊めることを忘れ、砲車の四つの車輪を堅くとめておかなかつたので、砲身と車臺とが動き出し、とう／＼後綱が外れてしまつた。さうすると、大砲を固定させるものは何もない。その當時は大砲の後退を防ぐ固定綱はまだなかつた。そこへ、大波が来て舷側にぶつつかつたので、綱の弛んだ大砲は後へ退つて鎖を斷り、矢庭にそこへ暴れ出したのであつた。砲手たちはみな砲塔の中にゐた。或る者は一と所に集まり、或る者は別な所に立つていづれも合戦準備に餘念がなかつた。大砲は艦の縦揺れで前のめりに暴れ出し、人だかりの中へ突込んで忽ち四人を踏み潰し、左右動で一旦戻つて、またも激しく突進し、五人目の砲手を眞二つにして左舷に突き當り、一門の大砲を破壊してしまつた。ひどい勢ひだつたので、大砲は砲座から外れてしまつた。今聞えた悲鳴は、その時起つたのだ。一同の者は先を争つて階段の方へ突走つた。砲裝甲板の中は瞬く間にがら明きになつてしまつた。

巨大な大砲はひとりぼつちになつた。かうなれば思ふ存分だ。なんでも勝手放題にやれるし、艦全體も意の儘だ。自分の身體と艦の運命は、どつちもその掌中にあるのだ。戦争の眞最中でも平氣で笑つてゐた乗組員等も、今は一人残らず甞へ上つた。艦全體を擁うたその恐怖は、到底筆には表せない。

ポアベルトロ艦長とラ・ヴェーヴィル副長はいづれも沈勇な武人だが、階段の上に突立つたなり、流石に顔は青ざめ、躊躇ひながら言葉もなく、たゞ中甲板の方を見下すばかりであつた。と、何者か、肘で二人を押し除けて、グイ／＼下りて行くものがあつた。その男こそあの便乗者の百姓で、二人が今の今まで噂しあつてゐた主であつた。その男こそあの便乗者の百姓で、

階段を降りきつてしまふと、彼はスツクと其所に立留つた。

五、螺旋三廻轉

大砲は、中甲板を行きつ戻りつしてゐた。その様子は宛ら默示録の生ける戦車のやうであつた。砲塔の横木に吊してあつた艦燈は揺れて、この光景に眼まぐるしい明暗の渦を投げかけてゐた。餘り激しく暴れ廻るので、大砲そのものゝ形は殆ど見分けがつかない。光のあたる所では黒く見えたと、思ふと、暗がりの中では微かに白く反射するばかりであつた。恐ろしい破壊は引つきりなしに續いてゐた。既に他の大砲を四門も毀してしまつた。艦壁には二

つの裂孔をあけた。幸ひ吃水線の上ではあつたが、突風にでも遭つたらきつと水が入るであらう。大砲は當るを幸ひ雉ぎ倒して、今度は肋材にぶつつかつた。頑丈な骨組は抵抗した。曲つた木だけに特殊な強味を持つてゐる。しかしこの恐るべき棍棒には、一時に四方八方を叩きのめす物凄い神通力があると見えて、流石の肋材も遂にメリ／＼と音を立てた。鐵砲の彈丸を鐵の中で振り廻したところで、これほど猛烈な、眼にも止まらぬ暴れ方はしなかつたであらう。四つの車輪は、何度も屍體の上を行つたり來たりして寸斷々々に切り刻んだ。五つの屍體は二十もの肉塊となつて甲板の上を轉つた。首は聲をあげてゐるやうに見えた。血の河は、艦の動揺につれて左右に流れたり、淀んだりした。天井の板張は所々破れて大きい孔になつた。艦内は名狀し難い混亂に陥つた。

艦長は直ぐに氣を取直して、一同に命令を下した。水兵等は少しでも大砲の狂奔を妨げるやうにと、蒲團から、ハンモック、豫備の帆布、綱の束、豫備の船具や、艦一杯に積んでゐた法紙幣（譯註 佛蘭西革命時代に土地を抵當として發行した不換紙幣）の箱などに至るまで、あらゆるものを中甲板へ投げ出した。

しかし、こんな屑ばかりではなんの役にもたゝなかつた。降りて行つて、それを上手に列べようと

いふ者が出ないので、五六分もたゝない中にみんな屑綿のやうになつてしまつた。この惨事がこれほど暴威を逞しうするのは、海の荒れ具合が丁度よかつたからだ。いつそのことひどい暴風雨にでもなつて呉れれば、大砲は引つくりかへつてしまつたかも知れない。四つの車輪が

宙に返つたとなれば、こんな怪物でも片附けることはなんでもない。

ところが、暴威は益々募つて行つた。艦底の龍骨から各甲板を貫いて、圓柱のやうに立つてゐる檣柱も散々に皮がむけ、おまけに錆さへ入つた。大砲がひつきりなしに突き當るので、後檣には割れ目が出来、大檣さへもひどくやられた。大砲は大方毀れて、三十門の中十門は役に立たなくなり、舷側の孔は次第に敷を増して、遂にそこから浸水し始めた。

中甲板に降りて行つた老人は、階段の下に石のやうに突つ立つてゐた。彼はこの暴虐を険しい眼つきで眺めながら、ヂツと動かずにゐた。流石に一步も踏み出し兼ねてゐる様子である。

大砲が突き當る度に、艦は今にも粉々になつてしまひさうだ。もう暫くこの儘にしておいたなら、沈没する外はあるまい。生命はないものと覺悟するか、手取り早く事件を片附けるか、一同は二つに一つを選ばねばならなかつた。けれども、一體どうすればいゝのか？

この大砲はなんといふ強者だらう！ この狂人の怪物を取り鎮めねばならないのだ。この稲妻を捕へねばならない。この雷を取り挫がねばならないのだ。

外では、波が艦に衝き當る。どこからともなく聞えて来るその音は、大砲の暴れ廻る物凄しい音に和した。丁度二挺の槌が打ち合つてゐるやうであつた。

突然、一人の男が飛び出した。手には鐵棒を携へて、この大砲の荒れ狂つてゐる修羅場の眞中へ。見れば、惨事の責任者で、自分の怠慢から事件發生の因をつくつた砲手長であつた。彼は取返しにつ

かない事を仕出來したので、せめてもの賠償をしようと思つたのだ。右手には手鎗を、左手には、端の方を輪索にした舵綱を掴み、中甲板眼見けて飛び降りた。

異らしい闘ひは開始された。壮烈な戦だ、大砲と砲手との戦ひ、物體と智慧との争ひ、物と人との決闘が始まつたのだ。

彼は兩手に鐵棒と舵綱を握つたまゝ、甲板の片隅に突立つた。支柱を背に背負ひ、鋼の圓柱のやうな兩脚を踏ん張り、悲壯な、蒼白い、しかし強い決心に満ちた顔をして、甲板に根でも生えたやうな身構へをして待つてゐた。大砲が自分の傍を通るのを待構へてゐたのだ。

砲手は自分の手にかけて大砲をよく知つてゐた。大砲の方でも、主人の顔を知らないわけはないと思つてゐる様子。實際彼は長い間この大砲と一緒に暮したのだ。あの恐ろしい口の中にも何度手を突込んだか知れない！ この大砲も、彼には手飼の怪物だつたのだ。彼は犬でも呼ぶやうに叫んだ。「さあ来い！」彼はその大砲が好きだつたらしい。大砲が自分の方に向つて来るのを待つてゐるやうに見えた。

しかし、近づくといふのはのしかゝつて來ることなのだ。さうすれば、命はないものと觀念せねばならない。どうして、壓し潰されるのを免れる氣か？ それが問題なのだ。一同は恐怖の餘り、押黙つて彼の方を凝視めた。この瞬間、一人として自由に呼吸の出来る者はなかつた。いや、この物凄しい決闘者を前にしても、老人だけは或ひは別であつたかも知れないが。

老人とても押潰され兼ねはしなかつた。が、彼は微動だにしなかつた。

この闘ひは、艦の下をうねる盲目な波の采配通りに進んだ。

砲手は遂に白兵戦を望んで、自分から大砲眼蒐けて躍り出した。その時、どうしたはずみか、波の揺れ具合で大砲はピタリとそこに停つた。ほんの一瞬間であつたが、大砲が突然びつくりでもしたやうに――。「こつちへ来い！」と、砲手は怒鳴つた。大砲は耳を澄ましてゐるやうな様子をした。

そして、突然砲手に躍りかゝつた。砲手は巧みに身をかはした。

闘ひは始まつた、前代未聞の闘ひが、生身と不死身の闘ひが。生身の闘士が青銅の猛獣と渡り合ふのだ。一方は盲目な力で、相手は魂なのだ。

すべての出来事は薄暗い灯の下で行はれた。その情景は、さながら朧夜に奇蹟を見るやうであつた。

斷れた鎖の切れ端が大砲についてゐた。その鎖は、どうしたはずみか照尺の螺子に絡みついてゐた。鎖の一端は砲架に定着してゐたが、もう一方の端はダラリと下がつて、砲身のまはりを跳ねまはり、大砲の突進を一層危険なものにした。螺子は、ギユツと手で握つたやうに鎖を締めつけてゐた。鎖は革の鞭のやうに跳び廻つて、撞角の突撃に威勢を添へ、大砲の動きにつれて砲身のまわりに恐ろしい渦巻を畫いてゐた。正しく、青銅の拳に握られた鐵の管である。この鎖が、また一層闘ひを複雑にしたのだ。

それでも、砲手は怪まなかつた。しかも、折を見ては、自分の方から大砲に突つかゝりさへした。彼が鐵棒と綱とを手に持つて、横合から忍び寄らうとすると、大砲はそれを覺つてか、畏でも見つけたやうに逃げ去つた。彼は凄じい形相をして、命知らずに後を追つかけた。

しかし、こんな決闘は長く續くわけはなかつた。大砲は、突然「さあ、もう結着をつけなきやならない！」と、肚を決めたやうに見えた。と思ふと、急に停つた。人々は期せずして、いよ／＼最後だなど感じた。大砲は、立停つたまゝ、狂暴な思案を廻らすかのやうに、といふよりも、ちやんと思案を定めたやうに見えた。どこから見ても、感情を持つた生物のやうにしか見えないのだから――。と、大砲は出し抜けに砲手に躍り蒐つた。彼は、つと横さまに飛びのき、大砲をやり過しておいて、もう一度やつて見ろ！」と、笑ひながら怒鳴つた。大砲は猛り狂つて、左舷の大砲を一門打毀した。そして、その大砲を縛りつけておいた後の方の吊索に引つ掛かると、今度は逆に吹つ飛んで、右舷の方に避けた砲手眼蒐けて殺到した。が、再び身をかはすと、大砲は更に三門の砲を破壊し、もう盲目になつて、何をしてゐるのか覺えがなくなつたやうに、ぐるつと背を向けて、艦尾の方から艦首の方へ逸走し、肋材を折つて、舳の方の舷側を突き破つた。砲手は階段の下へ、デツと見据多てゐた老人から數歩の所に身を避けた。砲手が鐵棒を持つて身構へると、大砲はそれを感じいたらしく、今度は廻りもせず、背を向けたまゝ、鉞を打ち下したやうな速さで向つて來た。舷側の方へ押し詰められ、ば砲手の生命はない。一同は思はず聲を擧げた。

が、今の今まで身動きもしなかつた老船客が、その時電光石火の勢で躍り出た。そして紙幣の箱を取上げるなり、身を挺して、巧にそれを車輪の間に投げ込んだ。その箱は塞子の役を勤めた。小石でも丸太を停め、一本の樹枝も雪崩を外らすことがある。大砲は躓いた。砲手はこゝぞとばかり、後車輪の軸の間に鐵棒を突っ込んだ。大砲は遂に停つた。が、まだ隋力でよろめいてゐた。砲手は身をかじめ、鐵棒を挺子にして、大砲をあちこちとこぢり廻した。さしもの巨體も、鐘の落ちたやうな音をたて、ひつくりかへつた。砲手は汗を拭ふ暇もなく、舵綱の輪索を仰向けになつた怪物の青銅の首に捲きつけた。

これでやつと騒ぎは納まつた。人間は遂に勝つたのだ。蟻が巨象を従へたのだ。一寸法師が雷様を虜にしたのだ。陸兵も水兵も、揃つて手を拍つた。

乗組員は、みんな手に手に綱や鎖を持つて馳せ集り、大砲は瞬く間に固く繋かれた。

砲手はその便乗者に頭を下げていつた。「閣下、あなたは命の親でございませう」
老人は再び無感覺な態度に立ち歸つて、一言の返事もしなかつた。

六、天秤の兩端

人間は遂に勝つた。しかし、大砲の方もまた勝つたといへるかも知れない。目前の難破は免れたが、軍艦はまだ救はれたのではない。艦内の損害は手のつけやうもないほどであつた。舷側には五箇

所も孔があいた。その中艙の方の一箇所は非常に大きかつた。三十門の大砲の中、二十門は壊れてしまつた。やつと取録めて、鎖に繋いだ大砲も役にたゝなくなつてゐた。照尺の螺子がひん曲つたので、照準のつけやうがなくなつたのである。砲塔には九門の大砲が残つただけだ。艦艙には水が入つて来た。直ちに破損を修理し、ポンプで水を汲み出さなければならぬ。

敵の看視を免れるといふことも必要であつたには違ひないが、今となつては、即刻艦の安全を圖ることの方がもつと差迫つた必要であつた。そこで、甲板の上のあつちこつちに舷燈を出して、艦内を明るくしなければならなかつた。

しかし、この慘劇が続いてゐる間、すべての乗組員はたゞ生死の問題にばかり氣を取られて、他のことには一向氣がつかかなかつた。その間に霧は益々深くなり、天候は變つてゐた。艦は風のまゝに翻弄されて針路を離れ、ジェルシー島とゲルヌゼー島を遠ざかつて、豫定の航路よりずつと南に流され、荒海の眞只中に漂つてゐた。大波が襲ひ蒐つては、舷側の大孔に接吻した。なんとといふ危険な接吻だらう！海は脅かすやうに艦を揺すぶつた。先刻の風は疾風に變つてゐる。十間も先はずつかり見透しが利かなくなつてしまつた。

水兵たちが總がりで砲装甲板の應急修理を急ぎ、裂孔を塞ぎ、難を免れた大砲をもとの位置に直してゐる間に、老人は上甲板の方に去つて、大橋にもたれて立つてゐた。

ラ・ジューヴィル爵士は陸戦隊員を集めて、大橋の兩側に戦闘隊形を作らせた。兵曹長が呼笛

を鳴らすと、作業中の水兵たちはみな帆桁の上に直立した。

ポアベルトロ伯は老人の方に進み出した。

艦長の背後からは、破れ服を着た、狂暴な顔つきの男が一人、息を切らしながら、しかも満足さうな様子をしてついて行つた。それは、今し方あの怪物を向うに廻し、運好く大砲を取り鎮めることの出来た砲手であつた。

伯爵は、どこの馬の骨かわからない百姓姿の老人に敬禮して、

「將軍、これが本人であります」といつた。

砲手は、眼を伏せて直立不動の姿勢をとつてゐた。

「將軍、この男の行爲に對しては、艦長として何かしてやるべきだとお考へになりませんか」

「さう思ふね」と、老人は答へた。

「どうぞ、命令して下さい！」とポアベルトロはいつた。

「それは君の任務ぢや。君は艦長ぢやないか」

「しかし、閣下は將軍です」と、ポアベルトロは答へた。

老人は砲手の顔を眺めて、「前へ！」と命令した。

砲手は一歩前に出た。

老人は艦長ポアベルトロ伯の方に向いて、軍服の胸につけてゐたサン・ルイ十字勳章を取り外し、

それを砲手の上衣につけてやつた。

「萬歳！」水兵達は歡呼の聲をあげた。陸戦隊の兵士は捧げ銃をした。

と、老人は、面喰つてゐる砲手を指して突然かう浴せかけた。「さあ、この男を銃殺しろ」

歡呼の聲はピタリと止んで、忽ち死のやうな沈黙に變つた。

それから、墓場のやうな静けさの中を、老人は一段と聲を張り上げていつた。

「一つの過失は、艦の生命を危くした。艦は今にも沈没するかもしれぬ。軍艦が乗出すのは敵に向ふ

ことである。外洋に出た軍艦は、交戦中の軍隊と同じことだ。嵐は、姿を潜めてゐても何時頭を擡げ

るかも知れない。海全體は伏兵なのだ。敵前に於ける過失は、その輕重を問はず死刑に該當する。如

何なる過失も償ふことは出来ぬ。勇氣は表彰せねばならぬ、が、過失は罰せねばならないのだ」

この言葉は一つく、櫂の木を打つ斧の音のやうに、靜かに、重々しく、儼として冒し難い調子で

その肩を洩れて來た。それから、老人は兵士たちの方に向いて命令した。

「お前等の義務を果せ」

胸にサン・ルイ勳章を輝かせた男は、首をうな垂れた。

ポアベルトロ伯の合圖で、二人の水兵は中甲板に降りて行つたが、やがてハンモックの屍衣を持つ

て來た。出帆以來士官室で祈禱してゐた軍艦附牧師が、二人の後に従つて來た。兵曹は陸戦隊から十

二名の兵卒を選んで、それを六名宛二列に分けた。砲手は今一言も發せず、その列の間に挟まつ

た。牧師は十字架を捧げて砲手の傍へ進んだ。「前へおいつ！」と兵曹が號令した。小隊は緩やかな歩調で船の方へ進んだ。二人の水兵は屍衣を持つて後に續いた。

艦の上には陰惨な静寂が漲つた。遠くの方に、嵐の咆哮が聞えた。

それから數秒の後、閃光がパツと暗に映じた、續いて銃聲が起つた。反響が暗闇から戻つて来て、一切はまたもとの静寂に歸つた。その時、人の身體が海に落ちる物音がした。

相變らず大櫓を背にした老人は、腕を組んで黙想に耽つてゐた。

ボアベルトロは左手の指でその方を指しながら、小聲でラ・ヴューヴィルにいつた。

「ヴァンデーには大將が出來たぜ」

七、船出する者は籤抽く者

しかし、軍艦はどうなるであらうか？ 夜通し波に觸れあつてゐた雲は、今は水平線も見えないほどに厚く垂れ下り、海全體は宛らマントに包まれたやうになつた。眼を遮るものとしては霧だけで

あつた。こんな天候は、船が完全であつてさへ危険の上ないものであつた。

霧の上にもつて来て、恐ろしい大波濤さへ加はつてゐる。艦の中では、時を移さずあの大砲が毀し廻つた跡を片付け、毀れた大砲や、肋材の歪んだもの、落ちたもの、散亂した木片や鐵片など、棄てられる限りのあらゆるものを棄てて艦脚を軽くしようとなつた。死骸や肉片などは、防水布に包んで

舷門から海の中へ投げ込まれた。

海は次第に手に負へなくなつてきた。それは颶風の勢がひどかつたからではない。水平線のかなたに狂つてゐる颶風は反つて次第に遠ざかり、狂風は北の方へ移つてしまつたらしかつた。しかし波は相變らず高かつた。海は容易に静まりさうにも見えない、流石の軍艦もこんな情ない状態になつては殆ど動搖に耐へ難く、或は大波のために致命傷を負はされるかも知れない有様であつた。

ガコアルは物思はしげな顔をして、舵輪を握つてゐた。

悪運に對しても健氣な顔をして立向ふといふのが、海の勇者の慣はしであつた。

どんな災難が降りかゝつても反つて元氣になるといふやうな肌のラ・ヴューヴィルは、ガコアルの方に近づいて來た。

「どうだい、舵手、颶風は外れたね。奴さん、一泡吹か、こようつてんだらうけど、鼻を明かされちやつたね。この分なら切りぬけられるよ。風が出て呉れさへすりや、もう占めたもんだ」

ガコアルは眞面目な顔をして答へた。「風があれば、必ず波がありますよ」

笑ひもしなければ、悄氣もしないといふのが船乗の常である。この返事には不安な意味が籠つてゐたのだ。浸水しかゝつた艦は、波に會へばそれだけ早く水が増す。ガコアルは眉をしかめて、不吉な豫想を臭はせた。大砲と砲手の慘劇が濟んだばかりだといふのに、ラ・ヴューヴィルがこんな快活な、愉快さうなといつてもいゝぐらゐな言葉を出すのは少し早まつてゐたかもしれない。沖に出てゐる時

には、よく不幸を招く出来事があるものだ。海は祕密家で、何を企らんでゐるのか解りつこない。
ラ・ヴェーヴィルは眞剣に歸らなけりやならないと感じた。

「舵手、艦はどの邊にゐるんだね？」と、彼は尋ねた。
舵手は答へた。「我々は神様の御手の中にあるんです」

ラ・ヴェーヴィルは舵手に尋ねたのだが、それに答へたのは水平線であつた。

海は俄に明るくなつた。波の上に垂れこめてゐた霧は急に切れた。水平線の涯まで押擴がつた暗い波の亂舞は、薄明りの中に現はれて來た。眼に見えるものとしてはたゞそれだけであつた。

空は雲の蓋で掩はれてゐた。が、その雲はもう海面にまでは垂れ下つてゐなかつた。東はほのく明けに白み渡り、西の空は、月の落ちるあたりに青白い光がたゆたつてゐた。この二つの幽かな光は、水平線の端々にむかひ合ひ、薄暗い海と陰暗な空とを劃して、細い二條の薄明りの線を引いてゐた。

この二條の明りの中には、いづれも直立した黒いものの姿が浮かんでゐた。が、それはどつちも同じやうに動かない。西の方のは月明りの空にそゞり立つた三つの大岩で、丁度ケルト族の記念碑のやうな恰好をしてゐた。(譯註 直立した數個の石柱の上に大扁石を載せてつくつた英國上古の記念碑) 東の方には、夜明けの白み渡つた水平線上を背に、整然たる間隔を保つて、舳艫相ふくんだ八隻の恐るべき艦影が現れた。

三つの岩は岩礁で、八隻の艦は艦隊であつた。艦は背後に有名な難所のマンキエーの岩を控へ、前には佛蘭西の巡洋艦隊を迎へたのだ。西には底知れぬ深淵があり、東には殺戮がある。
正しく沈没と戦争との挟み撃である。

岩礁を防がうにも、軍艦の舷は破れ、船具は千切れ、帆柱は根元からグラ／＼してゐた。戦争をしようにも、三十門の大砲の中二十一門は破壊せられ、一番腕利きの砲手は死んでしまつたのだ。

曉はまだ覺め切らなかつた。夜の名残がなかく／＼に消えやらない。が、その暗さは、大部分、高くて厚ぼつたい分厚な圓天井のやうな雲のせみだつたので、暫くはそのまゝ續きさうに思はれた。

海面に近い霧を吹き散らした風のお蔭で、艦は否應なしにマンキエー島の方へと吹き流された。艦體はもはや綿の如くに疲れ、散々に打毀されて、舵も殆んど利かなくなり、走るといふよりは、波濤を喰つて横揺れするばかりであつた。波は益々猛り狂ひ、本意なくもその翻弄に任すより外はなかつた。

その頃、マンキエー島の岩礁は今よりも一層劔呑であつた。深淵にそゞりたつこの城砦の高樓の幾つかは、不斷の波に洗はれて、遂に崩れ去つた。岩礁の外形も變つた。波を海洋の劔と呼ぶのも理である。潮の満干こそ鋸を引くやうなものだ。で、その當時、マンキエーの岩礁に乗り上げるのは、沈没することに他ならなかつたのだ。

一方巡洋艦隊は、レキニオが「父デュシエーヌ」と名づけたデュシエーヌ艦長麾下の、有名なカ

ソカール艦隊であつた。

形勢は危機に類してゐた。軍艦は、鎖を斷ち切つた大砲の荒れ狂つてゐる間に、知らず／＼針路を外れて、サン・マロよりもグランヴィル寄りの方へ進んでゐた。たとへ立派に操縦が出来て、帆走し得たとしても、マンキエー島はジェルシー島への歸路を遮り、巡洋艦隊は佛蘭西への針路にたちはだかつてゐたのだ。

狂風は既に去つたが、舵手のいつたやうに、波濤はなくならなかつた。海は激しい風に打たれ、岩だらけの海床の上を物凄く荒れ狂つてゐた。

海は、自分のしたいと思ふことを決して直ぐに口には出さないものだ。あの深い水の底にはなんでも隠してある。いろ／＼な手管さへも隠してある。海には、一定の計畫があるやうにさへ見える。進むかと思へば退き、いひ出したかと思へば、その裏を行く。暴風を捲き起すかと思ふと、急に豫定を變へ、底知れぬ深淵に引き込むのかと思へば、忽ち見切りをつけてしまふ。北を脅かしておいて、矢庭に南を襲ふのだ。

軍艦クレーモア號は一晚中霧に惱まされ、暴風を恐れて來た。海の様子は變つたが、反つて物凄くなつた。海は暴風を描きかけて、急にそこへ岩礁を出した。形こそ異へ、矢張り沈没は免れられなかつたのだ。

岩礁にぶつかつて沈没するおまけに、戦争で全滅するといふ危難さへ加つた。新手の勢が敵の味方

についたのだ。

ラ・ヴェーヴィルは豪快な口調で、陽氣さうに叫んだ。

「こつち向きあ沈没、あつち向きや戦争か！ どつちを見ても素晴らしいもんだよ！」

八、〇〇〇〇〇〇

軍艦は、もう一個の殘骸に過ぎなかつた。

あたりの無氣味なほの白さに、雲の黒い姿に、水平線の複雑な動きに、波の不思議な陰鬱さの中に、墓場のやうな莊嚴さが漂つてゐた。逆風の激しい息づかひの外は、みんな静まりかへつてゐた。異變は堂々と海原から現はれて來た。それは攻撃して來たといふよりも姿を現したといつた方がふさはしかつた。岩も動かなくなつた、艦上でも動くものはなかつた。なんといふ偉大な沈黙であらう！ 軍艦は、今や魔の岩礁と亡靈の如き艦隊の間に挟まれてゐるのだ。

ボアベルトロ伯は小聲で、ラ・ヴェーヴィルに命令を傳へた。ラ・ヴェーヴィルは砲裝甲板へ降りて行つた。艦長はそれから望遠鏡を取り上げ、自ら艦尾に出懸けて舵手の傍に陣取つた。

ガコアルは必死になつて、艦を波に向はせようと努力してゐた。もし、風と波とを横腹に受ければ一堪りもなく沈むよりほかはなかつたからだ。

「舵手、こゝはどこだね？」と、艦長は訊いた。

「マンキエー島附近です」

「どつちの側だ？」

「剣呑な側です」

「底は何だ？」

「小さい岩です」

「方向を變へられるかね？」

「死ぬより外はありません」と、舵手は答へた。

艦長は望遠鏡を西の方に向けて、マンキエー島を眺めた。それから東へ向けて、艦の帆を眺めた。

舵手は獨語のやうにいつた。「あれがマンキエー島でさ。鷗や黒い羽の大鷗が和蘭へ飛んで行く

時には、きつとあすこで休むんです」

その時、艦長は黙つて帆の敷を勘定してゐた。

それは紛れもなく戦闘隊形を取つた八隻の軍艦であつた。その真中には、三段甲板の軍艦が一際高

く抜け出て見える。艦長は舵手に尋ねた。

「お前、あの艦を知つてるかい？」

「知つてますとも」と、ガコアルは答へた。

「何だい？」

「艦隊ですよ」

「佛蘭西のかい？」

「畜生の艦隊でさあ」

ちよつと話は途切れたが、艦長はまた尋ねた。「巡洋艦隊の全部かね？」

「全部ちやありません」

さうだ、ヴァラゼは四月二日の議會で、二等艦十隻と、戦闘艦六隻とが英佛海峡を遊弋してゐると

報告した。艦長はそれを想ひ出した。

「さうだ、艦隊は十六隻だが、あすこには八隻しかゐないね」と、彼はいつた。

「残餘の艦はあつちの海岸線全體に互つて警戒してますよ」と、ガコアルがいつた。

艦長は、なほも望遠鏡を眼にあてながらつぶやいた。

「三段砲装艦が一隻、第一線の二等艦が二隻、第二線の二等艦が五隻か」

「私だつて、見當はつきしましたよ」と、ガコアルがつぶやいた。

「いゝ軍艦ばかりだなあ。わしもあれを指揮するやうになつたこともあつたんだが」と、艦長はい

つた。

「私は直ぐ傍で見たことがあるんですよ。どの艦だつて見損ひつこはありやしません。艦の中味なん

ざあ、一々頭の中にしまつてあるんですからね」と、ガコアルがいつた。

艦長は望遠鏡を舵手に渡した。

「舵手、舷の高い三段砲装艦がなんだか解るか？」

「はい、艦長、あれは『ラ・コート・ドール』號です」

「さういふ名前をつけたんだね。あれは前には『レ・ゼタ・ド・ブルゴーニュ』といったんだ。新造艦で備砲百二十八門だよ」といひながら、ポケットから手帖と鉛筆を取り出し、百二十八といふ數字を書きつけた。

「舵手、左舷の一番艦はなんていふんだね？」

「あれは『レクスベリマンテ』號です」

「第一線の二等艦で、備砲五十二門だ。二月前にブレストで艦装したばかりだ」

艦長は手帖に五十二と書いた。

「舵手、左舷の二番目は何だい？」

「『ラ・ドリヤード』號です」

「第一線の二等艦、十八挺砲四十門か。印度へ行つてた艦だ。なか／＼聞えた艦だぜ」

彼は五十二といふ數字の下へ、四十と書きつけた。そして頭を上げて、「今度は右舷だ」

「艦長、こつちはみんな第二線の二等艦ですよ。みんなで五隻ですな」

「一番目は何だい？」

「『ラ・レンリュ』號です」

「十八挺砲三十二門か。二番目は？」

「『ル・リシユモン』號」

「備砲同じと。次は？」

「『ラテー號』(譯註「無神論者」の意)

「軍艦にしちや妙な名前だな。次は？」

「『ラ・カリブソ』號」

「それから？」

「『ラ・ブルヌーズ』號」

「みんな三十二門の二等艦だな」

艦長は初めの數字の下に百六十と書き足して、「舵手、お前よく見分けがつくね」といつた。

「艦長、貴下はまた詳しいんですな。見分けをつけるつてことも必要だが、知つてゐるつてことは更に上々ですよ」と、ガコアルが答へた。

艦長は手帖を見つめて、口の中で寄せ算をした。

「百二十八、五十二、四十、百六十と」

その時、ラ・ヴューヴィルがまた甲板へ上つて來た。

「君、我々は三百八十門の大砲を向うに廻してゐるんだぜ」と、艦長が叫んだ。
さうですか」と、ラ・ヴェーヴィルはいつた。

「ラ・ヴェーヴィル君、君は點檢を終へたんだね。使へる大砲は何門あるかね？」
「九門です」

「さうか」と、今度はボアベルトロがいつた。

彼は舵手の手から望遠鏡を受取つて、再び水平線の方を眺めた。

八隻の軍艦は黒く静かで、動いてゐるやうにも見えなかつたが、次第に形は大きくなつて來た。
ラ・ヴェーヴィルは敬禮をして、

「艦長、御報告致します。私はこのクレイモア號を信用してゐなかつたのです。艦長の顔も知らなければ、馴染も持たない艦に突然乗組むなんて、いゝ氣持のするもんぢやありません。英吉利の軍艦で、佛蘭西への裏切者。あの砲の狼籍振りを見つて解ります。點檢は終りました。錨は大丈夫です。鑄鐵でつくつたんでなくて、鐵棒と鐵槌を繋ぎ合せた代物です。錨爪もがつしりしてをります。鎖も優秀なもので、繰出し易く巻いてあり、長さは規定通り百二十尋あります。彈藥は十分あります。砲手は六名死亡。一門につき百七十一發撃てる勘定です」

「九門しか残つてゐないからだらう」と、艦長がつぶやいた。

ボアベルトロは望遠鏡をかざして水平線の方を眺めた。艦隊は徐々に近づいて來るのであつた。

海砲には一つ便利な點がある。それはたつた一人で一門を受持つてゐることである。しかし不便なことには、野砲のやうに遠距離の射撃には向かないし、正確な照準もつけ難い。で、止むを得ず、敵艦隊が着弾距離に入るのを待つ外はなかつた。

艦長は低聲で命令を下した。艦内は静まりかへつてゐた。戦闘準備の命令一下、準備は立ちどころに整つた。軍艦は、波に堪へ難くなつてゐると共に、人に對しても戦ふ能力はなかつた。それでも、せめてこの軍艦の残骸を出来るだけ働かせようと、あらゆる努力が盡くされた。船輪の傍の舷門の邊には、出来るだけ澤山の太綱や、不用の針金などを積み重ねて、危くなつたらいつでも橋を支へる準備をした。負傷兵の收容所も準備された。その當時の海戦術に従つて、上甲板は全部掩蔽された。しかし、これは銃彈に對する遮蔽で、砲彈を防ぐことは出来ない。口径検査器も持ち出された。今頃になつて口径を検査するなんて少し間拔けた話ではあるが、こんな突發事件は、誰しも豫想出来ることではないのだ。水兵たちは銘々彈藥盒を受取り、帶革には二挺のピストルと短劍を差した。ハンモックは片附けられ、砲の配置は成り、銃の用意は出來た。鉞や鈎竿も取り出され、藥莢倉や彈丸倉の準備も出來、火藥庫の扉も開かれた。全員は銘々の持場に就いた。一切の作業は、危篤の病人の枕許でもやつてゐるやうに、全然無言の裡に運ばれた。すべては迅速で、憂色に包まれてゐた。やがて、艦は偏舷射の姿勢をとつた。錨は二等艦のやうに六箇あつたが、六箇共みな下ろされた。大錨は前方に、中錨は後に、波錨は沖の側に、干潮錨は岩礁の方に、右舷錨は右舷に、主錨は

左舷に投ぜられた。残つた九門の海砲は、悉く敵の方に向けて一列に配置された。

艦隊の方でも、こつちと同様無言の裡に準備を整へてゐた。八隻の軍艦は、今やマンキエー島に向つて半圓形を作りつゝあつた。クレーモア號はこの半圓の中央に引き据ゑられ、おまけに自分の錨で括りつけられて、あの岩礁を背に、——いはゞ沈没の厄を背負ひつゝ腰を据ゑたのだ。恰も一匹の猪を取り巻いた獵犬の群のやうに、敵は聲こそ出さなかつたが、恐ろしい齒をむき出してゐたのだ。

雙方ともに、なにかの信號を待つてゐるらしい氣配であつた。

クレーモア號の砲手たちは位置に就いてゐた。

ボアベルトロはラ・ヴェーヴィルにいつた。

「もう火蓋を切らうと思ふがね」

「それは面白いですな」ラ・ヴェーヴィルは嘯いた。

九、誰かゝ逃げる

あの便乗者は上甲板を去らなかつた。そして相變らずの無感覺な面持で一切の様子を眺めてゐた。ボアベルトロは彼に近づいていつた。

「將軍、準備は整ひました。我々は、今墓場にしがみついてゐるのです。そして、最後まで、その手

を放しません。我々は艦隊か、暗礁か、どつちかの捕虜になつてゐるのです。敵に降るか、岩礁に碎けるか、この二つより外途はありません。唯だ死の一途あるのみです。沈没するよりは、決戦の方がいゝと思ひます。溺れるよりも、撃たれた方がましだと思ひます。どうせ死ぬなら、私は水よりも火の方を選びます。しかし、死ぬといふのは我々だけのことで、閣下の問題ではありません。閣下は諸侯に選ばれて、ヴァンデーの戦争を指揮するといふ重大な任務を帯びてゐられるのです。閣下は失つたら、もはや王國回復の望みはありません。閣下はどこまでも命を全うされなければなりません。我々の名譽はこゝに踏留まることですが、閣下の名譽はこゝを逃れよと命じてをります。將軍、あなたは、艦をお去りにならねばなりません。一人の男と一艘のボートを差上げませう。迂迴なされば、海岸に着くことは不可能ではありません。まだ夜は明けませぬ。波は高いし、海は眞暗です。閣下は、無事に逃げ了せられます。負けるが勝といふ場合もあるんですから」

老人は、解つたといふしるしに嚴めしい頭を振つて見せた。

ボアベルトロ伯は一段と聲を張り上げて叫んだ。「陸戦隊も水兵もみんな聞け！」

一切の作業は止んで、艦内に入る處から現れた顔は、みんな艦長の方を向いた。伯は言葉を續けて、「こゝにをられるお方は國王を代表してをられるのだ。我々が一旦お預りした以上は、必ず無事に送り届けなければならぬ。このお方は佛蘭西の王位のために必要なのだ。皇子がをられないので、ヴァンデーの總指揮官になられるのだ。少くも、我々はさう期待してゐる。實に立派な將軍だ。本來は、

我々と共に佛蘭西に上陸される筈であつた。が、我々が上陸出来ないでも、閣下だけは上陸おさせ申さねばならない。頭を助けることは全身を救ふことなんだ」

「さうだ！ さうだ！ さうだ！」と乗組員は異口同音に叫んだ。

艦長は更に言葉を續けて、

「閣下もまた非常な危険を冒されるのだ。海岸に着くのは容易なことぢやない。荒海を渡るには大きな船でなければならぬが、艦隊の眼を免れるには小さいのでなければ駄目だ。當面の問題は、どこか安全な所へ、――クータンスの海岸よりも、むしろフージェール方面の海岸に上陸するに在る。それには、ボートが上手で、水泳の達人な、頑丈な身體で、土地の人間で、この海峡の地理に詳しい者が必要なのだ。まだ夜も明け放れないから、敵に見咎められずにボートを出すことは何でもない。それに煙も立つことであらうから、姿を隠すには持つて来い。小さい舟だから、暗礁も乗り切れるだらう。豹が捕まる時でも、颯は逃げられる。我々はもう逃げることは出来ないが、閣下には逃道がある。ボートはドン／＼漕いで逃げる。敵艦もそれには氣がつくまい。そこへ、こつちぢや頃合を見計つて、奴等にお慰みをさせてやるんだ。どうだ、それでいゝだらう？」

「さうだ！ さうだ！ さうだ！」と、全員が叫んだ。

「一刻も猶豫は出来ない。誰か志願する者はないか？」と、艦長が尋ねた。

暗がりの列の中から、一人の水兵が飛び出して、「私が参ります」と叫んだ

十、彼は逃げ了せるか？

暫くの後、艦長専用の小短艇と呼ばれるボートが一艘、軍艦を離れた。ボートには二人の男が乗つてゐた。あの老人は後の方に、「志願した」水兵は前に。夜はまだ明け放れてゐなかつた。水兵は艦長の指圖通り、マンキエー島の方角に向つて一生懸命に漕いでゐた。それは他に逃路がなかつたからである。

ボートの船底にはビスケツトが一袋と、燻牛舌肉が一片、水一樽といふ兵糧が載せてあつた。

ボートが舷側に吊り降された時、死に臨んでも戲談だけは止めないラ・ヴェーヴィルは、尾材の上に乗れ出して、こんな皮肉な別れの挨拶を投げた。

「逃げるにも持つてこいの舟だが、土左衛門にならうつてのにも誂へ向だぜ」

「副長殿、戲談は止めにしませう！」と、舵手がいつた。

ボートは大急ぎで漕ぎ出した。艦との距離は次第に遠ざかつて行つた。風も波も誂へ向だつたので、ボートは大波の壁に隠れ、薄明りの中に揺られながら、矢を射るやうに逃れ去つた。

海上には、何とも形容の出来ぬ暗い期待のやうなものが漲つてゐた。

と、突然、この茫洋とした眼まぐろしい大洋の沈黙を破つて、一つの聲が起つた。古代悲劇の眞鍮のマスクでも強めたやうに、擴声器で大きくされたその聲は、人間業には出来ない聲のやうに響い

た。それはポアベルトロ艦長の命令であつた。

「王の水兵共、王黨旗を大橋に掲げろ！ いよく最後の御來迎を拜むんだ」

それと同時に、一發の砲聲が艦内に響き渡つた。

「國王萬歳！」と、乗員は絶叫した。

すると、遠く水平線のかなたから、大勢の聲で騒然としてはゐるが、しかもはつきりと、もう一つ

の叫聲がそれに答へて反響して來た。

「共和國萬歳！」

そして、百雷が一時に落ちたやうな音が大洋の全面に爆發した。戦ひは始まつたのだ。海は煙と火で埋まつてしまつた。水に落ちた砲彈の水煙は、到る所で白く海面を浮き出させた。

クレイモア號は、一時に八隻の軍艦眼蒐けて砲彈を打放した。敵艦隊はクレイモア號を遠巻きに半

圓を畫いて、八方から砲火を浴びせかけた。水平線の彼方は炎の空と變つた。突然海中から火山が

噴き出したやうな光景である。

風はこの廣大な炎の幕を吹きうねらせ、敵艦はその間を縫つて、亡靈のやうに見え隠れした。クレ

イモア號の黒い骸骨は、その眞赤な炎を背景として立つてゐた。百合の花を描いた白い王黨旗は

大橋に翻つてゐた。

ポートに乗つた二人は無言のまゝであつた。

マンキエー島の三角形をなした淺瀬は、海底に突き出た三角臺のやうなもので、面積はジェルシー

島全體よりも廣く、海がその上を掩うてゐる。その絶頂は滿潮の時でも露はれてる高臺を成し、そこ

から東北の方角に六つの巨岩が突き出てるが、それがみな一直線に列んで、所々崩れた大壁のやう

な觀を呈してゐた。その高臺と六つの大岩との間は、船脚の淺い小舟しか通れない。その水路さへ突

切れば、もう外洋である。

ポートの運命を握る水兵は、その狭い水路に舟を漕ぎ入れた。ポートはマンキエー島に距てられ

て、遙か彼方の海戦から益々遠くなつた。右や左に舵をかはして暗礁を避けながら、彼は巧みにその

難所を切り抜けた。今は、岩のために戦場は隠された。距離が遠ざかるにつれて、水平線上の閃光

や、恐ろしい砲撃の轟音も次第に微かになつた。が、まだ大砲の音が絶えぬところを見れば、クレイ

モア號は勇敢に對抗して、百九十一發の最後の一發までも撃ち盡くす心算であるらしい。

やがて、ポートは暗礁を出外れた。戦争からも遠い、敵弾も届かない安全な場所に出た。

海の面はだん／＼はつきりし始めた。黒雲を衝いて出る光は益々擴がつて行く。波の飛沫は光と散

り、波頭は白く照り映えた。夜は全く明け放れた。

ポートは、遂に敵からだけは逃れることが出來た。が、まだ一番困難な問題は片附いてゐなかつ

た。砲彈の雨は逃れたにせよ、沈没の惧はまだ去らなかつた。ポートは外洋の眞中に出た。甲板も

なければ、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

なれば、帆も櫓もコンパスもなく、唯だオールだけを頼みに、大洋と嵐を突破しようといふ卵

の殻にも等しいこの一輕軻は、宛ら巨人に翻弄される一箇の原子のやうなものであつた。その時、ボートの舳の方に坐つてゐた男は、この果しもない淋しさの中に、朝の光で白みがつた顔を擡げ、艦の方にゐる男の顔をぢつと凝視めてかういつた。「わたしは、閣下が銃殺させた男の舎弟ですぜ」

第三篇 水兵アルマロ

一、話は神の御聲

老人は靜かに頭を擡げた。

言葉をかけた男は年の頃三十ぐらゐであつた。額には潮風で焼け、眼は異様に輝いてゐた。その眼つきは、百姓の純朴な眼球から出る船乗りの鋭い眼つきである。兩の腕にはしつかりと二本の權を握つてゐた。が、様子を見れば、いかにも優しさうな男である。

水兵の帶革には短刀と、二挺のピストルと、數珠が挟んであつた。

「お前は何者だ？」と、老人は訊ねた。

「今いつたぢやないか」

「わしにいひたいことがあるのか？」

「貴様を殺さうつてんだ」水兵はオールを放し、腕を組んで答へた。

「ぢや、御自由に」と、老人はいつて退けた。

「覺悟をしろつ！」と、相手が怒鳴つた。

「何の？」

「死ぬ覺悟だ」

「なぜ？」と、老人は聞き返した。

暫く沈黙が続いた。水兵はこの間にちよつと面喰つたやうであつたが、また同じことを繰返した。「俺は貴様を殺さうつていつてゐるんだ」

「だから、どうしてだつて訊いてゐるんだよ」

水兵の眼は稻妻のやうに閃いた。

「貴様あ、俺の兄貴を殺したからだ」

老人はどつしりと落着いて、それに答へた。「わしは最初、命を助けてやつたよ」

「そりやさうだ。初めにや助けたけど、矢つ張り後で殺したんだ」

「殺したのはわしではない」

「それぢや、誰だ？」

「彼の過失だよ」

水兵はボカンと口を開けて、老人の顔を凝視めた。が、眉は再び迫つて殺氣立つて来た。
「お前の名は何といふんだね？」と、老人は訊ねた。

「アルマロつてんだ。が、俺が殺さうつていふのに、俺の名を聞く必要なんかありやしない」
その瞬間に太陽は昇つた。水兵は眞正面から光線を浴びて、その殺伐な顔は鮮かに照らし出された。老人は仔細にその顔を吟味した。

今だに續いてゐた砲聲は、途絶えたかと思ふと間遠になり、次第に臨終の調子を刻んでいった。空一面に押擴がつた煙幕は、水平線の方に消えかゝつてゐた。漕手の手を置いたボートは風のまに流されてゐた。

水兵は右手で帯革のピストルを抜き出し、左手で數珠を握つた。

老人はスツクと起ち上つた。「お前は神を信ずるか？」

「天に在す我等の父を」と答へて、水兵は十字を切つた。

「お前は母親があるか？」

「はい」彼は二度目の十字を切つてから、

「もうそれでおしまひだ。一分だけ待ちませう、旦那」といつて、ピストルに弾丸を込めた。

「なぜわしを『旦那』だなんていふんだ？」

「領主だからぢやないか。一目見りや判るよ」

「お前にや、領主があるのかい？」

「あるよ。しかも素晴らしいんだ。誰だつて領主を持たねえ奴はありやしないよ」

「その領主はどこにゐるかね？」

「俺あ知らねえ。國を出ちやつたんだよ。殿様は、フォントネー子爵で、ブルターニユの貴族のラン

トナック侯爵てんだ。そして『七つ森』の殿様だよ。俺は見たこたあねえけど、御主人様だつてこ

とにや變りはねえ」

「で、もしお前が殿様にお眼通りしたらいふことを肯くかね？」

「勿論だとも。いふこと肯かなかつたら、異端者になつてしまふからな。俺は神様が有難いんだ。そ

の次は、神様のやうな王様で、それからが王様のやうな殿様なんだ。が、そんなこたあなんの關係も

ねえや。貴様あ、俺の兄貴を殺したんだ。貴様を生かしちやあ置けねえ」

「よろしい、わしはお前の兄を殺した。わしは立派にやつた」老人は答へた。

水兵は一層力を入れてピストルを握りしめた。

「いゝか」と、彼はいつた。

「よろし」と、老人は應じた。

それから、少しも取亂した氣色を見せず、從容としてかう附加へた。

「牧師はどこにゐるかね？」

「牧師？」水兵は老人を凝視めた。

「さうだ、牧師だよ。わしはお前の兄にも牧師をつけてやった。お前もわしに一人つけて呉れなきあならん」

「牧師なんかおねえ」と、水兵がいつた。そして、續けさまに、「海の眞中に坊さんなんかおるものか？」と怒鳴つた。

股々たる砲聲は益々遠くなつた。

「あそこで死ぬ者にも、牧師はついてゐる」と老人はいつた。

「そりやさうだ。軍艦附の牧師さんがゐる」と、水兵は口の中でいつた。

老人は言葉を續けて、「お前はわしの魂をなくしてしまふのか、それは滅相もないことだ」水兵は首をうなだれて考へこんだ。

「で、わしの魂をなくしてしまへば、お前自身の魂も失ふのだ。いゝかね。わしはお前が氣の毒でならないんだ。お前は自分の好きなやうにしたらいゝ。が、さつき事は、わしにして見りや、義務を果したただけなのだ。最初お前の兄の命を救つたのも、後で命を取つたのもね。そして、今はお前の魂を救ふために、やつぱりわしの義務を盡してゐるだけなのだ。考へて見なさい。自分の事ですぞ。お前には、あの砲聲が聞えるかい？ あそこでは、大勢の人が死んで行つてゐるのだ。苦しき藻掻いてゐる重傷者がゐるのだ。再び妻に會ふことの出来ない夫もゐる。二度と子供の顔を見られぬ親も

ある。また、お前のやうに、兄弟に會へなくなる人間もあるだらう。が、一體それは誰のせむなんだ？ お前の兄の過失のせむぢやないか——言はばお前のせむだ。お前は神を信ずるといつたね。それぢや、神様は今悲しんでいらつしやるといふことが解るだらう。神様は神子イエス様のやうに愛する御子の佛蘭西國王が、タンブルの要塞に囚へられてゐることを悲しんでをられるのだ。神様はブルターニュの教會のために悲んでをられる、また辱しめを受けた寺院や、潰された福音や、蹂躪られた祈禱所のために、命を落とした牧師たちのために悲しんでゐられるのだ。今、あそこで沈み行く軍艦に乗つて、我々は一體何をしに來たんだ？ 我々は神様の加勢に來たんぢやないか。もしもお前の兄が立派な下僕であつたなら、そして怠りない賢者のやうに忠實に任務を果してゐたなら、あの大砲の慘事などは起らず、軍艦は針路を過らず、あの恐るべき艦隊の重圍にも陥らずに濟んだであらう。そして、今頃は一同勇み立ち、歩武を揃へて堂々と上陸し、王黨旗を振翳して、佛蘭西を救ひ、國王を救ふために、ヴァンデーの百姓の味方をしてゐる時だ。つまり、神の御仕事に携はつてゐるのだ。我々はさういふ仕事をしに乗つたのだ、しなければならなかつたのだ。そして、それを果すために遣されたのは、たつた一人残つたこのわしなのだ。しかし、お前は今それに反對してゐる。この異端者と牧師の戦、弑虐者と國王の戦、悪魔と神との戦に於て、お前は悪魔の味方をしてゐるのだ。お前の兄は悪魔の一番目の廻し者で、お前は二番目だ。あの男が手をつけて、お前が仕上げるのだ。お前は弑虐者に味方して國王に矛をむけ、異端者に與して教會に刃向ふんだ。お前は、神の最

後の手段を奪はうとしてゐる。國王を代表するわしがゐなかつたら、村々は燃え続け、無辜の民は泣き、牧師は血祭にあげられ、ブルターニユは苦しみ、國王はいつまでも囚はれの身となり、イエス・キリストは憐み続けられるであらう。そして、誰がそんな羽目に陥れるのか？ お前だ。さあ、やれ、お前の勝手にせい。わしは國難を救はうと思つて、お前を頼みにしてゐたのだ。わしは裏切られたのだ。いや、全くさうだ、違ひない。わしはお前のいふ通り、お前の兄を殺したんだ。お前の兄は勇敢だつたから、褒美をやつた。そして責任があつたから、罰したのだ。彼は自分の義務を怠つたが、わしは自分の義務を果たしたまでだ。わしの今日したことは、これからでもやる。そして、今日と同じやうな場合には、わしは我々を見守つてゐるあの偉大なサント・アンヌ・ドーレーにかけて、お前の兄を銃殺したやうに、わしの子供でも銃殺してしまふことを誓ふ。が、かうなつちや、お前の勝手だ。といつても、わしはお前を憐れんでゐるんだよ。お前は艦長に諷をついたね。お前はクリスチャンでありながら、名譽を重んじない。私はお前の忠義を信じて、謀叛心で迎へられた。お前はヴァンデーの人たちのためにわしの生命を引受けておきなながら、反つて命を取らうとしてゐるんだ。お前が今殺さうとしてゐるのは、誰だか解るかい？ それはお前自身だぞ。お前は國王様からわしの命を奪つて、その代り未來永劫、自分を惡魔の手に渡してしまふのだ。さあ、勝手にお前の罪を犯せ。それで結構だ。お前は極樂を安賣するんだ。お前のお蔭で、惡魔は勝つだらう。お前のお蔭で、教會は倒れるだらう。異端者は鐘を潰して大砲を造り、魂を救ふもので、人を殺し続けるだらう。わしが

かうして話してゐる間にでも、お前の洗禮の時鳴つた鐘が、お前の母親を殺してゐるかも知れぬ。さあ、惡魔の味方をするがい。遠慮は無用だ。なあ、わしはお前の兄を殺したが、わしは神の下働きだといふことを承知しておいて呉れ。あ、お前は神の御掬理を裁くやうな氣であるんだ。お前は空の雷を裁ける氣かい？ 呆け者奴、反つてお前の方が裁かれてしまふぞ。手出しをする前に、考へたがい。お前はこれでも特赦の資格があるとは思はないのか？ 思はない！ まあい、どつちにしても同じことだ。勝手にするがい。わしを地獄にぶち込んで、お前もお供しようつていふんなら、それも御隨意だ。我々二人の犠牲は、お前の手に握られてゐるんだ。しかし、神の前ではお前の責任になるんだよ。こんな廣い海の中に、我々二人だけが差し向ひになつてゐるんだ。さあ、やれ、片付けて、お終ひにしたらよからう。わしは年寄で、お前は若い。わしは素手で、お前は武器を持つてゐる。さあ、殺せ！

老人が舟の中に突立つて、波の音よりも高い聲でかういつてゐる間、波のうねりは光を照りかへして、交る／＼、明暗の姿を映し出してゐた。水兵は色青ざめて、額からは玉のやうな汗を流し、木の葉のやうに戦いては幾度も／＼、數珠に接吻してゐた。いよく老人の話が終つた時、彼はピストルを捨て、跪いた。

「お慈悲です、閣下、お許し下さい。あなたのお話はまるで神様のやうでございます。私が悪うございました。兄も悪うございました。私は兄の罪滅ぼしに何でも致します。どうぞ處分して下さい。」

い。御命令下さい。私は従ひます」と叫んだ。
「わしはお前を許さう」と、老人はいつた。

二、百姓の記憶は艦長の科學に劣らぬ

ボートに積み込んだ兵糧は決して無駄ではなかつた。

二人の逃走者は、遠く迂廻をしたので、海岸に着くまでに三十六時間もかかつた。一夜は海上で明かした。その夜は美しかつた。が、隠れ場所を求めてゐる者には明る過ぎる月であつた。

二人は先づ佛蘭西寄りの方から離れて、外洋をジェルシー島の方へ向はねばならなかつた。

クレイモア號が撃沈される刹那の、悲壯な一斉射撃の音が聞えた。それは獵師が森で獅子を仕留めた時の、最後の悲鳴のやうであつた。それつきり、海上はヒツソリと静まりかへつた。

クレイモア號はヴァンジャール號と同じく、悲壯な最期を遂げたのだ。しかし、光榮はその上に輝かなかつた。祖國に弓をひく者は英雄ではない。

アルマロは素晴らしい船乗であつた。彼は奇蹟のやうに手練と智慧のあらん限りを盡した。あの暗礁や怒濤や、敵の監視を切抜けて舟をやる手際は全く傑作であつた。その中に風も風ぎ、海は餘程静かになつた。

アルマロはマンキエー島を避け、ショーセ・オー・ブーフ島を廻つて、干潮の時だけ北の方に現れる入江に舟を入れ、そこで數時間の骨休めをした。それから再び南に下つて、グランヴィルとシヨール島の間を漕ぎ抜けたが、シヨール島の哨兵にも、グランヴィルの哨兵にも發見されずに、無事にサン・ミシエル灣に入つた。が、そこは巡洋艦隊の根據地であるカンカール附近だつたので、考へれば随分思ひ切つた冒険であつた。

二日目の夕方、日はひる一時間ほど前に、彼はサン・ミシエル山を後に見て、ある人氣のない海岸に到着した。そこは砂の位置が變るために非常に危険な場所であつた。幸にも潮は満ちてゐた。アルマロは舟を出來るだけ磯近くに着けて、砂の具合を見た。砂は硬かつたので、そのまま舟を乗り上げ、地上に飛下りた。老人も續いて飛び下りて、地平線の方を眺めた。

「閣下こゝはクエノン河の河口でございます。右がボーヴォアールで、左がユイーヌです。このさきにあるのは、アルドヴォンの鐘樓です」と、アルマロが説明した。

老人はボートからビスケットを取出し、それをポケットに入れながらアルマロにいつた。
「休んだらよからう」

アルマロは残りの肉やビスケットを袋に詰めて肩にかついだ。それから老人に向つて、「閣下御案内申上げませうか？ いゝえお供を……」

「どつちも要らない」

アルマロは驚いて老人の顔を見上げた。

「アルマロ、わし等はこゝで別れるとしよう。二人ぐらゐでゐたつてなんにもならない。千人か、さうでなけりや一人の方がいゝ」

老人は言葉を切つて、ポケットから微草のやうな緑の絹リボンを取り出した。その結び目の真中には金色の「百合の花」が刺繍してあつた。

「お前は字が讀めるかい？」と、老人が尋ねた。

「いゝえ」

「そりや反つて合せだ。字の讀める人間は邪魔になる。お前は記憶はいゝか？」

「はい」

「それは結構。いゝかい、アルマロ。お前は右へ行け、わしは左へ行かう。わしはフージェールの方へ行くから、お前はバズージュの方へ行くがいゝ。百姓らしく見えるから、その袋は持つて行つたがいゝ。武器は隠してしまへ。あそこの茂みから杖を一本切つて行くんだ。脊の高い麥畑の中を潜つて行け。生垣の蔭に隠れて行け。根根を越えて、牧場の中を突切るんだ。通行人とは離れて歩け。往來や橋は通るな。ポントルソンへははひるな。さうだ、クエノン河を越さなきあならないんだね？ どうする心算かな？」

「泳ぎます」

「よろしい。それから、また徒渉をする所があるね。どこだか知つてゐるかい？」

「アンセーとヴェー・ヴィエルの間です」

「よろしい。お前は流石に郷國の者だよ」

「しかし、もう追つけ夜になります。で、閣下はどこでお寝になりますか？」

「わしのことは自分でするからいゝよ。それよりお前はどこで寝るかい？」

「この邊にや、朽木が澤山あります。水兵になる前は百姓でしたもの」

「その水兵帽は危険だから捨てしまへ、麥藁帽なら直ぐ手に入るだらう」

「百姓の棕櫚帽子ならどこにでもあります。漁師にいへば誰だつて賣つて呉れます」

「よろしい。そこで聞くが、お前は森を知つてゐるかい？」

「残らず知つてます。ノアールムーチエからラヴァルまでは」

「お前は決して忘れちやゐないね？」

「少しも忘れてません」

「よろし。そこでだ、氣をつけて聞いて呉れ。お前は一日に何里歩けるね？」

「十里か、十五里、いや十八里ぐらゐ。必要とあれば二十里でも」

「よろしい。今わしがいふことを、一言でも忘れちやならないよ。お前はサン・トーバンの森へ行け」

「ランバルの傍のですか？」

「さうだ。サン・リユールとブレデリアックの間、その谷間の空地の端れに、大きな栗の木が一本ある。お前はそこで泊るんだ。そこなら誰にも見つからないから」

「あれなら私も知つてますが、樂に隠れられます」

「そこでお前は合圖の口笛を吹くのだ。お前は口笛が吹けるかい？」

アルマロは頬をふくらませて、海の方を向いた。すると、梟のホー／＼といふやうな聲が聞えた。

その聲は暗い森の奥から聞える夜鳴きのやうで、いかにも梟に似た無氣味な音であつた。

「よろしい。なか／＼うまいぞ」と、老人がいつた。

そして、アルマロの前に緑の絹リボンを差し出して、

「これがわしの司令官の綬だ。これを持つて行け。わしの名はまだ人に告げることは出来んが、この綬で充分だ。この百合の花は、タンブルの牢獄で皇后陛下が親しく刺繡せられたものだ」

アルマロは地に片膝ついた。そしてをの／＼きながら、その「百合の花」の綬を受取つて肩に持つて行つた。が、ふと吃驚したやうに接吻を止めて、「してもいゝでせうか？」と訊ねた。

「いゝとも。お前は十字架に接吻するぢやないか」

アルマロは「百合の花」に接吻した。

「さあ起て」と、老人がいつた。

アルマロは起ち上つて、綬を懐の中にしまつた。老人は續けていつた。

「さあ、よく聞けよ。これが命令だ。『起て、反抗せよ、助命すべからず。』それから、サントーバンの森の空地で、お前は口笛を吹くんだ。それを三度繰返すんだぞ。三度目に、地の中から一人の男が飛び出して来る」

「森の下草の穴の中からでせう。私あ知つてますよ」

「その男は、『國の心臓』とも呼ばれるフランシユノーといふ者だ。お前は、その男にその綬を見せるんだ。それで萬事は解る。それから、お前は自分で道を見つけて、アスチエの森に行くんだ。そこにはムースクトンといふ綽名のついた、人に情をかけることを知らぬ跛足の男がある。お前はその男に、わしが頼みにしてゐるといふことを傳へて、その教區を動員するやうにいへ。それから、プレールメルから一里あるクイエボンの森に行くんだ。そこで、また梟の鳴聲をすると、一人の男が穴から出て来る。それはプレールメルの判事で、前にはあの立憲議會なるものゝ一員だつたが、人がい方の人間で、トールといふ男だ。その男には、脱走貴族ゲール侯領のクイエボン城を固めるやうに傳へろ。谷や、小さい林や、高低があつていゝ所だ。それからお前は、サン・トゥエン・レ・トアへ行つて、わしの見るところでは立派な首領だが、そのジャン・シユアーンに會ふのだ。その次に、ヴィル・アングローズの森へ行つて、ギツテールに會ふのだ。この男は、マルチンと呼ばれてゐるが、それには、グービル・ド・プレフラン老人の婿で、アルジャンタンのジャコバン黨を指揮してゐるクルメルといふ男を警戒するやうに命令して呉れ。これだけのことをよく覚えて置くんだよ。わしは

何も書かない、書いてはならないんだから。ラ・ルーアツィが名簿を書いておいたため、何もかもぶち壊しになつてしまつたんだ。それから、お前はルージュブリーの森に行くんだ。そこには、長い棹を使つて谷を飛び越すことの得意なミエレットがある」

「それは棒飛びといふんです」

「お前には、それがやれるかね？」

「棒飛びが出来なくつちや、ブルターニュ人だの百姓だのつていへやしませんよ。あの棒と来らやあ、私等の仲間内でさ。手や脚を繼ぎ足して呉れるんですからね」

「それから、先へ行かう。お前はラ・トゥールグを知つてゐるかね？」

「ラ・トゥールグを知つてゐるかつて、私はその生れなんです」

「どうして？」

「間違ひありません。私はバリニエの生れなんですから」

「確にさうだ。ラ・トゥールグはバリニエの直ぐ傍だつたね」

「ラ・トゥールグといへば、私等の殿様の、大きな圓形のお城があるところですよ。新しいお城と舊城の間には大きな鐵の扉がありますが、あれは大砲でもぶち破れませんね。新しいお城の方には、聖バルトロミーのことを書いた有名な本があつて、みんな珍らしがつて見に行つたものです。草叢には蛙が澤山あります。幼い時には、よくその蛙を苛めて遊んだものです。それから、あの地下道！そ

れも知つてゐます。今残つてゐる者で、あれを知つてゐるのは多分私だけでせう」

「どの地下道だい？ どれのことだか、わたしには解らないな」

「それは昔、ラ・トゥールグが圍まれた時に出来たんです。城内の人達が、その地下道を抜けて森の中へ逃げこんだのです」

「さうだ、さういつた地下道は、ラ・ジュベリエール城や、ラ・ユノーデー城、カンペオン塔にはあるが、ラ・トゥールグにはそんなものはない筈だが」

「ありますよ、閣下。今仰言つた分は知りませんが、ラ・トゥールグのだけは知つてゐるんです。何しろ、私や近所の生れですからね。しかも、それを知つてゐるのは私以外にはありません。世間には少しも現れてゐなかつたんですから。その道は、ロアン侯の戦争の時に使はれたので、それ以來塞いであるんです。親父がそれを知つてゐまして、教へて呉れたんです。私はそこへ入る祕密でも、出る祕密でも、ちやんと知つてゐます、森へ入りさへすりや、直ぐ塔へ行けるし、塔の中に入れば、直ぐ森へ出られるんです、誰にも見つからずにね。そんなわけで、敵勢が雪崩こんで来る時には、城の中はがら明きなんです。ラ・トゥールグの地下道はかういふ風に出来てゐるんです。私は、ちやんと知つてゐるんですから」

老人は暫く黙然としてゐた。

「そりや、なにかの間違ひだらう。もしそんな祕密があるとしたら、わしだつて知つてゐる筈だ」

「閣下、間違ひありません。動く石があるんです」

「そんなことだらう。お前等百姓は、動く石だとか、聲を出す石だとか、夜になると傍の小川へ水を飲みに行く石だなんてものを信じてゐるんだ。愚にもつかないことをね」

「でも、私はその石を動かしたことがあるんですよ……」

「石の聲を聞いたつていふものがあると同じやうにだらう。え、ラ・トゥールグはね、守りの固い、要害堅固な要塞だよ。しかし、そこから地下道を抜けて逃げられるなんて思つてゐる奴は、餘つ程の馬鹿者だね」

「でも、閣下……」

老人は肩を聳かした。「暇潰しをしてゐる時ぢやないよ。仕事の片をつけてしまはうぢやないか」この儼然たる口調は、アルマロのなほもいひ張らうとする勢ひを押へてしまつた。名も知れぬ老人は、再び言葉を續けて、

「それからだね、ルージュフーからモンシエヴリエの森に行くんだ。十二人組の隊長のベネデイシテがそこにゐる。あれも立派な人物だ。人を銃殺させておきながら、傍で祝福を唱へる男だ。戦争と感情とは兩立しないからね。モンシエヴリエから、お前は……」といひかけて、老人は言葉を切り、「わしは金のことを忘れてゐた」と、ポケットから財布と紙入を取出して、アルマロの手に載せた。「この紙入の中には紙幣で三萬法、金法にしてざつと三法五十參ばかり入つてる。法紙幣だ

んてどうせ贋紙幣だが、ほんものにしたところで同様紙屑見たいなものさ。それから財布の中に、——いゝかね、これは金貨で二千法ある。わしが持つてる金は、みんなお前へあげるよ。此處まで来れば、わしはもう何も要らないのだから。それに、わしは金を持つてゐない方がいゝんだ。先刻の續きをいふがね、モンシエヴリエからアントランへ行つてフロツテに會ひ、アントランからラ・ジュペリエールへ行つてローシユコットに會ひ、そこからノアリュエに行つてポードアン僧正に會ふんだ。どうだい、みんな覺えられるかね？」

「經文のやうに」

「それから、サン・ブリス・アン・コグルではデユボア・ギーに會ひ、モランヌではチユルバンに、シャトー・ゴンチエではタルモン公に會ふのだ」

「公爵は私にお言葉を下さるでせうか？」

「このわしがお前に話してゐるんだからね」

アルマロは帽子を脱つた。

「誰でもこの皇后陛下の『百合の花』を見れば、必ず快く會つて呉れるよ。お前の行先には、山育ちの男や田舎者がゐるんだといふことを忘れるなよ。變装をするんだ。わけはないさ。共和黨の連中は馬鹿者揃ひだから、青い服に三角帽をかぶつて、三色リボンをつけてさへるれば、どこへ行つたつて天下御免だ。もう聯隊もなければ、軍服もなし、中隊の番號もついてゐない。誰が、どんな襤褸を

着やうと、一切勝手なんだ。サン・メルヴェエへ行つて、ピーター大帝といふ綽名のゴーリエに會ふのだ。それからバルネの屯所へ行つて、眞黒な顔をした連中に會ふのだ。奴等は鐵砲に砂利をつめ、大きな音を出すために二發分の火薬を填めてゐる。なか／＼考へだ。しかしこの連中には、何かなんでも、殺せ、殺せ、殺せ！と傳へて呉れ。それから、シャルニーの森の中央の、高い所にあるヴァーシユ・ノアールの陣地に行つて、次に、アヴォアンの陣地に寄り、それからヴェールとフィールミの陣地へ廻るのだ。それから、オー・デ・ブレともいふグランボルダージュへ行くと、一人の後家が住んでゐる。その娘は英吉利人といふ綽名のトレトンと結婚したんだ。グランドボルダージュはケレーヌ教區の中だ。次にエビヌール・シユヴロイユとシエール・ギヨームと、パランヌを廻つて、どこの森の中でも、あらゆる人間に會ふんだ、味方が出來次第、みんな上下メイヌの境へ送るんだ。ヴェーリジュ教區ではジャン・トレトンを訪ひ、ピニオンではサン・ルグレを、ボンシャンではシャンポールを、メーゾンセルではコルバン兄弟を、サン・ジャン・シユール・エルヴではプチ・サン・パールに會ふのだ、この男は、またの名ブルドアゾーとも呼ばれる。それをすつかり濟ませ、「反抗せよ！ 助命すべからず！」の合言葉を囁く傳へたなら、どこでも構はない、王軍のある所へ行つて、カトリックの、王黨の軍に入るんだ。そこでデルベールか、ド・レキユールか、ド・ラ・ローシユジャクランカ、誰でもその時まで生き残つてゐる大將に會ふのだ。そして、その司令官の綬を見せろ。さうすれば、向うぢや一切の意味が解るんだ。お前は一水兵だが、カトリノーは、たかが馭者ぢ

やないか。そして、わしからの傳言として、かういつて貰ひたい。「今は二つの戦争を一緒にする時だ。大戦争と小さな戦争とを。大戦争の方では騒ぎを大きくし、小さな戦争では仕事を抄せるんだ。ヴァンデーのもいゝが、シユリアンの遺口はもつといゝ。内亂の時には、猛烈にやるのが一番いいんだ。戦争の勝負は、敵に與へる損害の多少で決するんだ」つて「彼はちよつと間をおいて、「アルマロ、わしはこれだけのことをいつて置く。お前は言葉は解らぬかもしれぬが、その奥の意味は解るだらう。わしはお前がボートを操つてゐるところを見て、お前を信頼するやうになつたのだ。お前は幾何學などは知らないが、立派に海上の作業をやつて退ける。舟が操れる者には、叛亂の指揮も出来る。お前があゝの海の陰謀を乗り切つた腕前から判断すれば、わしの命令を充分に實行して呉られると信ずる。いゝかね、今いつた大將たちにみんなかういふのだ、言葉は勿論お前のいへるやうにでいゝが、よく氣をつけていふんだぜ。わしは平野の戦争よりも森の戦争の方が勝手がいい。わしは十萬の百姓を戦線に立たせて、革命軍の銃先や、カルノの大砲の前に曝さうとは思はない。その代り、一箇月と經たぬ間に五十萬の狙撃兵を伏兵として森の中に配置したい。共和黨軍こそわしの獲物だ。戦争は密獵式にやるに限る。わしのは密林戦の作戦だ。さうだ、この言葉もお前には解らぬかもしれぬが、それはどうでもいゝんだ、これだけ解れば。いゝかね、「助命すべからず！ どこにでも伏兵を置け！」わしはヴァンデーよりも、一層猛烈なシユリアン式をやらうと思ふのだ。それから、英吉利も我々の味方だといふことを付け加へて置いて呉れ。共和國を兩方からやつつけるんだ。

全歐羅巴は我々を助けて呉れる。革命の息の根を止めてやるんだ。國王は王國としての戦争をなさるだらう。我々は革命に對して教區の戦争をしようぢやないか。と、かういふんだ。解つたかい？」

「はい、なんでもかんでも、みんな火と血に打ち込んぢやうんです」

「その通り」

「殺つつけるんだ」

「一人残らずだ、よろしい」

「私はどこへでも参ります」

「氣をつけるんだよ。この邊ぢや、誰でも直に死骸になつてしまふんだから」

「死なんて、問題ぢやありません。誰にしる、一步踏み出したが最後、それが靴の穿き納めにならんとは限らないんです」

「お前は實に勇敢だ」

「ところで、閣下の御名前を訊かれましたら？」

「まだ知らせる時ではない。お前は知らないといつて置けば、それでいゝんだ。また、それがほんたうなんだから」

「今度は、どこで閣下にお眼にかゝれるんでせうか？」

「わしの落ついた所で」

「どうすれば、そこが解るでせうか？」

「國中の者に解るやうになるからさ。今日から八日とたゝない中にわしの噂が出るやうになるよ。わしは範を示すのだ。國王と宗教のために復讐をするのだ。だから、その時人の噂に上るのは、此のわしだといふことが、よく解る筈だ」

「解りました」

「一つでも忘れちやいけないよ」

「御安心下さい」

「では、出發せい。神様の御導きがあるやうに！ 出發せい」

「すべて、御命令通りにやります。私は参ります。話しませう。命令も肯きませう。指揮も致します」

「よし」

「そして、任務が成功したら……」

「サン・ルイの騎士にしてやらう」

「私の兄のやうに。そして、もし失敗した時は、閣下は銃殺を命ずるでせう」

「お前の兄のやうに」

「承知の前です。閣下」

老人は首をうな垂れて、ヂツと感慨に耽つてゐるらしい。やがて眼を上げた時には、彼は獨りぼつちになつてゐた。アルマロは、もう地平線のかたに消えて行く一つの黒點に過ぎなかつた。折柄陽は落ちた。鷗や大鷗は、暗い沖から陸を眼鬼けて飛び歸つた。大氣の中には、あの夜の先觸れの一種の不安が漂つてゐた。青蛙は啼き出した水鳥は、スイ〜と池から飛び去つた。鷗や鴉は激しい夕暮れの喧騒を續けてゐる。磯に群がる鳥は互に呼び交はしてゐる。しかし、どこを見渡しても人間の聲はしなかつた。寂寞は静々と迫つて来る。灘には帆影一つなく、野には農夫の姿一つ見えない。眼路の届く限りは、一面の荒野が連つてゐた。砂濱の大藪は戦いでゐた。黄昏のほの白い空は、磯の上に、大きく擴がつた青白い光を投げてゐた。遙か彼方の、平原の間に散らばつた池は、丁度地に伏せた大きい亞鉛板のやうに光つてゐる。沖の方からは呻くやうな風が吹きつける。

第四篇 乞食のテルマルシュ

一、砂丘の頂

老人はアルマロの姿が見えなくなるまで立つてゐた。それから、漁師マントをピツタリ掻い込んで歩き出した。彼はゆつくりした歩どりで、深い物思ひに沈みながら、ユイーヌの方角へ向つた。ア

ルマロは、それと反對のボーヴォアールの方へ向けて行つたのだ。

背後には巨大な黒い三角形がそり立つてゐる。教會堂は羅馬法皇の三重冠の如く、城砦は胸甲の如く、その東の方に連る二つの高塔、一つは圓く、一つは四角な塔が、宛かも教會堂と町の重量を支へる手傳ひでもしてゐるやうに突立つてゐる。その背後に、沙漠を控へたチエオプスのピラミッドのやうに、茫洋たる海原を前に聳え立つてゐるのはサン・ミシエル山である。

サン・ミシエル山の灣内は、絶えず砂が移動するので、砂丘の位置も知らぬ間に變つてゐることがよくある。今では跡方もなくなつたが、その當時にはユイーヌとアルドヴォンの間に高い砂丘があつた。この砂丘はその後彼岸の大波で平になつてしまつたが、珍らしく古いもので、その頂上には、十二世紀の頃、カンタベリーの聖トマス（アムン）の暗殺に抗議してアヴランシュに催された集會の記念碑が立つてゐた。その砂丘の上に立てば、この地方一體は眼下に見渡され、間違ひなく方角を定めることが出来た。老人は、今その砂丘を上つてゐた。

頂上に着くと、彼は記念碑を背にして、その四隅にある石の柱の一つに腰を掛け、足許に展げた地圖のやうなものを調べ始めた。彼は、嘗ては馴染の深かつたこの地方を通過すべき一條の通路を探してゐるらしかつた。見渡す限り暮色の立て罩めた茫漠たる山野の中に、はつきり見えるものとしては、たゞほの暗い空に對して黒く一筋に延びた地平線より外はなかつた。

砂丘の上からは、十一ヶ町村の家々の屋根が見えた。數里も離れた海岸の鐘樓は、一つ〜みんな

な算へられた。この鐘樓は、海に出た人たちの目標にもと非常に高く作つてあつたのだ。

暫くたつと老人は、この薄明りの中でも、探かしてゐた場所を見つけ出したらしかつた。その眼は、平野と森との中頃に半分見えてゐる、樹と壁と屋根とに圍まれた廣場に注がれた。それは一つの小作地であつた。彼は「あそこだな」と、思ひ當つた者のする満足さうな鎖き方をして、生垣や畑の間を通つて行く順路を指で辿り始めた。彼は、小作地の母屋の屋根の上に形の判らぬぼんやりしたものが動いてゐるのを見つけて、幾度も眼を据ゑて眺めた。「あれは何だらう？」と、考へてゐるらしい。四邊が暗くなつてゐたので、色も判らなければ、形もぼやけてゐたが、ひら／＼してゐるところを見れば風信機ではない。といつて、旗だと片づけてしまへる理由もなかつた。

老人は疲れてゐた。で、暫くはこの休憩所に腰かけたまゝ休んでゐた。彼は、疲れ切つた者が休んだ最初の瞬間に襲はれる、とりとめもない忘我の境に浸つてゐた。

一日の中には、音のない時刻ともいへる時間がある。それは宵の口の、穏かな時刻である。その時は、丁度さういふ時間であつた。彼は泌々とそれを味つてゐた。静かに眺め、聞耳を立て、聞いた。何を？ その静けさを。荒涼たる自然にもまた憂鬱な時はあるものだ。と、突然、その静寂は、下の方を通つて行く人聲のために、破られたのではなくて、一層はつきりと感ぜられた。正しく女と子供の聲であつた。それは、暗がりの中から、思ひがけなく鳴り出した喜びの鐘のやうに響いた。木の葉みに遮られて姿は見えなかつたが、話聲する人々の群は砂丘の下を通つて、ブラ／＼原や森の方

へ行くところであつた。活々とした聲は、考へに沈んでゐた老人の耳にはつきりと聞えて來た。

一人の女の聲がした。「フレシヤール、急がうぢやないか。こつちの道かい？」

「いゝえ、あちらよ」

それから、話は、一方は甲高い、一方は低い弱々しい、二つの聲の間に取りかはされた。

「これから行かうつていふ小作地は何ていふんだね？」

「エルブ・アン・バイユよ」

「まだなか／＼かい？」

「十五分はたつぷり掛ります」

「早く行つて、おまんまを食べようよ」

「ほんたうに遅くなりましたね」

「走つた方がいゝんだけど、お前さんの子供達やくたびれちやつたらう。でも、女二人ぢや、三人の子は抱いて行けないよ。それにお前さんは、ちゃんと一人抱いてるんだからね、フレシヤール。ずるぶん重いだらう。その食しん坊は乳離れさせたのに、やつぱし抱いて歩くんだね。癖になるよ。歩かしておやり。なあに、しようがないさ、スリーブが冷めちやつたつて」

「あゝ、あなたはなんていゝ靴を下さつたんでせう！ まるでわたしのために誂へたやうよ」
「素足で歩くよりはいゝだらう、ねえ」

「ルネ・ジャンや、もつと早く歩くんだよ」

「さうだ、この子のせいで遅れたんだよ。まあ、會ふ女、會ふ女におしやべりしなきや氣が濟まないんだからね。これでも、もう一人前なんだよ」

「ほんとにさうよ。でも、まだ五つちやありませんか」

「ねえ、ルネ・ジャン、お前はなんであの村の女の子に話をしかけたんだい？」

男の子の聲が答へた。「だって、知つてる子だもの」

女はまたきいた。「なんだつて？ お前はあの子を知つてるのかい？」

「うん、今朝からお友達になつたんだよ。面白いことをして遊んで呉れたんだもの」

「こりや驚いた！ この土地へ来てから、まだ三日にしかならぬちやないか。それに、こんなちびのくせに、もう好い女をこさへるなんて！」と、女が大きい聲を出した。

聲は次第に遠ざかつて行つた。そして一切の音はヒタと止んだ。

二、耳はあれども聞えず

老人は身動きもせずニチツとしてゐた。何も考へてゐるのではない。たゞボンヤリ夢を見てゐるやうなものである。その周囲は、悉く程かに、物みな憩ひ、安らかさと静寂に包まれてゐた。砂丘の上はまだかなり明るかつたが、原の方は殆んど暮れ落ち、森の中はすつかり夜になつてゐた。月

は東の空から上つて來た。まばらな星も青白い天を點綴した。激しい心遣ひや思ひわづらひで一杯になつてゐるこの人物も、しばしはこの大自然のたとへやうもない美しさに我を忘れてしまつた。が、やがて朧ろげながらも、希望の黎明が身内から湧出て來るやうな感じがした、もし希望といふ言葉が公民戦で活躍するといふことに使へるとすれば、あの恐ろしい海上を脱れ出て再び土を踏んだ今は、すべての危険は去つてしまつたやうな氣がした。彼の名を知つてゐる者は一人もない。彼は何の索線も残さず、敵の手から脱出して、かうしてたつた一人であるのだ。有難いことには、海の上には足跡も残らない。彼の一身は完全に隠れ、忘れられてしまつたばかりか疑はれてさへもゐないのだ。彼はいふにいはれぬ心安さを感じた。もう少ししたら、そのまゝ寝入つてしまつたかもしれぬ。身神ともに、揉みに揉み抜かれて來たこの人に、静かな故郷を不思議なほど美しいと思はせたのはその天地に満ちた深い静寂であつた。

耳に聞えるものとしては、海から吹寄せる風の音しかなかつた。が、その風の音も、ひつきりなしの低音であるから、しまひには耳にも馴れて、音ではなくなつてしまふのだ。

と、突然、彼は立ち上つた。

彼は忽ち我に歸つて、地平線の彼方を見やつた。その眼は一心に何物かを凝視してゐる。

彼の凝視してゐたものは、眼の前の平野のどつつきにあるコルムレーの鐘樓であつた。で、その鐘樓には、正しく何か非常な異變が起つてゐる。

鐘樓の輪廓は空を背にはつきりと浮き出している。塔の上には三角の屋根があり、屋根と塔との間には、四角で庇がなく、四方から見すかされるやうになつてゐる鐘の吊場がある。これがブルターニュ風の鐘樓の構造であつた。

ところが、見ればその四角な高殿は、一定の間隔を置いて、開いたり閉つたりしてゐた。その高い空所は、すつかり白くなつたかと思ふと、忽ち黒くなる。チラツと空が透いて見えたかと思ふと、忽ち見えなくなる。明るくなつたなと思へば、暗くなる。しかも、鋸で鐵床を打つやうに、その開いたり閉つたりは、いつまでも同じ調子で繰り返された。

このコルムレーの鐘樓は、老人の立つてゐた場所から二里程先にあつた。彼は、右の方の、これも地平線上に眞直ぐに突立つてゐるバゲ・ピカンの鐘樓を見たが、その鐘樓の高殿も、コルムレーの鐘樓と同じやうに開いたり閉つたりしてゐた。左の方のタニスの鐘樓を見ても、やつぱりバゲ・ピカンの鐘樓と同じやうに、かはるく明暗を繰返してゐる。

彼は地平線の彼方に聳える鐘樓を、片つ端から見廻した。左の方にはクールテイルや、プレセー、クロロン、クロア・アヴランシャンの鐘樓、右の方には、ラ・シユール・クエノンや、モルドレー、デバの鐘樓、直ぐ前にはポントトルソンの鐘樓が見える。ところが、どの鐘樓も申合せたやうに、鐘の吊場が明るくなつたり暗くなつたりしてゐた。

これは一體何事だらう？ 他でもない、すべての鐘が一齊に鳴つてゐたのだ。

そして、こんなに鐘が見えたり見えなくなつたりするところを見れば、餘程激しく鳴つてゐるに違ひなかつた。

何のために、そんなに鳴らしてゐるのだらう？ これは疑ひもなく、非常警鐘である。

さうだ、警鐘を打つてゐるのだ。しかも、狂ほしいばかりに、到るところで、一切の鐘樓で、この教區でも、どこの村々でも、打鳴らしてゐるのだ。しかし、彼の耳には何も聞えなかつた。

それは、距離が遠くて音が届かないばかりでなく、海風が反對に吹きつけてゐるので、鐘の音を地平線の彼方へ吹き流してしまふからである。

老人はチツと眼を見据えて、耳を澄ました。

警鐘の音は聞えなかつたが、眼には見えてゐた。警鐘の鳴るのを見るといふのは不思議な氣持のするものだ。

この警鐘は、果して誰のために鳴つてゐるのだらう？
誰に對して、この警鐘を打鳴らしてゐるのだらう？

三、大文字の効能

確かに、誰かゞ狩り立てられてゐるのだ。

では、誰だらう？ さう考へると、この鐵血老人も思はず戰慄を禁じ得なかつた。

しかし、それが自分だなんていふことは、あり得る筈がない。彼が潜入したことを発見した者はない筈だ。この土地の代表者が、情報を手に入れたなどいふこともあり得ない。彼はたつた今上陸したばかりなのだから。クレイモア號は撃沈されて、命捨ひをしたものは一人もあるまい。しかも、クレイモア號の乗組員の中でさへ、ボアベルトロトラ・ヴェーグイル以外には、彼の名を知つてゐる者は一人もないのだ。

鐘樓では鐘が益々激しく動いてゐた。彼は思はず眼を見開いて、鐘の動きをかぞへた。と、今までの沈思は俄かにぐらつき出し、絶対に安全だとばかり思つてゐたのが、急に危険の豫感に變り、胸の中はあの鐘の動きに引摺られるやうに浪打つて來た。

その少し以前から、彼の立つてゐた上の方や、後の方でかすかな物音が聞えてゐた。それは木の葉の觸れ合ふ音のやうであつた。最初のうちは氣にも留めなかつたが、その音は止まなかつた。そして飽くまで耳に入れずにおくものかといつた風に根氣よく續くので、彼もとうとうその方を振りかへつて見た。それは紛れもない一枚の紙、たゞ一枚の紙に過ぎなかつた。風は頭の上の記念碑に貼つてあつた大きな張出を引裂かうとしてゐるところであつた。その掲示は、まだ濕つてゐるところを見れば、貼つてから間もないらしく、風の玩具になつて危く引剥がれさうになつてゐた。

老人は反對の側から砂丘の上つて來たので、今までその掲示が眼に止まらなかつたのだ。彼は腰かけてゐた石の柱の上に立つて、風で剥がれた隅つこを手で押へた。空はまだ明るかつた。

六月の黄昏は長い。砂丘の下の方は既に暗くなつてゐたが、上の方はまだ明るかつた。張出の一部は大文字で印刷してあつたし、それにまだ明りも充分あつたので、全文を読むことが出來た。それにはかう書いてある。

「一にして不可分の佛蘭西共和國」

「シエルブル海岸の軍隊に派遣せられたる人民委員、プリユール・ド・ラ・マルヌは左の布告をなす——密かにグランヴェイル海岸に上陸したる元フォントネー子爵、自稱ブルニーユ侯のラントナック侯爵に對し、爾今法律の保護を與へざることを宣告す、同人の首には賞金を附す、生死を問はず、同人の身柄を引渡したる者には六萬法を與ふ、右金額は紙幣に非ずして金貨を以て支拂はるべし、——シエルブル海岸警備隊の一箇大隊は前記元侯爵ラントナック搜索のため即時出發すべし、——各市町村は全力を擧げて援助すべし——」

一七九三年六月二日、グランヴェイル市廳に於いて之を作製す。

署名　　プリユール・ド・ラ・マルヌ

この署名の下に、もう一つの署名があつた。しかし暗さは暗し、非常に字が小さかつたので、老人の眼にはもう讀むことが出來なかつた。

老人は帽子の庇を眼深に下げ、マントを順まで引き上げて、急足で砂丘を下つた。この明るい砂丘の上に居ることは、全く危険であつた。彼はたしかに、落ちつき過ぎたのであつた。四邊は蒼茫と

暮れて、見える所はたゞその砂丘の頂だけになつてゐたのだ。

下の暗がりの中へ入ると、やつと歩をゆるめた。そして、例の小作地へ行く道を進んで行つた。野はどこも寂しく人氣がなかつた。その時刻には、もう道行く人も絶えるのだ。

とある茂みの後へ入ると、彼はマントを脱ぎ、上衣を裏返しにして毛の附いた革の方を出し、その上からまたボロ／＼のマントを紐で首に吊下げて、それから再び歩き出した。

月は冴えてゐた。間もなく、古い十字架の立つてゐる二叉道の角に出た。十字架の臺石のところにもまた白い四角なものが見える。確か今讀んだあの張出しらしい。

彼はつか／＼とその方に近づいた。その時、「どこへいらつしやるか？」といふ聲が聞えた。彼はふりかへつた。

脊丈といひ、年恰好や白髪具合といひ、自分とそっくりな男が、もつとひどい襤褸を纏て生植の側に立つてゐた。まるで自分の生寫しのやうな男である。その男は長い杖をついてゐた。

「旦那あ、どこへいらつしやるのかつて、伺つてゐるんですよ」と、その男は繰返した。

「第一、わしの今ゐる所はどこだね？」と、老人は横柄とでもいひたいほどの素振で訳返した。

「こゝはタニスの御領地でございます。そして私はこゝの乞食で、旦那は殿様でございます。」

「わしが？」

「さうです、旦那はラントナック侯爵様でございます。」

四、物乞ひ

ラントナック侯爵は、(これから後は本名を呼ぶことにしよう) 静かにいつた。

「よろしい。わしを引渡せ。」

男はまたいつた。「こゝがお互自分の家でございますよ。旦那のはお城で、私のは森の中で。」

「話をつけよう。お前の仕事をせい。さあ、わしを渡したらよからう。」

男は言葉を續けて、「旦那はエルブ・アン・パイユの小作地へいらつしやる所だつたんでせう？」

「さうだ。」

「それはお止しなさい。」

「なぜだ？」

「革命軍がゐるからです。」

「いつから？」

「三日前から。」

「小作地や村の者等は抵抗したかい？」

「なあに、あなた、どの衆も歓迎ばかりです。」

「あゝ」と、侯爵は溜息をついた。

男は木立の上から見える近くの小作小屋の屋根を指して、「侯爵様あの屋根が見えますか？」

「うん」

「その上にあるものが見えますか？」

「ひらくしてあるものだらう？」

「はい」

「旗ぢやないか」

「三色旗です」と、男がいつた。

それは、侯爵がさつき砂丘の上にもた時にも眼に留まつたものであつた。

「警鐘を鳴らしてやしないかね？」と、侯爵がきいた。

「鳴らしてゐますよ」

「なんのためだね？」

「なあに、旦那のためでさ」

「しかし、わたしには聞えない」

「風が音を持つて行くからです」

男は言葉を繼いで、「旦那はあの張出を御覽になりましたか？」

「うん見た」

「あの衆が、旦那を捜してゐるんでさ」

そして、小作地の方をちよつと見やつて、「あそこには、半大隊ばかりゐますぜ」

「共和黨軍かい？」

「巴里つ子です」

「結構ぢや、行かうよ」と、侯爵はいつて、小作地の方へ一足踏み出した。

男は彼の腕を掴んで、「あそこへ行くのはお止しなさい」

「ぢや、どこへ行けといふのだ？」

「私の家へ」

侯爵は乞食の顔をまじくくと見返した

「お聞きなせえ、侯爵様、私の家は綺麗ぢやあないが、安心なもんです。洞穴よりもつと下にある

小屋です。床には海藻が敷いてあるし、天井は樹の枝や草なんです。おいでなせえ。小作地へ行け

ば銃殺されますよ。私の家へ来なさりや、お寝みになれますぜ。旦那あ、お草臥になつてるに違ひな

い。明日の朝になつて、革命軍が行つちやつたら、旦那のお好なところへいらつしやるだ」

侯爵は男の顔をジロ／＼と見ながら、

「お前は一體どつちなんだ？ 共和黨か？ それとも王黨か？」と訊いた。

「私は乞食でさ」

「王黨でも、共和黨でもないのか？」

「どつちとも思ひませんね」

「國王の味方か、敵か？」

「そんなことをいつている暇はねえんです」

「お前は近頃の騒ぎをどう思ふね？」

「私は食ふに困つてゐるんです」

「しかし、お前はわしを助けて呉れるといふぢやないか」

「旦那がお尋ね者だつていふことが判つたからでさ。法律だなんて、一體なんですか？ 法律の保護を

與へないだなんていふんだが、どうもその邊が納得が出来ませんね。一體、私なんざあ法律つてももの

の中にあるんでせうか？ 外にあるんでせうか？ さつぱり合點が行かねえんです。餓死しやうつて

えのに、——それなんざあ、法律の保護つてえものなんでせうかね？」

「いつから餓死しさうになつてゐるんだ？」

「生れて以來ですよ」

「それでも、わしを救つて呉れる氣かい？」

「でも、私や自分にいつたんです、——世の中には、私などよりもつと氣の毒な人があるんだ。私や呼吸をする權利だけは持つてるのに、それも持たねえ人があるんだつてね」

「全くその通りだ。それで、このわしを助けて呉れるといふんだな？」

「さうですとも。かうなりや、兄弟同然でさあ、ねえ旦那。私はパンが欲しいんだ、旦那は命が欲しい

んだ。ねえ、お互に食に變りはねえぢやありませんか」

「しかし、わしの首に賞金が懸かつてゐることを知つてゐるかね？」

「はい」

「どうして知つてゐるんだ？」

「私は張出を讀んだんです」

「お前は字が讀めるのかい？」

「はい、それに書く方もどうやらね。これでも滿更畜生ぢやねえつもりなんです」

「では、お前は字が讀めて、あの布告を讀んだといふのならば、このわしを引渡した者は六萬法貫

へるといふことを知つてゐる筈だな？」

「知つてゐます」

「それも、紙幣ぢやないんだぜ」

「そりや知つてますよ、金貨で」

「六萬法といへば大した財産ぢやないか？」

「さうです」

「で、わしを引渡した者は、誰でもその財産が手に入るんぢやないか？」

「その通りです。で、それから、どうしたといふんです？」

「その財産さ！」

「私もその通りのことを考へましたよ。旦那の姿を見つけると直ぐかう思つたんです、——この人を捕へさへすりや、誰でも六萬法儲かるんだと思ふとね、さうだ、早くこの人を隠してしまはなけりやあつてね」

侯爵はそのまゝ乞食の後について行つた。二人は、とある密林の中へ分け入つた。乞食の棲家はそこの中にあつた。それは、朽ちかかつた櫓の大木の中につくつた小屋のやうなもので、根の下を更に掘り下げ、上の方には櫓の枝がかぶせてあつた。そこは、暗くて、低くて、すつかり隠れてゐるので外からは見えなかつた。そして、二人を容れるぐらゐの廣さは充分あつた。

「一人ぐらゐお客のあることも考へに入れて置いたんです」と、乞食がいつた。

ブルターニュには割に多いかうした地下の住居は、百姓の言葉で、巢といはれてゐる。この名前には、厚い壁の中に造られた隠れ場所のことにも使はれてゐる。

部屋の中には幾つかの壺と、薬と乾かした海藻をゴツチャにした寝臺と、粗末な厚い蒲團があつた。臘燭が五六本と、燧石と銅、薪にする針金雀兒が一把置いてあつた。

二人は這ふやうに身體をかぐめて、部屋の内部へ入つた。太い木の根が何本か出て、妙な具合に部

屋の中を仕切つてゐる。二人はベット代用の乾いた海藻の上に腰を下した。入口になつてゐる二本の根の間から、少しばかり外光が差し込むやうになつてゐる。その時はすつかり夜になつてゐたが、眼はいつの間にか暗がりになれてしまつて、朧げな光を見出した。月の光が物に反射して、かすかに入口を照らしてゐるのであつた。部屋の一隅には、水の入つた壺と、蕎麥パンと、栗の實が幾つかあつた。

「食べませう」と、乞食が聲をかけた。

二人は栗を分けた。侯爵はビスケットを出して分配した。そして、同じ黒パンを嚙り、同じ水壺に口をつけて交るゝ飲んだ。

二人の間には話が始まつた。先づ侯爵の方から、その男に話しかけた。

「それぢや、どうならうと、どんなことが起らうと、お前にはどつちでもいゝつていふんだね？」

「そんなとこですな。旦那方あ、御領主様でせう、他の衆もね。こりや、どうせ旦那方だけのことですよ」

「それにしてもだ、近頃の騒ぎは……」

「こちとらにはなんの縁もねえ上の方のことです」乞食はすぐその後につけて、「いや、まだく上の方の出来事がありますよ、太陽が出るとか、満月になつたり、三日月になつたりさ、私の考へてるのはさういふことなんです」

壺から一口飲んで、「こりや、いゝ水だ」といひながら、侯爵にもすゝめた。

「この水は如何です？ 旦那」

「お前の名は何といふんだね？」と、侯爵が尋ねた。

「名前ですか、テルマルシュといひますがね、みんなは『物乞ひ』つていつてまじさ」

「成程ね。『物乞ひ』といふのは國の言葉だ」

「乞食つてえことですよ。村の衆はまた『年寄り』つて呼んでますがね。さうさね、もう四十年も『年寄り』といはれてをります」

「四十年も？ でも、お前だつてその頃は若かつたらうに」

「私には若い時なんてありませんでしたよ、侯爵様。旦那などは今でもお若い。旦那は二十歳の若い者の脚であの砂丘を上られるが、私などは歩くのさへも苦しくなつて来たんです。半里も歩かねえ中に、へと／＼になつちまひますからね。でも、お互は同じぐらゐの年配なんだが、しかし金持は、毎日缺かさず食つてるだけに、こちとらよりは歩がいゝんですよ。食へば保ちますからね」

乞食はちよつと言葉を切つて、また話し續けた。

「貧乏人と金持、これが恐ろしいことです。これが禍の因なんです。まあ、私にはさう思はれますね。貧乏人は金持になりたがつてゐるし、金持の方ちや貧乏人にならうなんて者はありやしねえ。それが抑もの起因ぢやないかと思ふんだがね、といつたつて、私やなにも關係はありませんぜ。しか

し、出来た事は出来た事なんだ。私や貸主の味方でもなけりや、借金した方の味方でもねえが、こゝに一つの借金があつて、なんとか片附けなくちやならねえつてことだけは解つてゐるんです。それだけの話でさあ。どつちかつていやあ、王様は殺さなかつた方がいゝと思ふんですが、なぜだつて訊かれりや、ちよつと返答に困りますよ。さういやあ、みんなの衆は、『しかし、昔は貧乏人が何でもないことで木に吊るされたことを忘れやしめえ』つて屹度いひますからね。いや、私にしても、一人の男が間違つて王様の鹿を撃つたつてんで、首を絞られたのを見たことがありますぜ。女房もありや、七人の子供までも産した男がね。いはせりや、どつちにも言分はあるんでせうが」

乞食はそこで暫く口をつぐんだが、また言葉を續けて、

「私なんざあ、ほんとの事は解らないんですがね。みんなの衆が行つたり來たりして、いろんなことが起つてゐるんです。しかし、私はこゝでいつも星の下に住つてゐるんですからね」

かういつて、テルマルシュはちよつと考へこんだが、またその先を續けて、

「私は接骨醫も少々やりますし、醫者の眞似もやります。いろんな藥草の心得もあるし、植物のこともわかるんです。で、村のお百姓の衆は、私がぼんやりしてゐるんで、つまり癡り屋だとか何とかいつて、結句魔法使で通るやうになつたんです。考へ事をしてゐるもんだから、物識りに違ひねえつていふやうな事になつてね」

「お前は土地の人間かね？」と、侯爵がきいた。

「私は郷國を出たことがねえんです」

「お前はわしを知つてゐるか？」

「知つてますとも。最後に旦那のお姿を見たのは、二年前こゝをお通りになつた時のことです。旦那あ、こゝを通つて英吉利へ渡られましたな。さつき、私はあの砂丘の上に人が立つてるのを見つけたんですよ、非常に脊の高い人がね。脊の高い人は滅多にないですよ、ブルターニュは小人の國ですから。それで、私はよつく見たんでさ、張出も讀んでましたからね。そして『あゝ、』と思つたんです。旦那があそこへ降りていらした時にや、月があつたんで、確かに旦那だつてことが解つたんです」

「さうかな、でもわしはお前を知らないね」

「旦那は私をお見掛けになつたことはあるんだが、顔など見なすつたことはねえですよ」テルマルシユはちよつと言葉を切つて、「私や、よつく旦那を見てゐたんです。施しをなさる方と乞食とでは、眼つきが違ひますからね。旦那は私の命の親ですよ。だから、今その御恩返しをするんです」

「その通りだ、お前はわしを助けて呉れたんだ」

「さうです。大丈夫お助けしますよ、旦那」といひ切つたが、テルマルシユの聲は急に重々しい調子に變つて、「それには一つ條件がございます」

「どういふんだ？」

「それは、旦那がこゝへいらして、害をしないと云ふことなんです」

「わしは、こゝへ善い事をしようと思つて來たのだ」と、侯爵がいつた。

「どれ、寝ませうか」と、乞食がいつた。

二人は海藻の床に、竝んで身を横へた。乞食は直ぐに寝入つた。侯爵は、非常に疲れてゐたけれども、暗がりの中を透かして乞食の方を凝視めながら、暫く深い物思ひに耽つてゐたが、やがて仰向けになつた。かういふ床の上では、地べたに寝るのも同じことであつた。彼はそれに氣づいて、ピツタリ顔を押しつけて耳を澄ました。地の中には不思議な音が響いてゐた。音は地の中にも傳はるものだ。彼の耳に響いたのは、正しく鐘の音であつた。警鐘はまだ鳴り續けてゐたのだ。侯爵はやがて寝入つてしまつた。

五、ゴーヴァンの署名

彼が眼を覺ました時、四邊は既に朗かになつてゐた。

乞食はもう起き上つてゐた、が、部屋の中には居難かつたので、入口の所に杖にもたれて立つてゐた。太陽はその顔をまともに照らしてゐた。

「旦那、今タニスの鐘樓で四時を打つたところです。わたしはその音を算へてました。これは風が變つたせゐですね。陸からの風ですよ。他にはなんの物音も聞えません。時鐘はそれつきり止んだ

んです。エルブ・アン・パイユ邊の小作地や村々は、静まりかへつてゐます。革命軍はまだ寝てゐるのか、出發したか、どつちかです。一番危険な時期は過ぎました。そろ／＼お別れした方が上分別と思ひます。もう出かける時間ですから」

彼は地平線の一點を指した。「わたしはこつちの方へ行きます」

そして、また反對の方角を指して、「旦那はあつちの方へいらつしやい」

乞食は、侯爵に會釋の身振をした。

そして食事の残りものを指して、「腹が減つたら、栗をもつていらつしやい」

やがて、彼の姿は樹立の中に入つて見えなくなつた。

侯爵は起ち上つて、テルマルシュが指した方角へ歩き出した。

丁度その時刻は、ノルマンディーの百姓が昔から「朝の囀笛」と呼んでゐる美しいほの／＼明であつた。鶯や雀は木の枝で囀つてゐた。侯爵は昨夜來たあの木の下道を通つて密林を抜け、石の十字架の立つてゐる角に出た。あの張出はまだそのまゝになつてゐて、朝日の光を受けて、白く、樂しさに浮き出してゐた。布告の下の方に、字が小さいのと薄暗りのために、昨夜讀みかねた文句があつたことを思ひ出した。で、彼は十字架の臺石に近づいた。布告の下の方には、「ブリユール・ド・ラ・マルヌ」の署名の下に、小さい字で書いた文句がもう一行あつた。

「前記元侯爵ラントナックの身柄にして本人に相違なき事分明の上は、直ちに銃殺に處す

べきものとす——

署名 討伐隊司令官大隊長 ゴーヴァン

「ゴーヴァン！」と、侯爵は口の中でいつた。

彼はヂツとその布告を見つめて、深い物思ひに沈みながら突立つてゐた。そして、「ゴーヴァン！」と、またもその名を繰返した。

彼は再び歩き出した。ふりかへつて、また十字架を見た。が、そのまゝ歩を返して、もう一度その張出を讀んだ。

それから、初めて靜かに歩み去つた。誰か側についてゐる者があつたなら、低い聲でなほも「ゴーヴァン！」と、つぶやいてゐるのが聞えたであらう。

彼が戻つて行つた低い道路からは、左手の方に小作地の屋根が見えるばかりであつた。彼は、刺長といふ種類の針金雀兒の花が咲亂れてゐる、急な丘の側を通つてゐた。その丘の頂は、ブルターニユの言葉で首と呼ばれる土の小山になつてゐた。丘の麓は直ぐ林になつて、視界が閉されてゐた。木の葉は日の光に湯浴してゐるやりに輝き、大自然には朝の深い歡喜が充ち満ちてゐた。

と、突然、そこに恐ろしい光景が起つた。それは伏兵が俄かに躍り上つたらしい喧騒である。光に満ちた畑や森には、忽ち物凄叫聲や銃聲が起り、たとへやうもない、凄まじい狂ほしさが渦巻き始めた。小作地の方角からは、村中の家が一把の蘆束のやうに燃えてゐるのではないかと思はれるや

うな、大きな煙が立昇り、その間から眞赤な炎が鮮かに見え始めた。すべては咄嗟の間の出来事であり、實に物凄い勢であつた。静寂から狂燥への眼まぐるしい急變であつた。美しい曙に地獄が爆發したのだ。経緯の定かでない一大恐怖だつたのだ。エルブ・アン・パイユの方角で戦争が始まつたのである。侯爵はヂツと其處に立ちどまつた。

かういつた場合には誰でも感じることだが、好奇心といふものは危険を恐れる氣持よりも強いものである。たとへ命が危くても、その事件を突止めたくなるものだ。彼は今通つて来た道の傍から、直ぐ丘の頂に上つていつた。そこへ上れば、人にも見つかるとは代り、こつちからも見渡すことが出来るのだ。彼は間もなくその頂上に達して、暫くの間そこから形勢を觀望してゐた。

果せる哉、一齊射撃と大火事とが起つてゐた。凄しい音が聞え、火の手が見えた。小作地は名狀し難い慘劇の中心になつてゐるらしかつた。この騒ぎは一體何であらう？ エルブ・アン・パイユ小作地が攻撃を受けてゐるんだらうか？ しかし、誰から？ 抑も、これは戦争なんだらうか？ それとも軍隊の懲罰ではないだらうか？ 革命軍は、よく革命政府の命令によつて、反抗する小作地や村落に火をかけて制裁したものである。例へば、法律で規定した伐材を怠つたり、共和黨軍の騎兵隊が通る密林を切り開かなかつたりした小作地や村々は、悉く焼拂はれてしまふのであつた。タニスの農園やエルブ・アン・パイユでは、命令通りの軍用道路を作らなかつたには違ひないが、これはその怠慢に對する處罰だつたのだらうか？ 小作地を占領してゐた前衛部隊に命令が下つたのだらうか？

その前衛部隊は討伐隊の「地獄縦隊」と呼ばれる隊の一部ではなからうか？

もしこの騒ぎが懲罰だつたとすれば、短時間に行はれただけ、餘程殘虐な仕打に違ひない。殘忍な行爲の常として、その處刑も手取り早く執行されたのであらう。公民戦の殘虐さは、蠻行さへもはびこらせてしまつたのだ。侯爵はいろいろの臆測を廻しながら、もう降りようと思ひつゝ、耳を澄まして、なほも様子を窺つてゐた。その間に殺戮の銃聲は止んだ、といふよりも、散らばつたといふ方が當つてゐる。侯爵は、剽悍な兵士達が勇躍しつゝ、森の中に散開して行くらしい様子を認めた。やがて茂みの下で、恐ろしい勢で突撃する氣配がした。彼等は小作地から、森の中を眼蒐けて一散に駆けて来る所であつた。突撃の太鼓が鳴る。銃聲は既に止んだ。今度こそ戦争らしくなつて来た。全軍は何者かを搜索し、追跡し、狩立てゝゐる模様であつた。確かに誰かを探してゐるのだ。物音は廣く散ばつた上に、奥行も深かつた。怒聲に罵聲が入り亂れ、勝誇つた叫び聲にえたいの知れぬ喚き聲が一緒くたになつて、たゞ囂々たる喧騒が四邊を閉してしまつた。その時突然、煙の中から物の形が見えて来るやうに、この恐ろしい騒音の中から非常にはつきりした言葉が聞えて来た。それは人の名前であつた。何千人もの聲が、繰返し叫んでゐる人の名前であつた。そして侯爵の耳には、はつきりとそれが聞えた。

「ラントナック！ ラントナック！ ラントナック 侯爵！」

彼等が探してゐた相手こそ、侯爵その人であつたのだ。

六、内亂の有爲轉變

俄かに侯爵の周圍が騒がしくなつた。と思ふと、一時に、四方八方から、銃や銃剣やサーベルの林が迫つて來た。薄明りの中から三色旗が現れた。「ラントナック！」の叫び聲は耳の側で爆發した。そして足許の草や樹の枝の間からは、険しい顔が續々と現れて來た。

侯爵は唯一人、森中のどこからでも見える高見に立つてゐた。自分の名を叫んでゐる者どもの顔は見えるか見えないぐらゐであつたが、こつちの姿はすべての者に見つけられてしまつた。森の中に千挺の銃があつたとしたら、彼はその唯一の的になつてゐたのだ。侯爵の方からは、茂みの中から自分注がれてゐる燃え立つ眸を認め得るばかりであつた。

侯爵は帽子を脱いだ。そして、その縁を折り上げ、枯れた金雀兒の長い刺を取つて、それで、ポケットから取り出した白リボンを折り上げた縁のところにとめた。そして、またそれを冠つた時には、白リボンは鮮かに浮かび出し、顔も残らず見えた。侯爵は、森へも響けと喇叭のやうな大音聲を張り上げた。

「わしが、貴様等の探してゐる人間だ。わしは、フォントネー子爵、ブルターニユの貴族、王黨軍の中將、ラントナック侯爵だ。さあ、片付けてしまへ！ 狙へ！ 撃て！」
そして、兩方の手で山羊皮のジャケットをはたけて、胸をつき出した。

侯爵は眼を下に向けて、こつちを狙つてゐる銃先を見渡さうとした。が、意外、自分は跪いた人達の群に取捲かれてゐるのであつた。

その時、大きな叫び聲が起つた。

「ラントナック萬歳！ 御領主様萬歳！ 將軍萬歳！」

それと同時に帽子は宙に飛び、軍刀は喜ばしげに舞ひ、森の中の到る處に、茶色の羅沙帽を先に引つ掛けた杖が續々と立ち並び、帽子は杖の先でクル／＼舞をした。侯爵の周圍を取卷いたのは、ヴァンデー軍の一隊であつた。彼等は侯爵の姿を見て、跪いたのであつた。

古い傳説によると、昔チューリンゲンの森には、人間に似た不思議な巨人達が住んでゐたが、羅馬人はこれを恐ろしい怪物だといひ、ゲルマン人はそれを神の權化だと思つてゐた。だから、出會した相手如何で、その巨人達は屠殺の憂目を見るかも知れないし、また神のやうに崇拜もされやうといふわけであつた。この場合の侯爵は、丁度その巨人が怪物として殺つつけられるものとはばかり思つてゐた矢先に、突然神として崇められた時のやうな感じに打たれずにはをられなかつた。

恐ろしい底光りのする澤山の眼は、一種の野蠻な情愛に満ちて、侯爵の顔に注がれてゐるのだ。
この一隊は、銃や、劍や、鍬、鎌、杖などで武装し、大きなフェルト帽や茶色の羅沙帽を冠つて、白リボンをつけ、様々な數珠や護符を持ち、膝のぬけたズボン、毛のついた上衣に、革のゲートルを穿いてゐるが、胼は露出しで、髪は蓬々としてゐた。中には悍猛な面構へをした者もあつたが、ど

の顔もみな一様に純朴であつた。

年の若い、氣品のある顔をした一人の男が、跪いてゐる人達の間を通り抜けて、大股で侯爵の方に進み出た。この男は百姓のやうに縁を折り曲げて白リボンをつけた帽子を冠り、毛のついた上衣を着てゐた。しかし、その手は白く、シャツは上等で、上衣の上に白絹の綬をかけ、それに金の欄のついた劍を吊つてゐた。頂上まで来ると、彼は帽子を脱ぎ、綬を外し、片膝を地につけて、その綬と劍とを侯爵に差出し、それから恭々しくかういつた。

「我々は一生懸命に閣下を探してをりました、そして今閣下をお見つけ申したのであります。この指揮刀をお納め下さい。この者共は、これから閣下の部下でござります。今までは、私が指揮して参りました。私は昇進させていたゞいて、今から閣下の兵卒となります。閣下、どうぞ敬意をお受け下さい。私に御命令下さい、將軍」

さういつて、彼は合圖をした。すると、三色旗を持つた人たちは森の中から出て来た。一同は侯爵の傍まで進んで、旗をその足許に置いた。それは、今し方樹の間から見えた旗であつた。

「將軍、これはエルブ・アン・バイユの小作地を占領してゐた革命軍から分捕つて来た旗です。閣下、私はガヴァールと申しまして、ラ・ルアリー侯領の者でござります」と、その指揮刀と綬を渡した青年がいつた。

「よろしい」と、侯爵はいつた。そして、落ちついて、嚴かにその綬を帯びた。

それから、彼は指揮刀を抜き、頭の上で振り廻して、「起て！ 國王萬歳！」と絶叫した。

一同は起立した。その刹那、森の奥深くから、熱狂した誇らかな歡呼の聲が擧つた。

「國王萬歳！ 侯爵萬歳！ ラントナック萬歳！」

侯爵はガヴァールの方を向いて、「みんなで何人あるんだ？」

「七千人をります」

二人は、百姓たちが金雀兒を分けてラントナック侯爵のお通り道をつくつてゐる中を、悠々と降りて行つた。ガヴァールは言葉を續けて、

「閣下、簡單極まることなんです。すべての事情は、たつた一語で説明が出来ますよ。一同は火花を散らすばかりになつてたんです。共和國の張出で、閣下を引渡した者には褒美を出すといふので、國中が王様のために蹶起したんです。それに、グランヴィルの市長が秘密に知らせて呉れたんです。この人は同志の一人で、あのオリヴィエ僞正を助けた人です。そこで、昨夜は盛んに警鐘を鳴らしたんです」

「誰のために？」

「閣下のためにです」

「うむ！」と、侯爵がいつた。

「それで、我々はやつて来たんです」ガヴァールは續ける。

「で、みんなで七千人あるんだね？」

「今日はです。明日は一萬五千人になるでせう。それだけがブルターニュの總兵員です。アンリ・ド・

ラ・ロージュジャクラン様がカトリック軍参加のために出發された時にも、警鐘を鳴らしました。

そして一夜の中に、イゼルネー、コルクー、エシヨープロアニュ、オーピエ、サントーバン、ニユエ

イユの六教區から、一萬人の同勢を送りました。彈藥はありませんでしたが、或る左官屋の家に六千

斤の煙硝があつたのを、ラ・ロージュジャクラン様は持つて行かれました。閣下はこの森のどこかに

いらつしやるに違ひないと思つて、せつせと探してをりました」

「そして、お前達はエルブ・アン・パイユの小作地の革命軍を攻撃したんだね？」

「風があつたので、奴等には警鐘が聞えなかつたんですね。何も用心してりませんでした。村の連

中は鐘間なもので、奴等をもてなしてたんです。で、我々は今朝、ふいに小作地を取巻きました。草

命軍はまだ寝ておりました。一堪りもなくやつつけちやつたんです。私は馬をもつてをります。將

軍、お乗り下さいませうか？」

「乗らう」

一人の百姓が、軍隊式の馬具をつけた一頭の白馬を引いて來た。侯爵は、ガヴァールが手傳はう

とした手も借りずに、馬上の人となつた。

「萬歳！」と、百姓達は一齊に叫んだ。

ガヴァールは敬禮をして、「閣下、本營はどこにお定めになりますか？」と訊ねた。

「先づ最初はフージェールの森だ」

「御領内の七つの森の一つでございますな、侯爵様」

「牧師が一人要るんだが」

「一人ございます」

「誰だ？」

「シャベル・エルブレの副僧正でございます」

「わしは知つてゐる。ジェルシー島へ行つたことのある男だな」

一人の牧師が列外に進み出て、「三度ございます」といつた。

侯爵はふりかへつて、「副僧正、今日は。これから仕事は澤山あるぜ」

「結構至極でございます、侯爵様」

「大勢の懺悔を聴かなきあたりませんよ。しかし、する氣のある者だけだ。無理強ひはしないから」

命令を傳へに行つたガヴァールは歸つて來た。

「將軍、御指圖をお待ち致します」

「先づ、集合地はフージェールの森だ。一同、別れてそこへ參るやうに」

「御命令は傳へました」

「エルブ・アン・パイユの小作地の者共が、革命軍をもてなしたといつたやうだつたね？」

「左様でございます、將軍」

「それで、家を焼拂つたんだね？」

「はい」

「村の方は焼いたかね？」

「いゝえ」

「村を焼拂へ！」

「革命軍は防禦しようとしたんですが、奴等は百五十人で、こつちは七千人だつたんです」

「その革命軍といふのはどこの者だね？」

「サンテルの軍隊です」

「國王の首を斬る時、鼓手に命じて太鼓を打たせた男だ。それぢや巴里の聯隊だね？」

「半個聯隊です」

「その隊の名は？」

「將軍、旗には『赤頭布大隊』としてありました」

「畜生共奴！」

「負傷兵はどう致しませうか？」

「止めを刺してしまへ」

「捕虜はどう致しませうか？」

「銃殺せい」

「八十人程あります」

「残らず銃殺するんだ」

「女が二人をります」

「それも一緒だ」

「子供が三人をります」

「それは連れて来い。その上で處分するでしょう」

さういつて、侯爵は馬を進めた。

七、赦免すべからず（巴里市會の命令）

助命すべからず プルターニユ貴族の命令

タニスの近くでかうした事件が起つて居る間に、例の乞食はクロロンの方へ向つて歩いて行つた。彼は年をとつてゐるので、足どりはおそく、餘り遠路は歩けなかつた。ラントナック侯爵にもいつたやうに、一里の四半分も歩くともう草臥れてしまふのであつた。けふはクロア・アヴランシャンへ

近道をして行つたのだが、そこから歸つて来た時にはもう日が暮れてゐた。

マセーから少し先へ行くと、木の下道は林を出外れて小高い所へ出る。そこはよく見晴らしが利いて、西の方は海まで見渡すことが出来た。

一條の煙が、ふと彼の眼に留まつた。

煙ほど穏かなものはない。けれども、同時に又煙ほど恐ろしいものもない。平和な煙もあれば、兇悪な煙もある。一筋の煙、——その煙の濃さと色こそは、平和と戦争、友愛と憎悪、歡喜と墓場、生と死の、あらゆる差別を示すものである。樹立の中から立昇る一筋の煙は、世の中の最も美しいもののシムボルといへやう。そこには賤が家の圍爐裡があるのだ。が、時にはこれほど恐ろしいものはないかも知れない、そこに大火事が起つてゐる時には。そして、人間のあらゆる幸福も、痛ましい不幸も、時としては、風の意のままに吹散らされるこの果敢ない煙に現れてゐるのだ。

テルマルシュが眺めてゐた煙は、穏かでない煙であつた。

煙の色は眞黒で、火元が靜かに燃えてゐないと見えて、時々パツと紅蓮の炎を吐出してゐた。

火はもう餘程下火になつたらしいが、煙の立昇つてゐるのはエルブ・アン・バイユのあたりであつた。

テルマルシュは足を早めて、その煙の方へ急いだ。非常に草臥れては居たが、どうしてもその原因を知りたかつたのだ。間もなく、小作地や村の背後の丘の上に着いた。

見れば、小作地や家々の姿はもう見えなかつた。

果々たる小屋の残骸が、まだ盛に燃えてゐた。それがエルブ・アン・バイユだつたのだ。

宏莊な宮殿が焼けるよりも、一層痛々しい感じに打たれる火事がある。それは藁屋の焼ける時だ。藁屋の焼えてゐるのはまつたく惨めなものである。それは貧窮の狙つて舞下りる劫掠であり、地べたの蟲けらに襲ひかゝる禿鷹である。そこには、人を暗い氣持に導く矛盾がある。

聖書の傳説がほんたうだとすれば、火事を見たものは石像に化したといふ。テルマルシュも、暫くはその石像になつたやうにヂツと突立つてゐた。眼のあたりに見る痛ましい光景が、彼を石像のやうにしたのだ。恐ろしい破壊は音もなく行はれてゐた。そこには叫び聲一つ起らず、煙には人間の溜息一つ混つてゐなかつた。この劫火は、柱の碎ける音や、藁の燃えるパチ／＼いふ音の外は、なんの音もたてずにこの村を焼き盡して行くのであつた。時々、煙のなびいた隙から屋根の焼け落ちた家が見える。大口を開いた部屋の中は眞赤な炎でルビーのやうに輝き、ぼろ布は眞紅の塊と化し、見すほらしい家財道具は半面に紫色を帯び、炎の幕を背景にして盛に燃えてゐる。テルマルシュはこの兇惡な慘事に打たれて、眼がくらむのを感じた。

家の近くの栗林にも火が移つて、何本かの栗の樹は盛に燃え出した。

彼は、なんか人の聲が、救ひを求める聲か悲鳴でも聞えさうなものだと思つて耳を澄ました。が、炎の外には動くものがない。火の外悉く押黙つてゐた。さては、みんな逃げてしまつたのだらう

か？

テルマルシユは丘を降つた。

その眼前には陰惨な謎が横つてゐた。彼はヂツと眼を見据ゑたまふ、急ぎもせず、その方へ近づいて行つた。彼はその廢墟の方へ陰のやうにゆつくりと歩み寄つた。自分ながら、墓場の中をさ迷ふ幽霊のやうな気がしてならなかつた。

彼は小作地の家の門のあつた所へ來た。そして庭の中を覗き込んだが、周囲の壁はみな落ちてしまつて、外側を取圍んだ小屋と一続きになつてゐた。

が、それまで見た光景はまだなんでもなかつた。彼はたゞ恐ろしいものを見ただけであつた。が、今度こそ身の毛もよだつ光景が現はれたのであつた。

庭の真中に、一つの黒い山が出來てゐた。その片側は炎で照らされ、もう一方は月の光を受けて、

踊ろげにそれと首肯される。それは正しく人の山であつた。死骸の山であつた。炎はその水溜りにその死骸の山のまはりには、大きな水溜りが出來てゐて、少し燻ぶつてゐた。炎はその水溜りに

も映つてゐたが、火が映らなくても、色は初めから眞赤だつたのだ。それは血の海であつた。

テルマルシユはそこへ近づいた。そして、折り重つてゐる塊を一つ／＼調べて見た。それはみんな死骸であつた。炎も赤々と輝いてゐた。月は照つてゐた。

炎も赤々と輝いてゐた。

積重ねられた死骸は、みな兵士であつた。靴は奪つて行つたと見えて、どれも素足であつた。武器も取り上げられてゐたが、青い軍服だけは剝がれずにあつた。あつちこつちの手足や頭の間、三色リボンをつけた帽子が轉がつてゐた。みんな共和黨の兵士だつたのだ。それは、昨夕まではピン／＼して、エルブ・アン・バイユの小作地に屯してゐたパリ子の子の連中であつた。彼等はいづれも虐殺されたのである。それは、死骸の位置がちゃんと揃つてゐるのを見れば判る。命令一下、銃殺されたものらしく、しかも手際よく殺られてゐた。みんな完全に死んでゐる。山と積まれた死骸の中から、呻き聲一つ洩れて來なかつた。

テルマルシユはその死骸を一つ残らず検めて見たが、いづれも銃弾で射抜かれてゐる。銃殺した側では先を急いでゐたものらしく、死骸を埋める手数を省いて行つてしまつたのだ。

テルマルシユは、やがて引返さうとして、ふと庭の低い壁の方へ眼をやつた。その壁の片隅から四本の足が突き出てゐるのが眼についた。その足には靴ははまつてゐたが、他の足よりは小さかつた。

テルマルシユはその方へ近寄つた。見ればそれは女の足である。壁の後には、二人の女が竝んで横はつてゐた。やつぱり銃殺されたのだ。

テルマルシユは腰をかゞめてその死骸を眺めた。一人の女は軍服のやうなものを着て、その傍には、毀れて空になつた水筒が落ちてゐた。それはあの酒保女であつた。頭に四つの弾丸が喰込んでゐた。そして、すつかり息が絶えてゐた。

テルマルシユはもう一人の女を調べた。こつちは百姓女であつた。顔は青ざめ、口を開いて、眼は瞑つてゐた。頭にはどこにも傷がない。女の着てゐた衣服は、確か長旅のせみであらう、着古してぼろ／＼になつてゐたが、倒れた機にまくれたものと見えて、胸は半分はだけてゐた。テルマルシユが胸を一杯に開いて見ると、肩に弾丸の貫通した圓い傷口があつた。鎖骨が碎けてゐる。彼はその白い胸をデツと見つめた。

「こりやあ、子持ちだな」と、彼はつぶやきながら、そつと身體に觸つて見た。まだ冷たくはなつてゐない。

女は鎖骨を碎いた肩の傷の外は、どこにも傷がついてゐなかつた。心臓の上へ手を當てがつて見ると、微かながら鼓動が感じられる。女は死んでゐなかつたのだ。

テルマルシユは驚いて起ち上るなり、恐ろしい聲で怒鳴つた。「誰かゐないか？」

「お前かい、乞食さん！」と、聞えるか聞えないぐらゐの低い聲が答へた。

それと同時に、廢墟の穴から一つの頭が出て來た。それから、小屋の残骸の間からもう一つの顔が現れた。それは命から／＼隠れてゐた二人の百姓であつた。生残つたのはこの一人だけである。

乞食のなじみのある聲で、やつと安心したのであつた。二人は隠れ場所を這ひ出して、テルマルシユの方へやつて來た。しかし、胸慄ひはなかく止まない。

テルマルシユは怒鳴ることは出來たけれども、落ちついて話すといふことは出來なかつた。ひどく吃驚した時にはさうなるものだ。

テルマルシユはその二人に、足許に横つてゐる女を指して見せた。

「この女はまだ生きてゐるかい？」と、一人の百姓がきいた。

テルマルシユはさうだといふ風に首肯して見せた。

「そつちの女も生きてゐるかい？」と、もう一人の百姓がきいた。テルマルシユは頭を横に振つた。

最初に顔を出した方の百姓はまた言葉を續けて、

「他の連中はみんな死んぢやつたらう？ 俺あみんな見てたんだ。俺は穴倉の中に隠れてたんだが、あんな時には、家族のないのがどんなに仕合せだかわからないな。俺の家は焼けちやつたよ。お、エス様！ 誰も彼も、みな殺しになつちやつたんだ。この女は三人の子持だつたんだよ、みんな小さいのばかりでね。子供達が『お母さん！』つて泣くし、女は『子供達』つて、呼んでたんだ。それなのに、母親は殺してしまふし、子供達は連れて行つちやつた。俺はみんな見てたんだよ、なんてえことだらうな！ みんなを殺した連中はもう出發しちやつたんだ。奴等は満足してたよ。子供達は連れてくし、母親は銃殺しちやつたんだ。しかし、この女はまだ死んでゐないんだらう、お前はさういつたね。まだ脈があるのかい？ ねえ、おい、乞食さん、この女あ助かると思ふかね？ 俺等て手傳つて、お前の巢へ運んで行かうか？」

テルマルシユは首肯した。

森は直ぐ小作地に續いてゐた。三人は、木の枝や羊齒の葉で直ぐ擔架を造つた。そして、ちつと身動きもしないその女を擔架に載せ、二人の百姓が頭の方と足の方に廻つて擔架を擔ぐと、テルマルシユは女の腕を握つて、脈を見ながら密林の中へ入つて行つた。歩きながら、二人の百姓は話し合つてゐた。月の光は血塗れになつた女の青ざめた顔を照してゐたが、百姓達はその物凄さに膽を冷しながら、先刻の恐ろしさを語り合つてゐる。

「みんな殺しまふ！」

「なんでもかんでも焼いぢまふ！」

「あゝ神様！ これから先は、みんなこんな風になつて行くのかな？」

「こんなになつたのは、命令を下したあの脊の高い年寄りのせゐだ」

「さうだ、あの人が指圖したんだ」

「銃殺が始まつた時にや、あの人の姿は見えなかつたな。やつぱりあそこにゐたんだらうか？」

「いゝや、もう出發してたんだ。しかし、どつちにしても同じことさ、みんなあの人の命令でやつたんだから」

「それぢや、やつぱしみんなあの人のせゐになるな」

「なに、現にかういつたよ、——殺せ！ 焼け！ 無慈悲に殺つけろ！ つてね」

「あの人は侯爵だな」

「さうだとも、こゝの侯爵様だもの」

「みんな、何とか呼んでたつけな？」

「ラントナックの殿様だよ」

テルマルシユは空の方を睨んで、口の中でつぶやいた。

「それを知つてゐたらなあ！」

第二部 巴里篇

第一篇 僧侶のシムールダン

一、シムールダン

シムールダンは純潔な、しかし陰鬱な良心の持主であつた。その性質には、どこか斷乎たるところがあつた。彼はもと僧侶であつたが、それが實は重大な問題なのだ。人間は、澄んだ空のやうに、暗い奥底の知れぬやうな沈着を見ることがある。それは何者か？ 人間の心を暗にするからである。シムールダンの心を夜にしたのは僧侶の生活であつた。僧侶育ちの者はいつまで経つても矢張僧侶である。

人の心を夜にするものも、時に輝く星を残して行くことがある。シムールダンには有徳の善智識であった。が、その徳も眞理も、暗闇の中で輝くばかりであつた。生立ちに至極簡單である。初めは村の僧で、或る大家の家庭教師を勤めてゐた。その後ちよつとした遺産が轉がり込んだので、自由な生活に入つたのであつた。彼は何よりも先づ執拗な人間であつた。人がやつとこを使ふやうに、瞑想の力を使つた。一旦考へ出したが最後、おしまひまで究めつくさず止めてはならないものと信じてゐた。そして、實に頑固に考へ込んだ。歐羅巴の國語は悉く解る上に、他の語學も多少はやつてゐた。彼は絶えず學問を續けた。そのお蔭で獨身生活も餘り苦にならなかつたが、實はこんな極端な抑壓主義は人間にとつてこの上ない危険である。

自尊心から出た場合もあれば偶然のこともあり、またその高潔な人格に基いた場合もあつたが、彼は僧侶としての誓約を完全に守つたけれども、その信仰を守ることには遂に出来なかつた。科學は彼の信仰を破壊してしまひ、教理は頭の中から消えてしまつた。その後よく心を落ちつけて自分を反省して見ると、精神が不具になつてゐることに氣がついた。僧侶の誓約を破り棄てることだけは出来なかつたが、自分といふものを改造して人間にならう、それも峻嚴な方法でやらうと努力した。家族といふものを切離してしまつたので、彼は國家を家とした。妻といふものを娶ることが出来なかつたので、人道と結婚した。しかし、この大きな満足も、結局のところは空虚だつたのだ。

百姓の兩親は、彼を僧侶にして、庶民の階級から出世させようとしたのであつたが、彼は自分から進んでもとの庶民の中へ戻つて行つた。

しかも、彼は熱情的な力を以て戻つて行つたのだ。困つてゐる者に對しては、恐ろしいほどの慈悲を以て接した。シムールダンは僧侶から哲學者になり、哲學者から殉教者になつたのだ。ルイ十五世が在世の頃から、シムールダンは臆けながら共和主義の考へを持つてゐた。しかし、その頃の彼が描いてゐた共和國はどんな共和國であつたらう？ 恐らくはプラトンの共和國か、或ひはまたドラコンの共和國でもあつたらう。

愛することも禁められた彼は、憎むことを習つた。彼は虚偽を憎み、王政と神權政治と、己の法衣を憎んだ。彼は現在を憎んで、熱心に未來に呼びかけた。彼は未來に對するのをくやうな豫感を感じ、心の中でその形相を描いてゐた。未來の形相は恐ろしいやうにも、また素晴らしいやうにも映つた。彼はこの人類の悲しむべき不幸を絶つために、今直ぐ世を救ふ復讐者が出て來なければならぬと考へてゐた。彼は遠くからその大詰を望んで、胸を躍らせてゐた。

一千七百八十九年にはその大詰が遂にやつて來た。その時、彼の肚はちやんと出來てゐた。シムールダンはこの素晴らしい人類の更生劇の中に飛び込み、論理的な立場から、つまり彼の型のやうな人間の言葉でいへば徹底的に突進して行つたのである。論理といふものは和らぐことを知らないのだ。彼は大革命の時代を通つて來た。そして、その力強い呼吸に打たれて來たのだ。八十九年にはパスチ

ユが陥ち、民衆の苦難は終を告げた。九十年の八月十四日には、封建制度が滅びた。九十一年には、ヴァレンヌで王朝が断絶し、九十二年には共和国が生れた。彼は革命が呱呱の聲をあげるのを見た。しかし、彼はこの巨人を恐れるやうな人間ではなかつた。少しも驚かなかつたばかりか、あらゆる方面から、急に大きくなつて来たこの運動は彼を奮起させずにはおかなかつた。もう年寄りの仲間入りをしていゝぐらゐの年配であつたに拘らず——その時丁度五十になつてゐたが、僧侶は一般の人よりも老け易い——彼もまた、革命と一緒に伸び始めた。事件は、年と共に益々大きくなつて行つた。そして彼もまた、事件と共に大きくなつて行つた。最初の中は、革命が中途で失敗しやしないかと心配してゐた。仔細に観れば観るほど、正義と根柢は充分革命の側にあつた。彼はいよいよ以て革命を成功させなければならぬと思つた。そして、革命が益々臆病者に恐怖を興へるやうになつて来るに従つて、彼の信念は一層固くなつた。未來の星に輝くこの智慧の神ミネルヴァが、同時に戦争の神パラスで、その圓い楯にはゴルゴンの首がついてゐるやうにと彼は望んでゐた。(譯註) ゴルゴンはメドゥーサと竝ぶ希臘神話中の三女怪の一、頭髮悉く蛇で顔の恐ろしく醜惡な女夜叉、見る人をみな石に化する) またその神の眼は、時あれば、惡魔共を睨み据ゑて地獄の眼光を摺伏させ、恐怖に報ゆるに恐怖を以てするやうにと願つてゐた。

かうして、彼は九三年を迎へた。

一千七百九十三年は、歐羅巴對佛蘭西の戰であり、同時に佛蘭西對巴里の戰爭であつた。それで

は、革命は一體何であつたのか? それは、佛蘭西の歐羅巴に對する勝利であり、巴里の佛蘭西に對する勝利であつたのだ。九三年といふ戰慄すべき瞬間が、十八世紀の他のすべての年を合せたものよりもなほ廣大な意義を持つのはそのためである。

歐羅巴が佛蘭西を攻撃し、佛蘭西が巴里を攻撃する! これほど悲壯な事件があるだらうか? それは正に、史詩の姿をとつた戯曲である。

九十三年は實に緊張した年であつた。嵐は怒りと暴威の限りを盡した。しかし、シムールダンに至極平氣であつた。こんな恐ろしい壯絶な大擾亂の中心は、彼が翼を張るには持つて來いの場面であつた。彼は暴風の中の海鷲のやうに、内には深い沈着さを持ちながら、至つて冒險好きであつた。擲猛で、落着きを持つた鳥は、大風と闘ふやうに出來てゐる。暴風の魂といふやうな人物も確かにある。

彼は夙から、慈悲心などいふものは、隣れな人々以外の者に對しては持合せてゐなかつた。身慄ひするやうな苦痛にも、よく堪へ忍んだ。そして、どんなことでも厭とはいはなかつた。それが彼獨得の長所である。殊に、人の嫌がる汚い病人などを助けようとする親切は神々しいほどであつた。彼は自分で腫物の膿を吸つてやらうとして、病人を探し廻つた。いくら立派な行爲であらうと、胸のむかつくやうな嫌なことは、誰しも一番實行し難いものである。ところが、彼はさういふ事を好んでやつた。或る日、慈善病院に入院してゐた一人の男が、咽喉の腫物のために呼吸が塞つて死にさうに

なつてゐた。臭い、氣味の悪い、傳染するかも知れぬ濃が一杯溜つてゐる。それを直ぐ切開しなれば命が危いのだ。そこに居合せたシムールダンは、その腫物に口をつけて吸ひ出してやつた。濃が口一杯になるとそれを外へ吐き出し、また吸ひ出し吸ひ出して、とうとう危い命を取り止めてやつた。その時彼はまだ僧衣を着けてゐたので、側にゐた者がかういつた。「貴下がかういふことを王様にして上げたら、僧正になれること請合ですよ」——するとシムールダンは、「王様だつたらこんなことをしてやるものか」と答へた。この行とこの答とが口から口に傳へられ、彼は一躍巴里の細民街の人氣者になつてしまつた。

その人氣がまたひどく素晴らしいもので、苦しむ者や、泣く者、脅かされる人達は、みんな彼の思ひ通りになつた。あの買占商人に對する民衆の憤激が爆發した時でも——元來それは頗る見當違ひな憤激ではあつたが、群衆がサン・ニコラス港の石鹼を滿載した船を掠奪しようとするのを、シムールダンはたゞの一言で止めさせた。サン・ラザールの門に集つて、片つ端から馬車を停めてゐた亂暴な群衆を解散させたのも彼であつた。

あの八月十日の事件の二日後に、民衆の先頭を切つて、歴代國王の銅像を倒して廻つたのも彼であつた。銅像は倒れるはずみに死人や怪我人を澤山出した。ヴァンドーム廣場では、レーヌ・ヴィオレといふ女が、ルイ十四世の銅像の頸に繩をつけて引張つてゐたが、倒れた拍手にその下敷になつて潰されてしまつた。このルイ十四世の銅像は丁度滿百年間立つてゐたわけである。建設されたのが一

六九二年の八月十二日で、倒されたのが一七九二年の八月十二日であつた。コンコルド廣場では、ギャンゲルロといふ男が、銅像を倒してゐる民衆のことを「惡漢共」といつたので、ルイ十五世の銅像の臺石の上で打殺された。銅像は粉微塵に打毀された。後になると、その破片で銅貨を鑄造つた。銅像の腕だけは助かつた。それはルイ十五世の右腕で、羅馬皇帝もどきに、グツと差出した恰好の腕であつた。これはシムールダンの發意で代表者を擧げ、バスチーユ牢獄に三十七年間埋もれてゐたラチュードといふ男の許に届けさせた。このラチュードが、巴里を見下すこの銅像の主ルイ十五世の命令によつて、首枷と鐵鎖に責め苛まれ、あのバスチーユ牢獄の奥深く、生きながら朽ち行かうとしてゐた頃には、いつかこの牢獄は陥ち、この銅像は倒れると豫言し得た人があつたであらうか？ 彼が牢獄から脱け出して、その代りに王國が打込まれ、罪人の彼が、自分の逮捕狀に署名したこの青銅の腕を我がものとしたり、「泥の王」の遺物が唯この青銅の腕一本になつてしまつたりしようとは、誰が考へ得たであらうか？

シムールダンは、自分の中に聲があつてその聲に耳を傾けるといふタイプの人間であつた。かういふ人間は、ぼんやりしてゐるやうに見えるが、實際はさうでなくて非常に注意深いものだ。

シムールダンは、なんでも知つてゐるかと思ふと、一方では何も知らなかつた。あらゆる學問をしてゐながら、實生活についてはなんにも知らなかつた。その激しい氣性はそこから出てゐるのだ。彼の眼には、ホーマーのテミスのやうに眼隠しがしてあつた。弦を放れた矢が、的を望みもしないで、

なほ舊地に的に向つて飛んで行くやうな、盲目的な確信を持つてゐた。革命の時には直線ほど恐るべきものはない。シムールダンは眞直ぐに前へくと進んだ。宿命的な撓みない歩調をもつて。

シムールダンは、社會の出來始まりは最も極端に行くのが一番安全であると信じてゐた。これは理性の代りに、論理で押して行かうとする者につきもの間違ひである。彼は議會以上に、巴里市會以上に先へ進んだ。彼は司教館黨であつた。

いつも古い司教館の廣間で集會を開くので司教館黨と呼ばれてゐた人々の集團は、團體といふよりはたゞ雑多な人が寄り集つたやうなものであつた。コンミュンもさうであるが、そこには、ガラのいつたやうに、「ポケットの數だけピストルを持つた」有力な見物人等が、しかも無言の儘で集つてゐるのであつた。司教館黨は不思議な混合體で、コスモポリタンでもあれば巴里子でもある人々の寄り合ひであつた。しかし、巴里はすべての國民の心臓が同時に鼓動する所だから、その間に何の矛盾も見えなかつた。司教館黨は庶民の廣大な白熱的意氣の中心となつた。司教館黨に比較すれば、議會はまだく冷たく、コンミュンでも微温的であつた。司教館黨は火山のやうにして出來上つた革命的產物である。その中にはあらゆる要素が含まれてゐた。無智も、低能も、廉直も、英雄主義も、癩癩も、警官も、一緒にたになつてゐた。ブルンスウィック公はそこへ密偵を出入させてゐた。そこには、スバルタ人にも優る立派な體格の所有主もあれば、船漕ぎのやうな逞しい男もゐた。そして大部分の者は熱狂的で、正直であつた。ジロンド黨は、議會の臨時議長イスナールの口を通して、か

ういふ恐るべき警告を發した——「巴里子よ、用心せよ！ 諸君の都市の石といふ石の上には、たつた一つの石の影も見えなくなつてしまふであらう。そして遂には、どこが巴里の跡であつたかを抹さねばならぬ日が来るであらう！」——この演説が司教館黨をつくりだしたのだ、即ち、今述べたやうな數人の人々が、——國籍からいへば世界各國に分れてゐるが——巴里を中心にして結束する必要があると感じたのだ。そしてシムールダンはこの團體に加はつたのである。

この團體は反動派の者に對して反動を以て酬いた。これは、革命につきものの、恐ろしい不可思議な反面である暴力といふものを社會が必要としてゐるところから生れたものである。お誂へ向の力を具へてゐた司教館黨は直ちに活動を開始した。巴里の騒動の時に、大砲を撃つたのがコンミュンで、警鐘を鳴らしたのが司教館黨であつた。

シムールダンは濟度し難いほど正直な男で、眞理のためにすることなら、なんでもかんでも正義だと信じてゐた。かういふ信念をもつてゐたので、彼はどつちの側の極端派を指揮するにも頗る適任であつたのだ。惡人達も正直な人間だと感じて、彼に満足してゐた。罪惡は、道徳に指圖させると實際よりもよく見えるものである。それは邪魔臭いことであると同時に、また愉快なことでもある。

コンミュンは議會を監視してゐた。司教館黨はコンミュンを監視してゐた。會合の席では、シムールダンは誰とでも胸禁を開いて談じ合つた。ドブサンやモモロの相談にも乗つた。ギユスマンには西班牙語で話し、ピオには伊太利語で、アーサーには英語で、ペレーラにはフランス語で話

し、公爵の落胤で、埃太利人のプロリーには獨逸語で話した。そして、彼はさういふ錯雑の中に階調をつくり出すのであつた。従つて、彼の地位は外見にこそボンヤリとしてゐたが、頗る底力の強いものであつた。エベールも彼には一目置いてゐた。

シムールダンは、その當時、この悲劇的な健氣な團體の中に抜くべからざる勢力を持つてゐた。彼は自分で間違つたところのない人間だと信じてゐたが、事實非のうちどころのない人間であつた。誰も彼の泣くのを見た者はなかつた。近づきがたい、氷のやうな高德の人、恐ろしい力をもつた正義の子であつた。

革命の側についてゐる僧侶には中途半端な人間はなかつた。眼のあたりに起つてゐる、この並外れた恐ろしい慘劇の渦中に身を投ずることは、僧侶としては、最も崇高な動機からか、最も卑しい目的のためか、どつちかでなければ出来るわけのものではない。シムールダンは崇高な人物であつた。しかしそれは孤立の崇高であり、峻しく近づき難い崇高であり、無愛想な淨らかさの中にそゝり立つ崇高であつた。つまり絶壁に取かこまれた崇高であつたのだ。高山峻嶺には、さうした一種物凄く純潔さがある。

シムールダンは普通の人の恰好をしてゐた。服も世間並のものを着て、よそ見には如何にも貧乏人らしく見えた。彼は若い時分には剃髪してゐた。年をとると、それが禿頭になつた。僅かばかり残つた髪も白くなつてゐた。彼の額は廣い。そして、その額には、注意して見ると彼の特徴がよく現れてゐる。シムールダンは性急なもののゝいひ方をしたが、いかにも熱情的な、嚴かな口振りで、言葉は短く、調子は斷乎としてゐた。口許は悲壯に苦みばしつて、眼は明るく奥深く、顔全體の上に、何ともいへぬ憤りが漲つてゐるやうであつた。

シムールダンはかういふ男であつた。
今では、彼の名を知るものは一人もない。歴史にはかうした偉大なる無名の人が幾人もある。

二、三途の川に漬からぬ部分

(譯註 地獄の川に漬かるゝ不死身になるゝいふ希臘の神話がある)

かうした人物は、果してほんたうの人間であつたらうか？ 人類の下僕は、愛情といふものを持つことが出来たであらうか？ 彼はあまりに理性家であつたために、情愛を持ち得なかつたのではなからうか？ すべてのもので、あらゆる人を容れた、彼の清濁併せ呑む廣大な度量は、誰か特別の一人にだけ狭めることが出来たであらうか？ 我々は答へる、——彼は確かに出来た。

若い時分に、王室に近い家柄の貴族の家庭教師を勤めたが、彼は教へ子であるその家の世継ぎの息子を愛してゐた。子供を愛するといふことは、誰にでも容易いことである。相手が子供であつては、どんなことでも眼を瞑つておかなけりやならない。領主だ、王子だ、國王だといつたところで、それが子供であつて見れば、大目に見てやるより外はない。無邪氣な年頃は、その祖先の罪惡をも忘れさ

せるし、まだ固らない弱々しい身體は、八釜しい階級の區別をも忘れさせてしまふ。シムールダンはその教へ子を熱心に愛した。子供といふものはいふにはれぬ不思議なもので、大人のあらゆる愛情を注げるやうに出来てゐる。シムールダンの心の中に潜んでゐた愛情といふ愛情は、悉くこの子供の上に注がれた。そして、この可愛らしい純眞な子供は、これまで孤獨の運命に置かれたシムールダンの、一種の愛情の捌け口になつた。シムールダンはいろ／＼な愛情をゴツチャにして彼を愛した。或ひは父のやうに、兄のやうに、或ひは友達に、また神のやうに愛した。彼は全くシムールダンの子になつた。肉體の子ではなくて、精神上の子に——シムールダンは父ではない。従つて彼を育てることは自分の任ではなかつた。しかし、彼は先生である。そしてその教へ子は彼の傑作となつたのだ。彼はその小公子を一人の人間に仕上げた。誰も知らなかつたが、恐らく大人物を作り上げたのであらう、それが彼の夢想だつたのだから。家族の知らない間に、——知識を啓發し、意思を鍛へ、眞直ぐな人格を作り上げるのに、誰の許可が要るだらうか？——彼はその教へ子の若い子爵に、自分の持つてゐるあらゆるものを傳へた。彼の激しい、嚴正な道義心も植ゑつけられた。その信念と良心と理想とは、若い子爵の血管の中に注ぎこまれた。彼はこの年の行かない貴族の頭腦の中へ、庶民の魂を植ゑつけたのである。

魂は乳を吸ひ、知識は母の乳房のやうなものだ。乳を飲ませる乳母と、思想を傳へる先生との間には似通つたところがある。時に乳母の方が生の母より一層母らしいことがあると同じやうに、先生

も、時としては眞の父よりも一層父らしい場合がある。

この深い精神的の父子の關係が、シムールダンとその教へ子とを結びつけてゐた。彼はその子供を一眼見ただけでも、心の底から和やかな氣持になつた。

もう少し詳しく事情をいへば、その子供は既に父親を亡くしてゐたので、自然シムールダンが父親の代理を勤めるやうな役廻りになつた。その小公子は全くの孤兒であつた。父も死に、母も夙に亡くなつてゐた。そして、世話を見てくれるものとしては眼の見えぬ祖母だけで、たつた一人の大伯父はいつも留守であつた。その中に祖母も死んだ。家長の大伯父は軍人で、非常に身分が高く、朝廷の役目も持つてゐたので、祖先傳來の居城を棄て、ヴェルサイユで暮したり、軍隊を率ゐて出征したりして、この孤兒をたゞ一人、寂しい古城に残して置いた。従つて、家庭教師はあらゆる意味に於ける先生だつたのである。

そればかりでなく、シムールダンはその教へ子が生れ落ちた時から知つてゐた。年齒も行かないうちに孤兒になつた彼が大病に罹つたことがあつた。シムールダンは、その死にかゝつた子供を夜となく晝となく看病した。醫者は手當をするもので、生命を助けるものは看病人であるが、シムールダンはとう／＼その子の生命を救つてやつた。この教へ子は、シムールダンから、徳育や、教育や、學問を授かつたばかりではなくて、病氣を全快させても貰へば、健康も授かつたのだ。また思想を傳へられたばかりではなくて、命まで授けられたのだ。何から何まで世話をしやつたものは可愛なもの

だ。シムールダンは心からその子供を可愛がった。

しかし、遂に世の常の別離の日は来た。教育が一段落つくと、シムールダンは、もう立派な青年になつてゐたその子供の許を去らねばならなかつた。かういふ別離が、何といふ冷やかな、心無い残酷さで行はれることだらう！ 家柄といふものは、なぜそんなに平気で、子供の中に魂を刻んで行く教師や、脈打つ血を残して行く乳母を追拂ふのだらう！ シムールダンは金を貰つてその門を出ると、忽ち上流の社會から賤しい世界へ立歸つてゐたのであつた。大きい者と幼さなものを隔てる仕切は再び閉ざされてしまつた。世襲の軍人である青年子爵は、初っ端から陸軍大尉に任命され、どこかの隊附になつて赴任してしまつた。貧しい家庭教師は、その時はもう心の底では僧侶生活が厭になつてゐたが、詰らない僧侶たちのうごめいてゐる薄暗い教會の地階へと再び戻つて行くのであつた。そして、それ以來といふもの、シムールダンはその教へ子に出會つたことはなかつた。

やがて革命が起つた。が、公事のために日夜奔走してゐる最中でも、自ら手懸にかけたあの若者の追憶だけは、しばし影を潜めることはあつても、遂に消え去る時はなかつた。一つの像を造り上げて、これに生命を吹込むといふことは偉大な仕事である。一つの知識をつくり上げて、それに眞理を注ぎ込むといふことは更に立派な仕事だ。シムールダンは靈魂のピグマリオンであつた。(譯註 自分の造つた像に魂が入つて、遂にそれと結婚したといふ古代の彫刻家) 人間の精神もまた子供を生むことが出来る。

この教へ子、この子供、この孤兒こそは、彼が地上で愛したたつた一人の人間であつた。さて、しかし彼のやうな人間が、こんな熾烈な情愛を燃やしてゐる時でも、どこかに人情の脆さといふものは潜んでゐたであらうか？ それは今に解る時が来る。

第二篇 デュ・パン町の酒場

一、マイノスミイカスミラダマンサス

(譯註 希臘神話中のジューピター神の三人息子、死後いづれも地獄の判官になつた。嚴正な裁判官の意に用ひられる)

デュ・パン町にカフェーと呼ばれる一軒の酒場があつた。このカフェーには、今では歴史的になつてゐる奥まつた別室がある。

非常な勢力家なために、四六時中嚴重な見張りがついてゐて、公開の場所を憚らねばならぬといったやうな人達が、度々人眼を避けるやうにして會合したのはこの別室である。一七九二年の十月二十三日に、議會の過激派とジロンド黨が有名な提携をしたのもその別室であつた。ガラがクラヴィエールをポーヌ町の安全な場所へ連れて行つての歸るさ、ポン・ロワイヤルで警鐘を聞いて馬車を停め、情報を聞きに來たのもその別室であつた。彼は、そのことは備忘録には載せてゐないが。

一七九三年の六月二十八日、三人の男がこの別室のテーブルを圍んでゐた。椅子は間を置いて、銘四角なテーブルの一邊を前に腰かけてゐたので、一方の席だけは空いてゐた。それは丁度夜の八時頃で、町はまだ明るかつたが、奥まつたこの別室はもう眞暗である。その頃はまだ贅澤品であつた洋燈が天井の釣に吊されて、テーブルを照らしてゐた。

この三人の男の中の一人は、顔の青白い、若い眞面目な男で、肩は薄く、冷やかな眼差をしてゐた。頬は神細質にピリ／＼してゐて、それが微笑ふのに邪魔になるといふ風である。髪には化粧粉をふりかけ、手袋をはめ、服には綺麗にブラシをかけて、ボタンはきちんと揃つてゐる。薄青色の服にはすこしも皺かよつてゐない。南京絹のズボン、白靴下に、襟飾を高々と結んで、レースの胸飾をつけ、銀の留金のついた靴を穿いてゐた。他の二人のうち、一方は巨人のやうで、もう一人の方は侏儒のやうな男であつた。大男の方は赤羅紗の服をだらしなく着て、カラーはつけずに、頸に襟飾を巻きつけ、その端を胸飾の下まで垂らしてゐた。ボタンがちぎれてゐるので、胸は大きくはだけてゐる。靴は裏のついた長靴で、髪は化粧粉をふりかけた跡は見えるが、ばさ／＼に突つ立ち、鬘はまるで蠶のやうであつた。顔一面に菊石があるのが特徴で、眉と眉の間には痲癩持ちの氣性を表はす皺が寄り、口許は如何にも人があさ／＼に歪んでゐる。肩は厚く、齒は大きく、人足のやうな拳をして、眼をギロ／＼と光らせてゐる。小人の方は黄色い顔をした男で、腰かけてゐると不具者のやうに見える。頭を投出すやうに後の方へつき出し、眼は血ばしり、鉛色の斑點が顔中に擴つてゐる。

た。脂だらけのピンと立つ髪はハンケチで縛りつけてある。額といふものはまるで見え、口は大きく、恐ろしい恰好をしてゐた。半ズボンではない長いズボンに、大きな靴を穿き、買つた時には白絹であつたらうと思はれる古いチョッキを着て、その上にダブ／＼した上衣をひつかけてゐた。そして上衣の襞の下に眞直ぐな線が突張つてゐるのは、短刀を呑んでゐる證據である。

第一の男はロベスピエールで、二番目の男がダントン、第三の男がマラーであつた。

その部屋にゐたのはその三人だけであつた。ダントンの前には、ルーテルのビール一杯を想出させるやうにコップが一つと、埃だらけの葡萄酒の壺が置いてあつた。マラーの前にはコーヒーが一杯、ロベスピエールの前には書類が載せてあるだけであつた。

書類の側には、十九世紀の初め學校へ上つた者なら誰でも見覚えのある、鉛製の、重い、圓形の、筋の入つたインキ壺が置いてあり、その側には一本のペンが無造作に放り出してある。書類の上には大きな青銅の印が載つてあり、「パロア之を作る」と彫つてあるが、その印はバスチーニをモデルに刻んだ精巧な縮寫であつた。一枚の佛蘭西地圖がテーブルの眞中に擴げてある。

戸の外には、マラーの用心棒ローラン・パッスといふ男が控へてゐた。この男は、コルドリニ町十八番地の運送屋で、この六月二十八日から十五日後の七月十三日には、この會議頃にはまだハツキリした考へも持たず、カンの町に住んでゐたシャルロット・コルデーといふ女を椅子で殴り倒した男である。(譯註 マラーがコルデーに暗殺された時のこと) ローラン・パッスは「人民の友」新聞の

校正刷り運びをしてゐた。その晩、主人にデュ・パン町のカフェーへ連れて來られ、マラーとダント
ンとロベスピエールのゐる部屋を嚴重に締切つて、公安委員會か、コンミュニオンか、または司教館黨
以外の者は、誰も入れないやうにしると嚴命されてゐたのであつた。

ロベスピエールはサン・ジュストにだけは戸締めを喰はせたくなかつた。ダントンはパーシユを入
れぬことを不本意に思ひ、マラーはギュスマンなら仲間に入れてやりたいと思つてゐた。

會議はもう大部長いこと續いてゐた。問題はテールの上の書類に關すること、ロベスピエール
は前以てそれを讀んで聞かせたのであつた。次第に聲が高くなつて來た。三人の人達の間には、爆發
の前觸れが現れたやうな様子であつた。激越した言葉は外部からも途切れ／＼に聞えた。その當時よ
く露臺の演説が流行したので、誰でも戸外から聽く權利があるといふ風に思つてゐた。その當時に
は、書記のフアブリシウス・パリスが、鍵穴から公安委員會の様子を覗き見したりしたものだ。ロ
ーラン・バスマも、ダントン、マラー、ロベスピエールの三人が入つてゐた部屋の扉に耳をおしつけ
て聽いてゐた。ローラン・バスマはマラーに仕へてはゐたが、司教館黨員であつた。

二、大聲は蔭でも聞える

ダントンは起ちあがり様、性急に椅子を後へ押しやつた。

「聞き給へ！ 問題は唯一つだ。共和國の危機といふ問題だけなんだ。僕の知つてゐることは、佛蘭西
を敵の手から救ふといふ一事だけだ。その目的のためには、どんな手段でも正當なんだ。あらゆる方
法、一切の手段、すべての行爲、どんなことをしたつて一向差支はない。手を組んでやつて來る危機
に對抗する場合には、僕は一切の手段に訴へるんだ。僕が一切のことを心配してゐるときには、一切
の手段を握つてゐる時だ。僕の考へは獅子みたいなもんだ。革命には、生半可や自重論は禁物だ。
復讐の女神は氣取つた猫かぶりぢやない。我々は敵を戦慄させるやうな、有能な人物にならうぢやな
いか。象は歩く時に、足の踏みどころを氣にして止つたりしやしないだらう？ 我々は敵を踏み潰し
てしまはなけりやならないんだ」と、ダントンが叫んだ。

ロベスピエールは穩かに答へた。

「それは全く結構だ」そして言葉を續けて、「問題は、敵がどこにゐるかを突止めることなんだ」

「敵は外にゐるよ。僕は追出してしまつたんだ」と、ダントンがいつた。

「敵は内にゐる。僕はそれを監視してゐるんだ」と、ロベスピエールがいつた。

「それぢや、そいつも追ひ出してしまはう」とダントンがいつた。

「内にゐる敵は追ひ出すもんぢやない」

「それぢや、どうするんだ？」

「根こそぎ殺つつけてしまふんだ」

「それは贊成だ」と、今度はダントンが感心した。

そして、更に言葉を續けて、「ロベスピエール、僕は取ていふが、敵は外にゐるんだ」

「ダントン、僕は言つておくが、敵は内にゐるんだよ」

「ロベスピエール、敵は國境にゐるぜ」

「ダントン、敵はヴァンデーにゐるんだ」

「まあ、靜かにし給へ。敵はどこにでもゐるんだ。そして君達はいづれも危険なんだぜ」と、三番目の聲がいつた。さういつたのはマラーの聲であつた。

ロベスピエールはマラーの顔を眺めて、落ちついていつた。

「一般論は止さう。僕は特別の場合のことを述べようつてんだ。事實は此處にあるよ」

「物識り！」と、マラーがつぶやいた。

ロベスピエールは、自分の前に擴げてあつた書類の上に手を置いて、

「僕は今、ブリュール・ド・ラ・マルヌからの早便を讀んでお聞かせしたし、あのジェランブルからの情報もお知らせした。ねえ、ダントン、外國との戦争なんかは問題ぢやない。今は國內戦争が一番重大なんだ。外國との戦争なんかは、肘を擦りむいたぐらゐのものだ。が、國內戦争は肝臓を食つてしまふ潰瘍だからね。今諸君の前で讀み上げたところを綜合するにだね、今まで、何人かの首領の手に分れてゐたヴァンデーが、將に結合しようとしてゐるんだ。ヴァンデーには今一人の總大將が出來かゝつたんだ……」

「山賊の大將か！」と、ダントンがつぶやいた。

「それは、六月二日にポントルソンの近くに上陸した男だ。それがどういふ人物かは、今お聞きの通りなんだ。そこで、この上陸が、同じ六月二日にベイユで、コート・ドールとロンムのブリュール代表委員が、叛逆してゐるカルヴァドスの地方の民衆に捕へられた時と一致してゐるといふ事實に注意して呉れ給へ」

「そして、代表委員がカンの城へ護送されたのと一致してゐる」と、ダントンが口を入れた。

ロベスピエールは再び言葉を續けて、

「僕は情報の大要を續けて報告しよう。森林地帯の戦争の準備が大規模に進行してゐる。それと同時に、英吉利からの援軍の上陸する用意も出來てゐる。ヴァンデーの者と英吉利人とは、ブルターニュとブルターニュだからね。フィニステール（ブルターニュ）の士人は、コンウォール（英國南部海岸地方）の百姓と同じ言葉を使ふんだからね。ピユイセイの手紙を横奪したのをお眼にかけたが、その中には、『謀叛組に二萬の赤服を配布することは、更に十萬人を蜂起させる手段となる』と書いてある。百姓の謀叛の用意が出來さへすれば、英軍が上陸することになる。そしてその計畫はかうなんだ。地圖の方を見て呉れたまへ」

ロベスピエールは地圖の上に指を置いて、話を進めた。

「英軍は、カンカールとビャンポルの間に上陸地點を選ぶことになるだらう。クレイグならサン・ブ

リユク灣を選むことになるだらうし、コーンウォリスならサン・カスト灣にするだらう。しかし、それは細目の話に過ぎない。ロアール河の左岸一帯は、叛逆のヴァンデー軍で固めてゐる。それから、アンスニスとポントルソンの間の二十八里の平野に於いては、ノルマンディーの四十教區が援助を約束してゐる。上陸は、ブレランと、イフィニアックと、ブレナップの三地點で行はれるだらう。ブレランからはサン・ブリユクへ、ブレナップからはランバル眼蒐けて進むだらう。二日目には、九百人の英吉利人の捕虜のゐるデイナンに着き、同時に、サン・ジャンとサン・メアンを占領して、そこに騎兵隊を残して置く。三日目には二隊に分れ、一隊はジュアン・シュール・ベデーから、他の一隊はデイナン・シュール・ベシュレルから出發する。デイナン・シュール・ベシュレルは天然の要害であるから、奴等はそこに砲臺を二つ築造するだらう。四日目にはレンヌにはひる。レンヌはブルターニュの鍵だ。レンヌを陥したものは勝利だ。レンヌが陥れば、シャトールヌッフやサンマロも陥る。レンヌには彈丸が百萬發と、野砲が五十門ある……

「奴等あ、それを残らず浚つて行くんだな」と、ダントンがつぶやいた。

ロベスピエールは續けた。

「いよいよ結論だ。で、レンヌからは三隊に分れて、一隊はフージェールに、一隊はヴァイトレに、一隊はルドンに向ふ順序になる。橋は落してあるから、——特にかういふ事實が述べてある事に注意していただきたい、——敵は船橋用の船と厚板とを用意すると共に、騎兵隊の徒涉出来る箇所を知つて

ゐる案内者を連れて行くことになつてゐる。フージェールからはアヴランシュへ、ルドンからはアンスニスへ、ヴァイトレからはラヴァルへ進出する。ナントは降服するだらう。プレストも陥るだらう。ルドンを占領すれば、ヴァイレヌ河の流域は直ちに自由になる。フージェールを占領すれば、ノルマンディーへの道は開けつ放しになる。ヴァイトレからは巴里への道が通じてゐる。十五日も経てば三十萬人もの山賊の軍隊が出來て、ブルターニュ全土は佛蘭西王の手に歸するだらう、とかういふのだ」

「つまり、英吉利王のものになるんだ」と、ダントンがいつた。

「いや、佛蘭西王のものにだよ」といつて、ロベスピエールは息をつぎ、

「佛蘭西王は一層よくないよ。外國人を追拂ふには十五日もあれば澤山だが、王政を廢止するには千八百年もかかつたぢやないか」

いつの間にか腰をおろしてゐたダントンは、テーブルの上に肘をつき、頭を両手で抱へて考へこんでゐた。

「君はその危険がわかるだらう。ヴァイトレは英軍に巴里への道を開くんだからね」と、ロベスピエールがいつた。

ダントンは頭を振り上げ、兩方の拳を握りしめて、鐵床でも打つやうに地圖を叩きつけた。

「ロベスピエール、ヴェルダンだつて、普魯西軍に對して巴里への道を開いたぢやないか？」

「その通りだが？」

「その通りだ、我々は普魯西軍を追つ拂つたやうに、英軍も追つ拂つてしまはうぢやないか」と、ダントンは再び起ち上つた。

ロベスピエールは自分の冷たい手をダントンの熱した拳の上に置いた。

「ダントン、シャンパーニュは普魯西の味方ではなかつたが、ブルターニュは英軍の味方なんだ。ヴェルダンを取戻すのは外國との戦争だが、ヴィトレを取返すのは國內戦争だぜ」といつて、ロベスピエールは冷やかな、沁々した調子でつぶやいた。「それこそ大變な相違だ」

それから、一段と聲を張り上げて、「安心して給へ、ダントン、そんなに殴りつけないで、よく地圖を見給へ」

しかし、ダントンはどこまでも自分の考へを固執して後へ退かなかつた。

「斷末魔が東から迫つて來るといふのに、西の方を眺めてゐるなんて、正氣の沙汰ぢやないよ！ そりやね、ロベスピエール、英吉利が大洋の中に突つ立つてゐることは僕も認めるよ。しかし、西班牙はピレネー山脈の間に立つてゐるし、伊太利はアルプス山中に立つてゐる。獨逸はラインの流れから起り、露西亞といふ大熊はそのずつと奥の方に潜んでゐる。ロベスピエール、危険は輪をなして、我々はその中に圍まれてゐるんだ。外には聯合軍があり、内には叛逆者がある。南の方には、西班牙王の爲に佛蘭西の門を開けかゝつてゐるセルヴァンがある。北の方ではデムーリエが寢返りをうつ。もつともあの男は、今までだつて佛蘭西以上に巴里の方を脅かしてゐたのだが。ネルウインドの敗

戦は、ジャンマップやヴァルミーの勝利を臺無しにしてしまふ。哲學者のラボー・サンテチエンヌは、——彼奴はいかにも新教徒らしい裏切り者だが、廷臣モンテスキューと文通をしてゐる。軍隊は散々になつた。四百人以上ある大隊は一つもあるまい。勇名を馳せたドゥー・ボン聯隊なども、今では百五十人しか残つてゐない。パマルの陣地は占領された。ジヴェに残つてゐる麥粉は五百袋しかない。ランドゥーでは退却するし、クレベールはウルムセルに壓されてゐる。マイヤンスは勇敢に奮戦してゐるし、コンデは卑怯な降服をした。ヴァランシエンヌもさうだ。しかし、それはそれとして、ヴァランシエンヌを守つたジャンセルと、コンデを防いだ老フェローは、メイヤンスを固めたムーニエと共に、天晴れ英雄たるに恥ぢない。しかし、他の者はみんな我々を裏切つてしまつた。ダルヴィルはエー・ラ・シャベルを敵の手に渡し、ムーントンはブラッセルで裏切り、ヴァランスはブレダで裏切り、ニューイーはリンブルで裏切り、ミランダはメーストリヒトで裏切つた。スタンジェルも裏切者、ラヌーも裏切者、リゴニエも裏切者、ムヌーも裏切者、デイヨンも裏切者だ。デムーリエの黄金の力は恐しい。僕は更に實例を擧げて論じよう。キユスチヌの後退はどうも怪しいと思ふね。僕は、キユスチヌは、戦路上有効なコブレンツの占領を止めて、金の儲がるフランクフルトに眼をつけたんだらうと思ふ。フランクフルトなら、四百萬法の戦費徴發にだつて堪へ得るだらうさ。しかし、そんなことは、脱走貴族の巢窟を叩き潰すことに比べたらなんでもないぢやないか。これも確かに裏切りだね。ムーニエは六月十三日に死んだ。後に残るのはクレベール一人だ。さうかうして

ある間に、ブルンスウィックが勢を増して、進んで来る。奴は、占領した佛蘭西の要塞に片つ端から獨逸の國旗を掲げてゐる。昔のブランデンブルグ侯は、今では歐洲の盟主なんだ。彼奴は佛蘭西の諸縣をどしどし掠め取る。今に見給へ、白耳義も取つてしまふから。我々は、まるで伯林のために働いてゐるやうなものだ。こんな状態をいつまでも放つて置けば、佛蘭西革命は結局ポツダム（譯註 普魯西王の居城）のために行はれたやうなものになつてしまふ。つまり、フレデリック二世の小國を一足飛に大きくしてやつたといふ素晴らしい結果になり、普魯西王のために佛蘭西王を殺してやつたやうな事になつてしまふ。

さういつて、ダントンは、恐しい勢で笑ひ出した。

ダントンが笑ひ出したので、マラーも微笑した。

「君達は銘々十八番があるんだね。ダントンののは普魯西だし、ロベスピエールのはヴァンデーだ。番が廻つて来たから、僕も意見を述べようか。ほんたうの事をいやあ、君達は實際の危険を見てないんだ。その正體といへば、カフエーと賭博宿さ。シヨアザールのカフエーはジャコバン黨で、カフエー・パタンは王黨だ。ランデヴーのカフエーは革命軍の攻撃をするし、ポルト・サンマルタンのカフエーは革命軍の味方をする。カフエー・レジャンスはブリッソの敵だし、カフエー・コラッザは味方だ。カフエー・プロコープはデイドロ黨だし、テアートル・フランセーのカフエーはヴォルテール派だ。ロトンドでは新紙幣を引き破つてしまふし、カフエー・サンマルソーではそれが大持てだ。カフ

エー・マヌーリでは麥粉の問題をやかましく論じてるが、カフエー・フォアでは怒鳴つたり、掴み合をやつたりしてゐる。ペロンでは相場師連がわい／＼騒いでる。かういつたやうな事が實は重大問題なんだ」

ダントンはもう笑つてゐなかつた。マラーは微笑を續けた。小人の微笑は巨人の哄笑よりも性が良くない。

「マラー、君は自分を嘲つてるのかい？」と、ダントンが怒鳴つた。

マラーは腰のあたりに彼獨得の癢癢を起した。その微笑はもう消えてゐた。

「あゝダントン君、君のことは覚えてゐるよ。議會の眞中で、『マラーなる者』と、僕のことを呼んだのは君だつたぢやないか。しかしね君、そんなことは許し合ふさ。お互馬鹿げた眞似をやることもあるんだから。ところが、この僕が自分を馬鹿にしてゐるつて！ さうだ、僕といふ男は一體どういふ人間だつたかね？ 僕はシャツを弾劾したね。ベチヨンも弾劾した、ケルサンも弾劾した、モルトンも弾劾した、デュフリシユ・ヴァラゼも弾劾した、リゴニエも弾劾した、ムヌーも弾劾した、パンヌヴイルも弾劾した、ジャンソンネも弾劾した、ピロンも弾劾した、リドンも、シャンボンも弾劾した。しかも一人だつて的外れた者があつたか？ 僕には、裏切者の臭がわかるんだ。そして奴等が行動を起す前に始末してしまふのが一番策を得たものだと思ふんだ。僕は、君達や他の連中が翌朝いふことを、前の晩にいふ習慣になつてゐるんだ。議會へ完全な刑法の法案を提出したのも僕だよ。今日

まで僕は何をして来たか？ 僕はいろ／＼な部隊を革命的に訓練する教育を要求した。三十二の紙匣の封印を破つた。ローランの手にあづけてあつたダイヤモンドを取り戻した。ブリッソの一味が公安委員会の委員連に白紙逮捕状を與へたことを摘發した。ランデが作つたカベ（譯註 ルイ十六世のこと）の罪惡についての報告書の不備を指摘した。二十四時間内に暴君を處刑すべきことを決議した。モーションと共和黨の大隊を保護してやつた。ナルボンヌとマルーエの手紙を読み上げることが止めさせた。負傷兵優遇の動議も提出した。六人委員会を手も足も出ぬやうにしてしまつた。モンス事件でデユムリーエの裏切りを見抜いた。敵に派遣した人民委員の安全のために、脱走貴族の家族百人を人質として取ることを提案した。國境外に出て行く代表者は、どれもこれも裏切者と認めるといふことを提議した。マルセーユの騒ぎには、ローラン一味の手が廻つてゐることを摘發した。エガリテの息子の首に賞金をかけることを主張した。僕はブーシヨットを辯護した。イスナールを議會から放逐するために、指名點呼することを主張した。僕は巴里市民が國家に對して功勞があるといふ聲明を出させた。だから、僕はルーヴェには馬鹿者扱ひを受けるし、ブルターニュからは放逐を要求される、ルーダン市は僕の追放を望んでゐるといふわけなんだ。それにアミヤン市は僕に鞭をはめがつてゐるし、コーブルグは僕が逮捕され、ばい／＼と思つてゐる。ルコアント・ピユイラヴォーは、議會に僕を狂人と認めることを提議してゐる。萬事この通りなんだ。ねえ、ダントン君、僕の意見を聴くためになかつたら、なぜこの秘密會議に呼び出したんだ？ 僕が参加したいなんて要求したつ

けかね？ そんなことは絶體になかつたらう。僕は、ロベスピエールや君のやうな反革命派の人間と談合をしようなんて氣はちつともないんだからね。話してみたところで、どうせこんなことだらうと思つてゐたんだ。君達は、ダントンにしろ、ロベスピエールにしろ、どつちだつて似たものだが、揃ひも揃つて僕のいふことが解らないんだ。一體こゝには政治家はゐないのかね？ 君達はまだく政治を研究しなきゃならない、政治のいろはから始める必要があるね。僕が今までいつたことは、つまり君達は両方共間違つてゐるといふ事なんだ。危険は決して、ロベスピエールの考へてるやうに倫敦にもありやしないし、ダントンの考へてるやうに伯林にもありやしない。危険はこのお膝下の巴里にあるんだよ。危険は、統一の缺如にあるんだ。君達を初めとして、銘々が自分勝手な事をやれるといふ權利に存するんだ。人民の明を掩ひ、彼等の意志を無政府状態に陥れる事にあるんだ……」

「無政府状態！ 君でゝもなけりや、一體誰がそんな状態をつくり出すんだ？」と、ダントンが口を挟んだ。

「ロベスピエール、ダントン、危険はそこら中のカフェーや、ウヨ／＼してゐる賭博宿や、俱樂部にあるんだ。ノアールの俱樂部や、フェデレ俱樂部、婦人俱樂部や、クレルモン・トンネール時代に僧侶のクラウド・フォーシユが創めた社交俱樂部で、一七九〇年には王黨の俱樂部であつた帝政派俱樂部や、新聞記者のプリュドナムが建てた羅紗帽子俱樂部なんかさうなんだ。それに算へ立てると

なれば、ロベスピエール君のジャコバン黨俱樂部や、ダントン君のユルドリエ俱樂部もある。危険は
餓死から来るんだ。そのために擔ぎ人夫のブランが、市役所の街燈にパリュ市場のパン屋のフランソ
ア・ドニを吊すやうな事になつたんだが、ドニを殺した腹で、擔ぎ人夫のブランを死刑に處した裁
判にも危険はあるんだ。危険は下落に下落を續けてゐる法紙幣にもある。タンブル町に百法紙幣が
一枚落ちてゐた。そこへ通りかゝつた一人の貧乏人らしいのが、『こんなものは拾つたつて手間にも
なりやしないや』といつて、行き過ぎてしまつた。相場師と買占屋、これが危険なんだ。市役所に黒
い旗を掲げるやうになつたら、——それこそ素晴らしい暴騰だ！ 君達はトレック男爵を捕へるだ
らう。が、そんなことでは腹の蟲が納まらない。あの強慾な前科者の首をねち切つてしまふんだね。
君達は、議會の議長が、ジャンマップの激戦で全身四十一個所の刀傷を負つたラベルテ・シユに名譽
の冠を授け、シエニエがその提燈持ちを動めてゐるもんだから、もう危機は脱したんだと思つてゐ
るんぢやないか？ そんなことは芝居だよ、茶番だよ。君達は、眼の前にある巴里を見てゐないんだ
ね。危険が足下にあるのに、遠くの方ばかり眺めてゐるんだ。君の警察は役に立つてゐるか、ロ
ベスピエール？ 君は市會にはベイヤンを、革命裁判所にはコツフィナルを、公安委員會にはダ
ヴィッドを、保安委員會にはクートンを密偵として入れてゐるぢやないか。ねえ、僕はみんな知つ
てゐるだらう。いゝかね、そこでかういふことになるんだ。危険は君達の頭の上にもある、足下にも
あるんだ。陰謀だ、陰謀だ、どこへ行つても陰謀だらけだ。民衆は往來で新聞を読み合つては、合圖

を交してゐる。市民證のないものが六千人ばかり、戻つて來た脱走貴族の連中や、新しがり屋が、穴
倉や、天井裏や、パレー・ロワイヤルの棧敷の裏に隠れてゐるんだ。パン屋の店先には人が列をつく
つてゐる。女連は門口に立つて手を組合せながら、『いつになつたら落ちつくんだらう』といつてゐ
る。君達は、他所へ洩れないやうにと執行委員室を閉め切つて密談してゐるけれども、君達のいつた
ことは一語々々みんな筒抜けに知れてしまふんだ。その證據にや、ロベスピエール、昨日の晩、君は
サンジュストに、『バルバルーは近頃大部肥り出したから逃げるのに困るだらうな』といつたらう。
こんな事までみんな解つてしまふんだ。さうだ、危険は到る處にある。就中中央に、巴里にあるん
だ。舊時代の連中が陰謀を廻らしてゐる。愛國者は靴もなく素足で歩いてゐるのに、三月九日に
捕つた貴族はもう釋放された。そして、國境で大砲を引つ張つてゐる筈の肥つた馬が、道を通る我
我に泥をはね飛ばして行く。四斤のパンが三法六十參もする。そして、ロベスピエールは忽ちダ
ントンを斷頭臺にかけるだらう」
「さうだ、その通りだ！」とダントンがいつた。
ロベスピエールは熱心に地圖を調べてゐた。
「この際必要なのは獨裁者だ。ロベスピエール、君は僕が獨裁論者だといふことを知つてゐるだら
う」マラーが突然大聲を出した。
ロベスピエールは頭を擡げた。

「知つてるよ、マラー、——それは君か僕かだ」

「君か僕かだ」と、マラーが鸚鵡返しにいつた。

「獨裁政治か、まあやつて見るがいゝ！」ダントンは口の中でつぶやいた。

マラーはダントンが肩をひそめたのをちらと認めた。そして再び口を切つた。

「ねえ君、もう一息だ。なんとか協定の方法を講じようや。目下の事情からいつて已むを得ないんだ。我々は以前、五月三十一日の事件ちや立派に一致したぢやないか？ ジロンド黨の問題も重大には違ないが、それは結局細目の問題に過ぎない。全般的な問題はそれよりも遙かに重大なんだ。君達のいふことにも一理はあるよ。しかし、眞理は、全般的な眞理、現實の眞理は、僕の言に在るんだ。南には聯合軍があり、西には王黨があり、巴里には議會とコンミュンとの争がある。國境ではキユスチーヌが退却するし、デムーリエが裏切りをする。一體これはどういふ意味なんだ？ 分袂だ。然らば何が必要か？ 統一だ。統一さへすれば、國內は安定する。しかし早くしなければ、それも駄目だ。巴里が革命政府の政治をとらなきゃならないんだ。もう一刻も猶豫は出来ない。明日はヴァンデーの軍がオルレアンへ入り込むだらうし、普魯西軍は巴里に侵入して来るだらう。この點は僕も認めるよ、ダントン。君にも賛成するよ、ロベスピエール。確かにさういつたところだよ。ところでだね、結論として獨裁政治といふことになつたんだ。決行しようぢやないか、獨裁政治を。革命を代表する我々三人で。お互はセルベラス（譯註 希臘神話の地獄の番犬で頭が三つある）の三つの頭

なんだ。その三つの頭の中で、一つはよく語る、それは君だ、ロベスピエール。一つは吠える、それは君だ、ダントン……」

「もう一つは齧みつく、それは君だ、マラー」と、ダントンがいつた。

「いや三つとも齧みつくさ」と、ロベスピエールがいつた。

三人はしばらく口を噤んだ。が、間もなく底氣味悪い脅迫口調の會話が始まつた。

「ねえ、マラー、結婚しようとするにや、お互相手を知らなきゃならないんだ。君はどうして、僕が

昨夕サン・ジュストにいつたことを知つたんだい？」

「それはこつちの勝手さ、ロベスピエール」

「マラー！」

「いろんなことに通ずるのは僕の義務だ。情報を集めるのは僕の仕事だよ」

「マラー！」

「僕はなんでも消息に通ずることが好きなんだ」

「マラー！」

「ロベスピエール、僕はね、君がサンジュストにいつたことを知つてるやうに、ダントンがラクローアにいつたことも知つてゐるよ。同様に、テアタンの埠頭で何が起つてるかも知つてるし、脱走貴族の女連の集るラブリップの邸の模様も手に取るやうにわかつてゐる。それに、ゴネッスの近くのチルの

家でどんな事が行はれてゐるかも知つてゐるよ。この家は元港灣の役人をしてゐたヴァルムランジュの所有物で、以前はモーリーやカザレスが出入し、後にはシーエスやヴェルジノーが出入する、今では一週間に一度づゝ『或る他の人間』がそこへ足を運んでゐるんだ」

「或る他の人間が」といひながら、マラーは意味ありげにダントンの方を見た。

「僕がちよつとでも權力を握つてゐりや、眼にも見せて呉れるんだが」ダントンは怒鳴つた。

マラーは委細構はず、

「僕はね、ロベスピエール、タンブルの塔でルイ十六世の家族を養つてた時のことを知つてると同様に、今君にいつたやうなことをちやんと知つてゐるんだよ。あの時さ、牡狼と牝狼と餓鬼共で、九月の月だけに桃を八十六籠も食つた。その頃人民たちは饑ゑに泣いてゐたんだ。それから、ローランが後庭に臨んだアルプ町の或る家に隠れて居たことも知つてゐるし、七月十四日のあの六百本の槍が、オルレアン公お抱への鎖職フオールが造つたものだといふことも知つてゐるんだ。シレリーの情婦のサンチレルの家で、みんなが何をしてゐるかも知つてゐるよ。舞踊會のある日には、あのシレリー老人が自分で、ヌーヴ・デ・マチュラン町の黄色な客間の床を磨くんだよ。ビュッヤケルソンも、そこで食事をした。相手は誰だつたと思ふかね、ロベスピエール？ 君の友人のラースールさ」

「よくしやべるな。ラースールなんて友人ぢやないぜ」と、ロベスピエールが口の中でいつた。そして、また考へこみながら別なことをいひ出した。

「それはさうと、倫敦には贋造紙幣の製造所が十八ヶ所もあるんだからね」

マラーは一段と落ちついた聲で話を續けた。その聲は相手を脅かすやうに、小さい慄へを帯びてゐた。

「君は勿體振る連中の一味だね。いゝかね、僕は何でも知つてゐるよ。サンジュストは『國家の沈黙』だなんていつてゐるがね……」

マラーはお終ひの言葉に特別の力を入れて、ロベスピエールの顔を眺め、それからまた話を續けた。

「僕はね、ロベスピエール、將來君の義妹になるエリザベット・デュプレーの手料理を食べに來いといつて、結婚者のルバがダヴィッドを招待したとき、その食卓でどんな話があるかといふことを知つてゐるんだ。僕は民衆の鋭い眼なんだ。僕は穴倉の奥から眺めてゐるんだ。それでもよく見えるよ、はつきり聞えるよ、勿論何事でも知つてゐるんだ。君は小さなことで満足してゐる。そして、自分で偉いと思つてゐるんだ。ロベスピエールは、ダミヤンの死刑の晩にルイ十五世と將棋をさしてゐたシヤラーブル侯爵の娘の、シヤラーブル夫人の御機嫌を取つてゐるんだ。さうだ、さうだ、偉さうにふんぞり返つてゐるよ。サンジュストは襟飾の中に住んでゐるし、ルジャンドルも申分のない服装をしてゐる。新調のフロックコートに、白のチョッキ、昔の前掛けなどは思ひ出して貰はないやうに胸飾をつけてゐるよ。ロベスピエールは、立憲議會ではオリヅ色のフロックコートを着、國民議會では

空色の燕尾服を着てゐたといふことを、歴史に残しておく価値があると思つてゐるんだね。そして、部屋には到る處自分の肖像が貼りつけてあるんだ……」

ロベスピエールは、マラーよりもつと落ちついた聲で口を扱んだ。

「だが、マラー、君の肖像はこの地下水渠にも出てるぢやないか」

二人は尙こんな調子の話を續けたが、口調が一段とゆつくりになつて來たのは、攻撃や反駁が益々猛烈になつて來たため、言葉の間には相手を威嚇するやうな皮肉さへ雜るやうになつた。

「ロベスピエール、君は王政の顛覆を望んでゐる者のことを、『人類のドンキホーテ』といつたぢやないか」

「君はね、マラー、八月四日の後に、『人民の友』新聞の、さうだ、僕は番號を覚えてゐる、何かの足しになるかも知れないが、——五百五十九號で、貴族の稱號は返してやるべきものだと言張したぢやないか。君は『公爵はいつまで経つても公爵だ』といつたね」

「ロベスピエール、君は十二月七日の會議で、ヴィアールに對してローラン夫人を辯護したぢやないか」

「僕の兄弟が、君がジャコバン黨員に攻撃された時に君を辯護したと同じやうにね、マラー。一體それはなんの證據になるんだい？ そんな事はなんでもないぢやないか」

「ロベスピエール、君がガラに、『僕は革命に飽いたよ』といつた、あのチュイルリー王宮の部屋の

様子はみんなが知つてゐるよ」

「マラー、君が十二月二十九日に、バルバルーを抱きしめたのはこの酒場の、しかもこの部屋だつたぢやないか」

「ロベスピエール、君はビュヅに『共和國だつて！ 一體そんなものは何だ？』といつたぢやないか」

「マラー、君が三人のマルセイユ生れのお尋ね者を仲間に入れるために御馳走してやつたのも、この部屋だつたぢやないか」

「ロベスピエール、君は市場の腕つ節の強い男を雇つて來て棍棒を持たせ、身邊の護衛をさせてるぢやないか」

「それからマラー、君は八月十日の前の日に、騎手に變裝してマルセイユに逃げやうつてんで、ビュヅに援助を頼んだぢやないか」

「九月の裁判の時には君は隠れてゐたぢやないか、ロベスピエール」

「そして、マラー、君は出しやばつてゐたね」

「ロベスピエール、君は革命の赤頭布を地面に投げつけたぢやないか」

「さうとも、裏切者が冠つてた時にはね。デュムーリエを飾るものは、このロベスピエールを穢すものだ」

「ロベスピエール、君はシャトーヴューの兵隊が通つてた時に、ルイ十六世の頭に布をかぶせるこ

とを拒んだぢやないか」

「僕は頭に布などを冠せるより、もつと氣の利いた事をやつたさ。首をチョン切つたんだからな」
そこへダントンが仲裁に入つた。しかし、それは燃えたつ炎に油をぶつかけたやうなものであつた。

「ロベスピエールもマラーも、靜かにし給へ」と、彼はいつた。

マラーは人の次に呼ばれることが嫌ひだつた。で、いきなり向き直つて、

「ダントンは一體何だつて口を出すんだ？」と詰寄つた。

ダントンは飛立つやうに立上つて、

「僕がなぜ口出しをするつて？ それはかうだ！ 兄弟檔に闘ぐのはよくないつていふのさ。庶民のために盡してゐる二人の間で、争をしちやならんていふんだ。もう外國との戦争も澤山だ、國內戦争も澤山だつていふんだ。況や内輪同志の争なんて、もうく／＼結構だ。それから革命をやつたのは僕だが、人がそれを打壊すのを黙つて見てはゐられないつていふんだ。これだけいやあ、何で口出しするのが解るだらう！」

マラーはそれに應じて、別に聲を荒らゝげもせずいつた。

「先づ君の方から決算報告をしたらいゝぢやないか？」

「決算報告！ それなら、アルゴンヌに進入してゐる軍隊や、救はれたシャンパーニュ、征服された白

耳義にゐる連中、僕が四回も鐵砲的に胸をさらした軍隊に要求し給へ。それから、革命廣場の民衆や、一月二十一日に斷頭臺に上つた先生（譯註 ルイ十六世のこと）、地に落ちた王位を取巻く連中、斷頭臺にかけられた連中に聞いて見給へ。それから、あの後家の……」

マラーは、ダントンの捲くし立てるのを遮つて、

「斷頭臺は處女の勇婦だよ。種を絶やしはするけれども、子供は生まないよ」

「それは確かかね？ 僕は必ず子供をつくらして見せるよ」と、ダントンが酬いた。

「今にわかるさ」といつて、マラーは微笑した。

ダントンはその微笑を眼敏く見つけて、大聲で怒鳴つた。

「マラー、君は韜晦の好きな人間で、僕は開けひろげた眞晝間の人間だ。僕は蛇のやうな生活は嫌ひだよ。船蟲になることは僕の性に合はないんだ。君は穴倉に住んでゐるが、僕は街頭に住んでゐる。君は誰ともつき合はないが、僕の方は、誰でも通りがりのものが顔を見ながら話しかけられるやうにしてゐるんだ」

「そりや素敵だ！ 序に僕の住んでゐる所まで上つて來ないかね？」と、怒鳴りつけるやうにマラーがいつた。と思ふと、ピッタリ微笑を止めて、急に嚴然たる口調で詰寄つた。

「ダントン、君のシャトレの檢事の職務に對する報酬といふ名目で、モンモランから國王の名を以て君に拂つた現金三萬三千法はどうなつたかい？」

「僕は七月十四日の一人なんだ」ダントンは昂然と言放つた。(譯註 一七八九年バスチーユが陥つた日)

「それから家具倉庫や、王冠のダイヤモンドはどうなつたかい？」

「僕は十月六日の一人なんだ」(譯註 一七八九年の十月六日に、巴里の民衆がヴェルサイユ宮殿を襲

つた)

「それから君の女房役のラクローアが、白耳義でやつた盗奪の後をどうしたね？」

「僕は六月二十日の一人だよ」(譯註 一七九二年のこと巴里の民衆がルイ十六世に迫つて上奏を企てた。王は革命の赤頭布を冠ることを餘義なくされた)

「それから、モンタシエへ貸した金はどうしたい？」

「僕は民衆を指揮して、ヴァレンヌから引返させたんだ」(譯註 一七九一年六月二十日ルイ十六世モンメヂーへ逃走を企て、途中ヴァレンヌで捕へられて巴里に連戻さる)

「それから、君の出した金でつくつたオペラ座はどうしたい？」

「僕は巴里の各區を武装させたんだ」

「それから司法省の機密費十萬法はどうなつたね？」

「僕は八月十日を捲起したんだ」(譯註 一七九二年、チュイルリー王宮襲はれ、ルイ十六世はタンブルに幽閉された)

「國民議會の二百萬法の機密費はどうなつた？ その四分の一は君が取つたんだが」

「僕は敵の進軍を喰止めたし、諸國の聯合を遮つたぞ」

「賣女！」と、マラーが怒鳴つた。

ダントンは恐ろしい形相をして突立つた。

「さうだ、俺は淫賣だよ。俺は身を賣つた、しかし世界を救つたんだぞ」

ロベスピエールは黙つて爪を嚙んでゐた。彼は聲を出して笑ふことも出来なければ、ふくみ笑をすることも出来ない。彼には、ダントンの豪快電光の如き笑ひも、マラーの辛辣針の如き微笑もなかつたのだ。

ダントンは更に言葉を續けて、

「僕は大洋のやうなもんだ。満潮の時もありや、干潮の時もある。潮が退いてる時は僕の淺瀬が見え透くし、潮の満ちてる時には僕の波が見えるだらう」

「君の泡さ」と、マラーが半疊を入れる。

「僕の暴風だよ」と、ダントンがむきになる。

マラーは、ダントンと同時に立ち上つてゐた。そしてとり／＼怒鳴り始めた。一匹の蛇は忽焉として龍に變つたのだ。

「おい、ロベスピエール、おい、ダントン、君達は僕のいふことを聞かうとしないんだな！ よし、

それぢや僕はいふが、君達はもうお終ひだぜ。君達の政策はもう行詰つてしまつたんだ。もう切抜ける途がないんだ。それなのに君達は、墓場の入口の外一切の戸を閉めきつてしまふやうなことばかりやつてるぢやないか」

「それが我々の偉大なところなんだ」と、ダントンは肩を聳やかした。
マラーは性急に、

「ダントン、氣をつけろ。ヴェルニヨも口が大きくて、肩が厚くて髪め面をしてゐるんだ。ヴェルニヨはまたミラボーやお前のやうに、菊石面なんだ。それでも、結構五月三十一日をやつつけたぢやないか。(譯註 一七九三年ジャコバン黨のジロンド黨に對するクーデター) おや、お前は肩を怒らしてゐるな。變に肩を聳やかすと、首が落ちることがあるぜ。ダントン、お前にいつて聞かせておくれ、お前のその胴間際と、ゆるい襟飾と、だぶくの長靴と、小食と、大きなポケットはだね、どれもこれもルイゼットに關係のある代物ばかりだぜ」

ルイゼットといふのは、マラーが斷頭臺につけた異名である。マラーは舌鋒を轉じて、
「それから、ロベスピエール、お前は穩和派だよ。しかし、そりや何の役にも立たないぜ。まあやるさ、頭に粉をふりかけて、髪を手入れし、服にブラシをかけて、せつせと品の悪いおやつしをするがいや。小綺麗なレースをつけて、毛を縮らかして、縮毛髪を冠つて、華手に飾り立てたがいゝや。しかし、お前はやつぱりグレーヴ廣場へ行く組なんだ。ブルンスウィックの宣言書を読むもよからう

さ。しかし、やつぱり弑逆者のダミヤンと同じ待遇を受けるんだぜ。いくらおめかししたつて、結局は四匹の馬で寸断々々に引き裂かれるのが落さ」

「コブレンツの反響だ」と、ロベスピエールは口の中でいつた。(譯註 脱走貴族の根據地)
「ロベスピエール、俺は何の反響でもないんだ。俺はみんなの叫聲なんだ。あゝ、お前は若いや、お前は。ダントン、お前は幾つだい？ 三十四だらう。ロベスピエール、お前は幾つだい？ 三十三か。そこで俺だがね、俺はどの時代にも生きてゐた。俺は大昔からの人間の苦みなんだ。俺はざつと六千年になるんだ」

「それに違ひない、六千年以來、岩の中の蝦蟇のやうに、カインは憎しみの中に潜んでゐた。その岩塊が崩れて、カインは人間の中に躍り出した。それがマラーつていふ名なんだ」と、ダントンがやり返した。

「ダントン！」と、マラーが怒鳴つた。殺氣立つた輝きが眼の中に燃えた。
「うむ、どうしたつてんだ？」と、ダントンが應ずる。

かうして、三人の恐るべき人物は議論を續けてゐた。雷のなりはためくやうな争論である。

三、心の奥底からの激動

談話は暫く途切れた。三人の巨人は、その瞬間ふと己に歸つて、銘々の考へに耽つた。獅子も九

頭の怪物を恐れる。ロベスピエールは非常に青くなり、ダントンはひどく赤くなつた。二人の体内には戦慄が駆け廻つた。マラーの眼の野蠻的な輝きは消えてゐた。恐るべき僚友達をも恐れしめるこの男の顔には、再び穏かで、冷静な傲然たる落ちつきが現れた。

ダントンは負けたなと感じた。しかしどこまでも降参しようなどとは思はず、再び口を切つた。

「マラーは獨裁政治と統一のことを大きな聲でいつてゐるが、實際は滅余々々にしてしまふ力しか持つてゐないぢやないか」

ロベスピエールは薄へらな唇を開いた。

「僕はアナシャルシス・クルーツと同じ意見だ。つまり、ローランにもマラーにも賛成し兼ねるね」

「ところで僕はだ、ダントンにもロベスピエールにも賛成出来ない」と、マラーが應じた。そして、二人の相手を睨み据ゑるやうにして、

「ダントン、君に忠告することがある。君は戀をしてゐるんだ。君はまた結婚しようと思つてゐる。

だから以後政治なんかに関係するのは止したはうがい、そのはうが賢明だぜ」と、捨白を浴びせ、出て行かうとするやうな素振で扉口のはうに一步しりぞいて、二人に底氣味の悪い挨拶を投げかけた。

「おさらばだ、諸君」

ダントンとロベスピエールは、思はずツツとした。

その瞬間、部屋の奥から一つの聲が起つた。「マラー、君は間違つてゐるよ」

三人は同時にふり向いた。マラーが盛に怒鳴つてゐる最中に、誰か奥の扉口から入つて來てゐたのを、誰も氣がつかずにゐたのだ。

「あゝ君か、シムールダン市民ぢやないか、今日は」と、マラーが會譯した。

それは果してシムールダンであつた。

「マラー、君は間違つてると、僕はいつてゐるんだ」と、彼は再び繰返した。

マラーは顔色綠色になつた。彼が蒼白になる時は、いつもさういふ色になるのであつた。

シムールダンは言葉を續けて、

「君は確に有望な人物だ。しかし、ロベスピエールとダントンは必要な人物なんだ。なぜ君は齎すんだね？ 團結だ、團結だ、市民諸君。民衆は統一を望んでゐるんだ」

この男の入つて來たことは、冷水をぶつかけたやうな効果を齎した。で、内輪同志の喧嘩に他人が飛込んで來た時のやうに、兎も角も表面だけは納まつてしまつた。

シムールダンはテーブルの方へ進み出た。

ダントンもロベスピエールも顔だけは知つてゐた。二人はこの民衆の尊敬する隠れた傑物を議會の傍聴席で時々見たことがあつた。それにも拘らず、形式屋のロベスピエールは訊ねた。

「市民の方。君はどうして此處へ入つて来たんだね？」

「彼は司教館黨の人間だよ」と、マラーが説明した。その聲には、何となく服従的な響があつた。

マラーは議會を壓し、巴里市會を指揮してゐたが、司教館黨を恐れてゐた。それが法則である。

ダントンはマラーの折れたのを見てとつた。

「あゝ、シムールダン市民たら餘計な人ぢやないよ」といつて、ダントンはその新來の客に手を差し出した。

「丁度いい、シムールダン市民にわけを話さうぢやないか。ほんたうにいゝ所に來て呉れた。僕は議會の過激派を代表してをり、ロベスピエールは公安委員會を代表し、マラーは市會を代表し、そしてシムールダンは司教館黨を代表してゐるんだ。この人は裁決を與へて呉れるために來たんだよ」とダントンはいつた。

「よからう。問題はなんだい？」と、シムールダンは無造作に、しかも眞面目にいつた。

「ヴァンデーなんだ！」と、ロベスピエールが答へた。

「ヴァンデー！」と、シムールダンは鸚鵡返しにいつた。それから更に言葉を續けて、

「それこそ非常な危険だ。萬一革命が減ひるやうなことがあれば、それは必ずヴァンデーのためだ。

一つのヴァンデーは十の獨逸より恐ろしい。佛蘭西が生きるためには、ヴァンデーを殺さなきゃならぬ」

この數語は、忽ちロベスピエールを味方につけた。

けれども、ロベスピエールはこんなことを訊いた。

「君はもと僧侶ぢやなかつたですか？」

シムールダンの僧侶らしい様子がロベスピエールの眼にはすぐ映つた。彼はシムールダンの外見を見ただけで、肚の中まで見抜いたのだ。

「さうだよ、市民」と、シムールダンは答へた。

ダントンはその問答を遮つて、

「そんなことは問題ぢやないぢやないか。立派な僧侶であれば、他の連中よりは價值があるんだ。革命の時には僧侶だつて市民になつてしまふさ、鐘だつて武器や大砲に變つちまふんだからね。ダンジューも僧侶だ、ドーヌーも僧侶だ。トマ・ランデはエヴルの僧正だ。ロベスピエール、君は議會で

ボーヴェエーの僧正のマッシュユーと並んで坐つてゐるぢやないか。ヴォージョアの副僧正は八月十日の謀叛委員會に加はつてた。シャポーはフランス派の托鉢僧だ。ジュエー・ド・ポームの宣誓(譯註)

一七八九年六月二十日ヴェルサイユの王室テニス場に於ける國民議會組織の宣誓(譯註)を發案したのはジェルであつた。國民議會は國王より上だと宣言させたのは僧侶のオードランだ。立法議會へ、ルイ十六世の玉座の天蓋を撤することを要求したのは僧侶のグートだ。王統の斷絶を煽動したのは僧侶のゴアールだ」

「役者のコロ・デルボアの尻押しでさ。仕事はその連中の手でやつたんだ。僧侶が玉座をひつくりかへすと、喜劇役者が國王を蹴倒したのさ」と、マラーが皮肉つた。

「ヴァンデーの話に戻らうぢやないか」ロベスピエールが口を挟んだ。

「それで、どうしたんだ？ そのヴァンデーぢや今どんな事をやつてゐるんだね？」と、シムールダ
ンが訊ねた。

ロベスピエールはそれに答へて、「かういふわけさ。ヴァンデーは大将を見つけただよ。ヴァン
デーは今に恐るべきものになるよ」

「その大将といふのは誰だね？ ロベスピエール市民」

「ブルターニユの貴族と自稱してゐる、元侯爵のラントナックなんだ」

シムールダンはハツとした。

「その人なら僕は知つてるよ。その家の家庭教師をしてゐたんだから」と、いひながら暫く考へて
るが、「軍人になる前は好い男だったかね」

「ローザンに似たピロンのやうにか」と、ダントンがいつた。

「さうだ、彼は年寄りの道楽者だったんだ。さぞかし凄じいことだらうな」と、シムールダンは感慨深
さうにいつた。

「そりや残虐無道だよ。彼奴は村を焼き、負傷者を屠り、捕虜を殺し、女達まで銃殺してしまふん
だ」と、ロベスピエールがいつた。

「女を？」

「さうとも、しかも、三人の子持の女まで銃殺しちゃつたんだ。子供は、その後どうなつたかわから
ないがね。しかし、彼奴は流石に大将の器だね。戦争を心得てるよ」

「その通りだ。彼奴はハノーヴァーの戦争にも行つたがね、兵士達がつてたよ、リシュリュエーが上
で、ラントナックは下だが、ほんたうの大將はラントナックだつて。そのことを、君の友達のデュッ
ソーに話して見給へ」と、シムールダンは相槌を打つた。

ロベスピエールはちよつとの間考へこんでゐたが、會話は再び彼とシムールダンとの間に始ま
つた。

「いゝかね、シムールダン市民、その男がヴァンデーにゐるんだぜ」

「いつから？」

「三週間前から」

「彼奴の市民権剝奪を宣告する必要があるね」

「それはやつたんだ」

「彼奴の首に賞金を懸けなきやならないね」

「それもやつたんだ」

「彼奴を捕へた者には、莫大な賞金を出さなきやならないね」

「その手段もとつてあるんだ」

「法紙幣ぢや駄目だよ」

「それも心得てゐる」

「金貨だよ」

「その通りにしてある」

「奴を斷頭臺にかけるんだね」

「それはこれからやるんだ」

「誰が？」

「君が」

「僕が？」

「さうだ、君は公安委員會の全權代表になつて呉れ給へ」

「引き受けた」シムールダンは即座にいつた。

ロベスピエールは人選をするのが早かつた。流石に眞の政治家の資格を具へてゐた。彼は前に置いてある書類人から一枚の用紙を取出した。その上の方には、「一にして不可分の佛蘭西共和國、公安委員會」と刷つてあつた。

シムールダンは語を繼いで、

「宜しい、僕は確かに引受けた。暴に報ゆるには暴を以てするんだ。ラントナックが殘虐ならこつちもうんと殘虐にやらう。あの男と、命を賭けての戦争だ。神も御照覽あれだ、僕は必ず奴の手から共和國を救つて見せる」といつて、ちよつと言葉を切つたが、「僕は僧侶なんだ。構ひやしないさ、神を信じたつて」

「神様ももう時代遅れだね」と、ダントンが冷かした。

「僕は神を信じてゐるんだ」と、シムールダンは動ずる氣色もなくいひ放つた。

ロベスピエールは、厭な顔をしながらも、尤もだといふ風に首肯した。

「僕は何處へ派遣されるんだね？」と、シムールダンは訊いた。

ロベスピエールはそれに答へて、

「ラントナック討伐のために派遣された出征軍の指揮官のところへだよ。しかし一つ斷つておかなきやたらないことは、その男は貴族だよ」

ダントンは叫んだ。

「そんなことは大して意味のない問題ぢやないか。貴族だつて？ 貴族ならどうしたといふんだ？ 僧侶も入つてゐると同じことで、貴族だつて入つてゐるさ。善い貴族だつたら、立派なもんぢやないか。貴族だなんていふものは確かに一種の偏見ではあるがね、しかし、何でもかんでも一律に片附け

てしまふわけにはいかないさ。貴族を賞めるにしろ、やつつけるにしろ、要はその人によりけりだ。ねえ、ロベスピエール、サン・ジュストは貴族ぢやないか？ フロレル・ド・サン・ジュストのことさ。アナシャルシス・クルーツは男爵だ。我々の友人で、ゴールドリエの會合には缺かしたことのないシャルル・エッスは公爵で、ヘッセ・ロットンブルグ家の當主の兄弟だ。マラーの親友のモンローはモンロー侯爵だ。革命裁判所の中には、ヴィタールといふ僧侶の陪審官と、モンフラベールのルロア侯爵といふ貴族の陪審官もゐる。しかも、二人ともしつかりした人物なんだ」

「君は忘れてるね、革命裁判所の主席陪審官の……」と、ロベスピエールがいひかけた。

「アントネルか？」

「さうだ、彼はアントネル侯爵だよ」と、ロベスピエールがいつた。

ダントンは言葉をつづけて、

「共和國のために最近戦死したダンピエールも貴族だ。ヴェルダンの門を普魯西軍に開くのを恥として、頭を射つて自殺したポールベルも貴族だ」

「それにしろだ、コンドルセが『グラク家は貴族だ』といつた時、ダントンが『貴族といふ貴族は、ミラボーからお前に至るまでみんな裏切者だ』と叫んだその事實に變りはないぢやないか」と、マラーが呟くやうにいつた。

その時、重々しいシムールダンの聲が響いた。

「ダントン市民、ロベスピエール市民、君達が信頼を置くのは、恐らく尤もなことだと思ふ。しかし、民衆は貴族を信用してゐない。それも確かに間違ひぢやない。で、僧侶が貴族を監視するといふことになる、その責任は倍になる。だから、その僧侶は飽くまで頑固でなくてはならないんだ」

「違ひない」と、ロベスピエールがいつた。

シムールダンは言葉を續けて、「それから、どこまでも假借なくやらなきやならない」

「全くその通りだ、シムールダン市民。君のこれからの相手は青年なんだ。その男の倍もの年齢をした君だから、必ず彼に對して勢力を持つことが出来る。指導もしたきやならないんだが、それと同時に、上手に操縦もしなきやならないんだ。彼は軍事上の手腕はあるらしい。どの報告を見ても、その點はみな一致してゐる。その部隊はラインの軍隊からヴァンデーへ派遣されたんだ。國境の戦線では、頭腦のいゝのと豪膽なので名をあげてゐる。今彼は立派に派遣軍を指揮してゐる。そして十五日前から、ラントナック老侯爵を追ひ廻してゐるんだ。侯爵軍を壓迫しながら狩り立てゝゐるんだ。きつと、今に海つ端で追ひ詰めて、海の中に追ひ落してしまふだらう。ラントナックは老將の智略と、血氣の指揮官の武勇を兼ね備へてゐる。この青年には既に敵もあり、羨望者もある。副司令官のレシエルの如きも、彼を嫉んでゐる一人だ」ロベスピエールがいつた。

「そのレシエールは自分で總司令官になりたがつてゐるんだ。ところがこんな洒落が出来ただけでね。『シャレットの上に乗るには、梯子が要る』といふんだがね。今はそのシャレットにやられてゐるの